一方―女二宮腹の兄、以下狹衣の心
底の藻屑―飛鳥井姫君
抱きうつくしみて―其腹に生れたる子を
忍草ひとり―姫の忘れがたみの子
物ねぢけたりとも―假令育ちが惡くて人柄惡くとも我慢して
さしも―身を投ぐる迄に思ひとる方―思慮分別
疎ましかりける―飛鳥井の心立が厭はしくは思はれず
九帝氣の爲に田家せんとす、女三宮を堀川大臣に托して狹衣に妻はせんとす、狹衣の迷惑
さるべき御中―帝と堀川とは兄弟

とぞ語らひ給ひける。一方こそかく思ひの外になり給はめ、この底の藻屑だにあらましかば、侮らはしきわたくし物にて、常に抱きうつくしみてましものを、いふかひなきわざなりや、いかなる樣にてもありと聞かましかば、忍草ひとりをば、物ねぢけたりともいかゞはせむ、尋ねとるやうもありなましを、ひたすらさしも思ひなりけむよ、時々もほの見しに、思ひとる方は少く、ものはかなげに若びたる人ざまなりしかば、世にながらへて聞えむ事の、いみじう覺えけるにこそは、と思しつゞくるにも、疎ましかりける心の程とは覺えず、わが爲の哀はいとゞ深うのみおぼされつゝ、此方彼方この頃はいとどかわく世なき、御袖の隙無さなゝめり。

その夏頃より帝御心地例ならず思されて、いかで靜なるさまになりて、行をのどかにせばやと思召して、嵯峨野のわたりに、嚴しき御堂など作らせ給へり。世を知らせ給ひて二十年にもならせ給ひぬ。一の御子おはしませば、あかぬ事なき御身なれど、世をおぼしめし捨ててむ事を、大殿などはいとくち惜しく惜み聞えさせ給ひけり。さるべき御中

かはらで―御在位の儘にて
まことしう―實際に
心苦しくて―帝が
御別れ―死別の際にも
うつし心通はむ日までは―目の黑い内は
公わたくし―以下帝の心
御行末―中宮のさてこそは―出家して中宮とも別居してこそは
宮―中宮
哀にうしろめたう―帝が
大殿―堀川大臣
聞えさせもかせ―賴み置き
二の宮―女二宮
齋院―女一宮

といひながら、いと有りがたうなつかしき御心ばへ有樣なれば、千年もかはらで見奉らまほしきも理なりかし。されども七月よりは、まことしう惱しげにて、物心細げなる御氣色を、中宮はいと忍びがたげにおぼし歎きたるも、いと心苦しくて、限りあらむ御別れの程も、引きとゞめられさせ給ひぬべう思召さるれば、まいて少しもうつし心通はせ給はむ日までは、片時も立退き聞えさせ給ひぬべくもあらねど、公わたくしにつけてもよろづにたのもしき御行末に、かう今日とも知らぬ有樣にて、さのみ思ひはなれ聞えじとても、いかゞは、さてこそは、限りのわかれの程も少し面馴れ給はめ、などせめて思しすてて、御出家の本意遂げさせ給ひぬべき御心まうけなどせさせ給ふを、宮は年頃の御ならひの名殘なう、悲しういみじくおぼしめされて、嵯峨の宮にも諸共に渡らせ給ふべき樣にぞ思しめし急ぎける。萬よりも女宮たちの御事をぞ、哀にうしろめたう思ひ聞えさせ給ひて、大殿にもかへすゞ聞えさせおかせ給ひける。帝「二の宮の、今はひとへに此世の事思し捨ててけるも、思へば中々いとよかりけり。齋院もおとなびて、年

誰にも―齋院故夫は持たずに過ぎ來りたれば世の中かはる―帝のかはる―さ思ひ初めし―狹衣を翌にとは最初よりの望なればあづけむと―女三宮を妻に與へんと生ひさき―若宮の寄なからむ―外戚の重きをなすものの無からむよりはわがものに―狹衣が思ふ心ことなる―狹衣の獨身生活には趣意あるべしと深慮には思へど いづれの御事をも―どの女宮たちをも大將―狹衣うち〳〵にも―私ども〻哀なる事も―「事ども」とあるべし

頃誰にも目ならし給はぬならひに、さしも世の中かはるけぢめも知られ給はじかし。三の宮などこそいと心苦しきを、さ思ひ初めし志も侍り、なほ大將に、若宮をもろともに思ひうしろむべき樣になむ、あづけむと思ひ侍る。今より樣殊なる生ひさきは、いとゆかしげなるを、何となき生孫王にていと寄なからむよりは、唯わがものに思ひてものせよかし。思ふ心ことなゝめる一人住なゝめりと煩はしけれど、そのうち〳〵の志をば知らず、かゝる遺言を、さりともことの外にはたがへ給はじと、ひとへに賴むなり」など宣はせてうち泣かせ給ふを、大臣はいみじう哀に見奉り給ひて、堀川「一日にても、世の中に立ちとまり候はむ限は、いづれの御事をも、いかでかは見はなち聞えさせむ。女子も持ち侍らず、あやしき窓の内のかしづきものにも、命の限は仕うまつり侍りなむ。大將の朝臣はいかに侍るべきにか、明暮おもひあくがれたる樣にて、いとひが〳〵しく怪しき心ざまにのみ侍れば、うち〳〵にも思ひ給へ歎くを役にてなむ。さりとも、かかる仰せごと承りなば、いかでかおろかには」など、互に哀なる事も、たのもしげに

うちかはり―堀川の心、手をかへて今度は女三宮をと帝の仰せらるゝに我さへ―狹衣の承知は兎に角自分迄が不承知―狹衣の大將の知らぬ顏にて劣り給へりし―女三は女二より非常に劣りたりしに さばかり―以下「事もなかりし」迄女二宮をいふ心深く―深く思ひ込みたる源氏を見た目で見ると矢張不足にて、自分ながら不實な仕向方をして哀なりける人―女二腹の兒世の常の―人並の夫婦になりてさし離れたる―全くかけ離れたる女ならばまだしも、女二の妹たる女三に緣を結びてよめく―立寄れば袖に―袖にそよめくばかりに

聞えさせ給ふ。うちかはりかくのみ宣はするを、我さへ聞き忍びつゝさのみ過し給はむも、あるまじき事なれば、大將の御氣色も知らず顏にて、嵯峨野の御わたりの此方に、三の宮迎へ聞えさせてむとおぼし立ちて、齋院のおはしましつる方を、いとゞ磨き添へさせ給ふを、大將、かのありし夜目にもしるく、こよなく劣り給へりしものを、さばかり飽かぬ事なく、何事もこれこそは、道理のまゝの限なる人の御有樣なゝめれと、心のうちにもおろかに思ひ聞ゆべき事もなかりしをだに、心深く染みにし方のなのめならぬ目うつしには、我ながらもあさましく、情なき心ばへを見え奉りて、さばかり契りことに哀なりける人をも、雲のよそに見なして、くやしく悲しと明暮思ひこがるゝこゝろのうちをだに、夢ばかりいひ知らせ奉らでやみぬべきこの世の悲しさは、何れの折にか胸少しひまありて、さやうに世の常のありさまをして聞え奉らむ、さし離れたるあたりにだにあらで、袖にそよめくばかりにて、心より外に我も人も、さぞかしと見聞かれ奉らむよなど、思しつゞくるに、凡て今ぞ世に見えぬ山路も、求め出づべき月日來にける心

そよめく風の音を近くは聞けど逢ひも見ぬ哉」我も人も―我も女二も―見えぬ山路―「世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」かはらぬ樣ながら―出家遁世もせずして―さてこそ―それでもよけれどさやうにて―帝の仰通りにして

十帝讓位出家、嵯峨の閑居、女二宮の同居、今上即位

おろさせ―帝退位と共に出家あり

居させ給ふ―即位

みづからの―中宮自身の

かはりたる御すみか―先帝の嵯峨の御住居―御わたり―御嫁入道の宮―女二

地し給ひける。心より外に、この世にかはらぬ樣ながらもし長らふとも、さてこそあ、なれとも、ありか定めては聞かれ奉らじ、若宮をば、げにさやうに得奉らばや、など、この御事にのみぞ樣々に、うき世も偏にえおぼし捨つまじかりける。

八月十餘日になれば、嵯峨の院の御堂いそぎ造り出でさせ給ひて、おりさせ給ふまゝに御髪おろさせ給ふ。悲しなど今始めたらぬ事なれど、あやしき人の上にてだに、なほ見るも聞くも心騷がぬやうはなきを、まいて中宮などの思したる樣の心苦しきを、大殿は聞え慰めさせ給ふ。春宮の居させ給ふなどは、限なくめでたき御有樣なれど、みづからの御心の中には、かはりたる御すみかのみ、あはれに思ひやり聞えさせ給ひけり。かやうの事どもさしあひつゝ、三の宮の御わたりも延びぬるを、大將は人知れずいと嬉しとおぼしけり。嵯峨の院には、御心地もよろしくならせ給ひて、宮達迎へ奉らせ給ひて見奉らせ給ふに、かたみに、いと悲しくおぼしめされけり。中にも入道の宮は、樣々おぼしつゞくる事さへ多かる御身の有樣なれば、御袖もえ引きはなたぬ御氣色哀なり。い

引きつゞきたらむも―引續き女宮たちの詰かけて居るのも、出家を思ひ立ちし志には不似合と帝が思ふ故

同じ心に―女二が

語らひ―女二と

㊤源氏宮入内の噂、狹衣の悲やがて參り給ふべし―引續き入内すべし

今はかう―狹衣の心

人の御身―源氏宮

敷島の―「敷島の大和にはあらぬ唐衣ころも經ずして逢ふよしもがな」

づれも、「今はかくて見奉らむをだに慰に」と思し宣はすも理に心苦しけれど、さのみ引きつゞきたらむも、思ひ入りし樣には違ひてや、とおぼしめせば、あるべき樣など聞えさせ給ひて、入道の宮ばかりぞ、とまらせ給ふ。嵯峨野をやがて御前の庭にて、大井川も程なく見やらるゝに、小倉の山の篠薄もほのかに見えて、鹿の音と同じ心に泣きつくし給ひつゝ、行ひ給へるさま、げに後の世はたのもしげなり。院もやう〳〵御心地よろしくならせ給ひて、宵曉の念佛、懈怠なく行ひつとめさせ給ひつゝ、後の世もかなら

ず同じ所にと、語らひ聞えさせ給へる、哀にたのもしげなり。

京には、大嘗會など近うなりぬれば、源氏の宮は女御代し給ひて、やがて參り給ふべしとあるを、今始めて聞ゆる事にはあらねど、大將の御心のうち思ひやるべし。今はかうにこそはと數へられて、我身もうき世を思ひはなれぬる日數も、殘なきやうに思さるゝには、流石なる事多くて、年頃よろづに有りがたく思ひ忍びまぎらはしつる心の中も、やもせば我身も人の御身もいかならむと亂れまさりて、「敷島のやまとにはあらぬ」と立

急ぎ立たせ給へり―女三宮降嫁の用意を
年頃おぼし掟てつる―狹衣に妻を娶る事は父母年來の望なれば

㊐狹衣源氏宮を訪ひて琵琶を彈く
今日明日ばかり―源氏宮の入内期が
宮―源氏宮
吹き合せつゝ―狹衣が
この御方―源氏宮の方
我も―狹衣自身
そゝのかし―源氏宮の琴を
同じ筋―狹衣と同じ流
さらばこれを―此琴を彈き給へと狹衣に勸む

居におぼし侘びけり。されどかけても知る人なき御心のうちなれば、誰も急ぎ立たせ給へり。年頃おぼし掟てつる事なれば、何事も斜ならむやは、常の事に事を添へて、今行末のためしにもなるばかりと、御心とゞめておぼし掟てたるは、げにいとめでたき御心急ぎなり。

九月も晦日になりぬれば、唯今日明日ばかりこそは、といとゞ吹き添ふ木枯も、身にしみまさりて物心ぼそく詠め臥し給へるに、寢殿の方に宮の琴の聲の忍びやかに聞ゆるに、いと忍びがたくて、笛を同じ聲に吹き合せつゝ、參らせ給へれば、大方はいと物騷がしくいそがしげなる頃なれど、この御方にはのどゝとして、なべてならぬ人々五六人ばかり御前に近くて、廂の御座におはしまして、若き人々童べなど、池の舟に乘りて漕ぎ歸り遊ぶを御覽ずるなりけり。我も勾欄におしかゝりて、笛を吹きつゝそゝのかし聞えさせ給へど、源氏「同じ筋を習ひしかど、ことの外に劣りたらむ」となか〳〵耳ならさせ給はじとにや、彈きすさびさせ給ひて、源氏「さらばこれを同じくば」とて、大納言の君し

人もこそ—狭衣の心　なぞや—狭衣の心、何故かの時天童と共に天上帝ぎりし事ぞ又やと—又天童の來る事もあらんかと　麓より—「死出の山麓を見てぞ歸りにしつらき人より先づ越えじとて」本意のまゝに—思の如く源氏宮を手に入れずして昇天せんも　彈かせ給ふばかり—源氏の彈く樣に越ある彈き樣は出來ず、やはり其方に差上げむ

「衣がへ」—催馬樂「衣がへせんやさ公達やわが衣は野原篠原萩が花すりやさ公達や」一わたりおとして—一段調子低くして

て琴をさしやらせ給へれば、常よりも心やすく引きよせ給ふまゝに、

狭　忍ぶるを音に立てよとや今宵さは秋のしらべの聲のかぎりに

と言はるゝを、人もこそ耳とどむれ、げにうつし心もなくなりぬるにやと、我ながらもどかしくて、言ひまぎらはして、琴を手まさぐりにし給ひつゝ、空をつくゞゝと眺め入り給へるに、霧りふたがりて月もさやかならぬしも、いとどもの哀なるに、かの天くだり給ひし御子の御かたちけはひ、ふと思ひ出でられて、いみじう戀しきに、なぞやうき世にとまりけむ事ぞ、いとどくやしきや、又やと、試みまほしけれど、籠よりだにこそ歸るなれ、本意の儘に見置き聞えさせで、雲路にまじらむもなほ心やましければ、御簾を引きあげ給ひて、長押におしかゝりて、狭「この御琴は、彈かせ給ふばかり、なつかしうはいかでか。なほ參らせむ」とて、切に奉り給ひて、琵琶をひき寄せて、「衣がへ」を一わたりおとして、「萩が花ずり」と、うたひすさびて、少し心に入れて彈き給へる、例のいひしらず心細く哀なるに、かきかへさるゝ撥の音、面白う愛敬づきて、雲井遙に

隱簑の中納言—隱簑の物語といふ小説の主人公、此物語今傳はらず　つい插し—彈きやめて撥を琵琶に插む也　宮漏—朗詠「三秋而宮漏正長、空階雨滴、萬里而鄉園何在、落葉窓深」

㊀一條院前御便なければ—御讓位等色々の騷ある故也

物のはじめに—御即位早々　思召す—帝が

響きのぼる心地するを、隱簑の中納言の二の舞にやならむと、むづかしければ、撥ついぶし給へるを、人々も宮も飽かず思しめしたり。夕霧絶間なきに、時雨だちて折々うちくらがりたる空のけしき、ものむづかしければ、「入らせ給ひて御格子まゐれ」などあれど、つくゞゝと眺め給ひて、狭「宮漏正に長し、空階に雨したゝる」と、忍びやかに誦し給へる御聲、つねの事なれど、なほ聞く毎にめづらしくめでたければ、若き人々などは奥へもえ入りはてず、めで入りて、群れ居つゝ、「この頃こそ、いみじう物おぼしたる氣色なれ。何事ならむ」などもいひ合すべし。

かくいふ程に、一條院の、日頃例ならぬ樣におぼしめされけれど、折ふし便なければ、風にやなど忍び過させ給へるを、折々御胸をさへ惱せ給ひて、俄に限のさまに見えさせ給ふに、内裏のおぼしめし歎く樣世の常ならず。されど、物のはじめに、かゝる折行幸はいかゞ、など誰も制し聞えさせ給へば、おぼつかなき事をさへに思召すに、程もなく亡せさせ給ひぬれば、あへなしとも世の常なり。内裏には、見奉らせ給はざりつる事を

御いそぎ―色々の準備
黑み渡りぬる―喪中故すべての物が黑色になる也
㊟源氏宮神詣によりて賀茂の齋院になる、女三宮伊勢の齋宮になる
大膳に渡らせ―不審
如何なるべき―入内せずして齋院にならるゝが至當なり抔いふ也
今更に―今更齋院になる筈はなしと也、齋宮齋院は内親王に非ざればなる事なければ也
宮―源氏宮
心もとながる―入内を待遠しがる

さへ、あかず悲しともよのつねなり。更になべての世の別れともおぼしめされざりけり。世の中の御いそぎもみな打歇みて、なべて黑み渡りぬるもいとほしげなり。

皇太后宮の齋院の御代には、一條院の后宮の姫宮ぞ居させ給ひにしか。大膳に渡らせ給ひにしを、歸らせ給ひて齋宮もおりさせ給ひぬるかはりに、居させ給ふべき女宮達、此頃おはしまさどりけり。源氏宮の御内裏參りや如何なるべき事にかと、世の人人やう〳〵いひ出づるを、殿にも聞かせ給ひて、堀川「あなあぢきなや。まだ二葉より、たゞ人にならせ給ひにしかば、今更に神も公も知り聞えさせ給ふべきにあらず」とて思しもかけたらず。侍ふ人々も、内裏わたりの今めかしさを、いつしかと心もとながり思ふべし。宮の御かたち、この頃はいとゞさかりに整ほりまさらせ給ひて、誠にひかるとは之をいふべきにやと見えさせ給ふを、帝と申すとも、かゝる人世にはおはしましけりと、さはいふとも御目は驚かせ給ひなむかしと、見奉る限は言合せつゝ心もとながるに、宮の御夢に、あやしう心えず物恐しきさまに、うち頻り見えさせ給ふを、如何にな

斯うこそなど―斯樣々々の夢あり等とものゝさとし―天變
ものとはせ―占はせ
神代より―源氏宮は前々より齋院になるべく定まれりと也
試み給へ―源氏宮を試みに入内させて見給へ
なか〳〵心やすく―狹衣が年頃も―以下狹衣の心
わが物に―源氏宮を盗み隱して

りぬべきにかと、人知れず心細くおぼしめさるれど、斯うこそなど、母宮にも聞えさせ給はで過させ給ふに、殿のうちに夥しきもののさとしのあるを、ものとはせ給へば、源氏の宮の御年あたらせ給ひて重くつゝませ給ふべき由を、あまた申したるを、いとおそろしう思しめし驚きて、さまぐ〳〵の御祈ども、心ことにはじめなどせさせ給ふに、殿の御夢にも、賀茂よりとて、禰宜とおぼしき人參りて、榊にさしたる文を、源氏の宮の御方に參らするを、あけて御覽ずれば、

神代よりしめ引きそめしさかき葉を我よりほかにたれか折るべき

よし、試み給へ。さてはいと便なかりなむ。

と確に書かれたりと見給ひて、打驚き給へる心地、いと物恐しく思されて、母宮大將などに語り聞えさせ給ふを、聞き給ふ心地、なか〳〵心やすく、嬉しくぞなり給ひぬる。年頃も、とやかくやと、身一つを思ひ碎けながら、流石にわが物にひき忍び取隱し聞えて、ひたすら深き山里などに、もてさすらはむも、あるかひなかるべし、さりとて親たち

の思しよらぬ有様にて、ほのかに見奉りそめても、中々なる心惑は、彌増りにこそはあらめ、さらばさてもあれとは、必ず思しゆるさぬやうは、世にあらじ、さりとも御心の中どもには、思はずにもあるかなと、事に觸れつゝ明暮おぼし亂れむが、いといとほしう心苦しきぞかし、など思ひ歎かれ給へるを、げに神代より筋殊なりける御宿世なりければ、今は中々心やすくて、明暮妬う心やましき心の中はあらじ、と胸あきぬる心地し給ひながら、いかに定めていかに歎くにか、あらばあふ世の限だになく、こゝらの年頃わが思ひくだけつる筋は、遙なるにこそは、とうち思ふは、又様異にいみじき心の中なり。内裏の御夢などにも、さだかに御覽ずる事ありておぼし驚くに、大殿に語り合せ聞え給ひて、御心の中どもはいとくちをしけれど、御占などあるに、公を始め奉り、殿の御ためにも、行末遠くめでたかるべき様にのみ占ひ申しければ、とかう誰もおぼし定むべき事ならで、定りたまひぬるを、世の中には、思ひかけずあさましき事にぞいひける。齋宮には、嵯峨野の宮ぞゐさせ給ひにけるも、大將の御心の、よのつねの様ならまさらばさてもあれなら仕方が無いと親たちの許しなくて苦なれぬ事はなれども思はずにも飛つて仕舞つたものかなと

筋殊なりけゝ齋院になるべく定りたる運命たる以上はいかに定めて狭衣の心あちばあふ世の

「如何にしてしばし忘れん命だにあらば逢ふ世のありもこそ

すれ」

遙なるに」とても叶はぬ事とさだかに御覽ずる

源氏宮の事に關して御占など」源氏宮を齋院に立つることの可否につきて定り」源氏が齋院に立つべく嵯峨野の宮」女三宮

しかば、齋宮、齋院、世に絶え給ひてやあらまし、とぞ人知れず思しける。鈴鹿川の浪のよそになり給ひぬれば、さばかりの御心には何とおぼさるまじけれど、かうと聞き給ふはたゞならず、終にいかなる宿世のあるにか、斯うまでも、目やすかるべき事どもは、様々もてはなれ行くよ、もし唐國の中將のやうに、子持聖やまうけむとすらむと、我ながら、まれ〳〵獨笑みせられ給ひけり。

三月になりぬれば、くだりにし大貳の家に、齋院のわたらせ給ふべき事など、今ひきかへて急がせ給ふ。母宮はいにしへの御有様などおぼし出づるに、今さへ、神の齋垣に立ち添はせ給はむことは、いとくちをしく思されて、かつ見るだにあかぬ御有様を、いかに覺束なき月日、おのづから隔らむと思し歎きたまへるを、院は、いかでか然はとのみ、恨めしげに恨み聞えさせたまへるを、理に心苦しくて、母宮「尼にならざらむかぎりは、いかでか覺束なき程にはなし侍らむ。行末の事を思ふこそくち惜しうは」など、聞え慰めさせ給ひながらも、今はとならむ命の程も見奉るまじきぞかしと思すは、いと忍びが

大將の御心の」我心が尊常の人の如くにて此二人を二人ながら疾に手に入れたらば鈴鹿川の」女三が齋宮になりたればかりの御心」女三の心では聞き給ふ」狭衣の心終に」狭衣の心唐國の中將」此頃の小説中の人物なるべし

源氏宮元の大貳の家に移らんとす、狭衣源氏を訪ふ

院は」齋院は尼になりざらむ」尼になれば神社への出入出來ねば也

今はとならむ」源氏を齋院にして仕舞ひては對面むつかしき故死別の際も逢ふ事は出來にくかちんと也

たう、今よりおぼされけり。大將は、御内裏參りの今日明日になりたりしに、思しとまりし一節こそ、神の御方樣うれしう思されしかど、樣異に定まりはて給ひぬれば、なほむげに、注連の外にかけはなれ果てぬるぞかしと思ひとぢむる、いとやらむ方なかりけり。思ひあまる折々は、けぢかき程にて、心の中をもうちかすめ、忍ばぬ涙をもらし出づるに、慰むとはなかりつれど、萬にありがたき御有樣に目なるゝに、多くの物思ひのまぎれともなりつるを、時々など參りて、いと神々しく餘所々々しからむ御もてなしにては、いかでかは限あらむ命も長らへやるべからむ、といみじう心細くて、この頃は唯この御方に居暮し給ひつゝ、人間にはいひ知らぬ御氣色などの漏り出づるを御覽ずるまに、いと疎ましく心憂きにも、神の齋垣にのみいそがれ給ふ。露ばかりも知らぬさまに、もてなさせ給へる、あまりいとつらう思ひあまり給ひて、狹「こゝらの年頃思ひくだくる心のうちをも、つれなく思ひ返して、いかでけざやかに思ふさまに見奉り過さむと、わが身にもかへてこそ念じ過し侍りつるを、などかむげに見ず知らざらむ人のやう

樣異に―源氏が齋院といふ特別な身分に定まりたれば

けぢかき程にて―源氏に近づきてありがたき御有樣―源氏の

この御方―源氏の方にのみ狹衣が入りびたりて御覽ずる―源氏が齋垣にのみ―早く齋院になりて仕舞ひたく思ふ

露ばかりも―狹衣の心、狹衣の戀を源氏が丸て知らぬ振するをつらく思ふ餘りに思ひ返して―氣をかへて

に、思召したるにか。むげにさばかりの事、思し知るまじき程にもおはしまさぬを」と、過ぎにし方くやしきさまを、忍びやり給はで、

狹「神山の椎柴がくれ忍べばぞゆふをもかくる賀茂のみづがき

さりともおぼし知らむとこそ思ひ侍りつるを、あさましかりける御心ばへにこそ、身も徒になりぬべけれ」とて、せきもやらぬ涙に、いと恐しうわりなしとおぼして、うち泣き給へるけはひなどの近勝には、いとゞ來し方行末のたどりも失せて、狹「今は斯うだに聞えじと、いく返り思ひ念じ侍りつれど、物思ふに魂もあくがるゝとは誠にこそ。今は現し心もなき心地して、今更にいとゞおぼしめし疎まれにけるにこそ。いでや、今はとてもかくても、同じ樣にて世に侍るべきにもあらねば、見えぬ山路にも諸共にや、とこそ思ひなりにて侍れ」とさへ宣ふに、いとゞゆゝしうおぼし惑はれて、御汗も涙も一つに流れまさりて、たけき事とは、源氏「いとかく侘しき目な見せ給ひそ」とおぼし入りたる御氣色の心苦しさは、神もいかでかおろかに御覽ぜられむと見ゆるしるしにや、夜

神山の―君を思ふ下心ある故、齋院にならるゝにつけても兎や角と世話をもやくぞと也

恐しう―源氏がたどり―思案

諸共にや―世の憂き目見えぬ山路に君と共に入らんかと迄思ふと也

もぼし惑はれて―源氏が

おもの―食事つれなくもてなして―狭衣が何氣なく装ひて心に籠めて―從來胸にのみ思ひて過せしせつなさは、今のつらさに比ぶれば何でもなし　大津の王子―此頃の小説中の人物なるべし　御命の―源氏の存生中にてさへいけるわが身―引歌未詳　片つ方―女二宮　思し離れにし―女二があれ迄につれなかりしも　道芝の露―飛鳥井姫君見るめなぎさには―再び逢ふ事を得ざる樣にならんとは思はざりし　げにぞ千年の―罌粟は千年の形も上ほし―哀を備す種

さりのおもの參らせに人々參れば、流石につれなくもてなして、泣く〳〵立退き給ふ心地、心に籠めて過ぎしはものにもあらざりけり。いとかばかりの心地ながらは、過ぐすべき樣もなきに、我ながら慰め兼ね給ひて、大津の王子の心の中をさへぞおぼしやるに、秋の月は程なくこそ慰め給へれ、これは御命の限にさへ、「いけるわが身」と、いひ顔なる行末は、なほためしなくぞ思ひこがれ給ふ。今片つ方の、侘しき床に惑はし給ひし夜のつらさも戀しさも、思へば心づからのわざとはいひながら、いとさしも思し離れにしも、唯かゝる方につけて物を思ふべかりける、前の世の契にこそはと、かの道芝の露も、この列に思ひ出づべきにはあらねど、見るめなぎさには思ひやはかけしなど、物思の序にはなほおぼし出でらるゝにや、その扇を取り出でて見給ふも、げにぞ千年のかたみなりけるも、中々のもよほしなり。いづれも限だになき御物思は、いとゞ口惜しく慰め所だになし。

狭我が戀の一かたならず悲しきは逢ふをかぎりのたのみだになし

行くへも知らず―「我戀は行方も知らず果もなし逢ふを限と思ふばかりぞ」　☆齋院移居の日　狭衣再び齋院に情を訴ふ、狭衣遁世の志御わたり―移居　内裏わたりの―源氏が入内したらば此人々の交際振は如何に美しき事ならんと　なほ世の常の―此上に脱字あるべし　ゆかしき―「ゆゆしき」の誤なるべし　心地も―狭衣の

「行くへも知らず」と詠みけむさへ、羨しう思されけり。

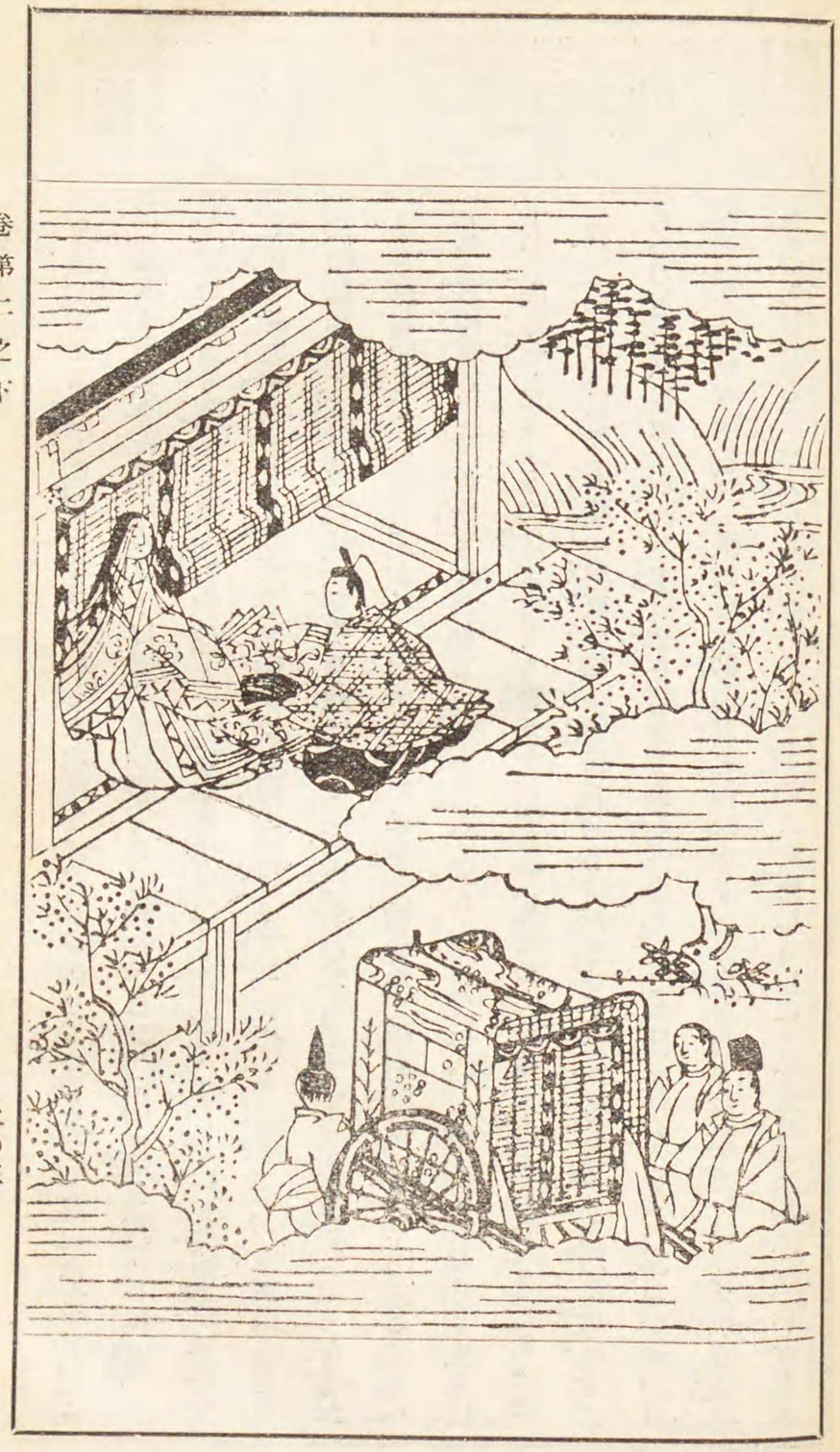
齋院の御わたりの日になりぬれば、つとめてより上達部親王達より始め、世にある限の人參りあつまりて、いとゞ物騒がし。女房などもある限り參り集ひたるかたち有樣、きぬの色搗目かさなりも、なべてならずめでたく群れ居たるは、いづれとなくあなめでたと見えて、内裏わたりの御まじらひの程、いかにめでたからましと見えて、くち惜しう見渡さるゝに、御前に櫻の織物の御衣どもの、表少し匂ひて、裏は色々にうち重ねたるうへに、紅の搗ちたる櫻萠黄の細長、山吹の二重織物の小袿などの、所せうもの硬々しげなるを、如何なるにか、たを〳〵とあてになまめかしく著なさせ給ひて、人々の參り集りたるを、御几帳のほころびよりのぞかせたまひなどする御有樣かたちなど、なほ世の常の事をこそいへ、誠にゆかしきまで見えさせ給ふを、神もいかゞは見はなち聞えさせ給はむと見れば、まいて大將の御心の中はことわりなり。心地もいとゞあやしう、現心もなき樣なれば、起きあがるべくも思されねど、さて臥したらば、誰もさすがに萬を

すてて思し騒がむもむづかしければ、われにもあらず落つる涙を、のごひ隠しつゝありきたまふ氣色、一乘の門をだに見捨てては行きはなれがたき御樣なれど、院は唯、いかでもかゝる事見ざらむ所もがなと急がれさせ給へば、みたらし川に禊せさせ給はむ事をのみ、心もとなく思さる。時なりて御車寄せつれば、又も見奉るまじき人のやうに、限の心地し給ひて、あまた立ち重りたる御几帳に紛れ寄りて、御衣の裾を引きとめ給へり。いとど重くて、とみにも え動かれさせ給はぬに、あやしと見かへらせ給へれば、やがて引かれて、心にもあらず近う引き寄せられ給へるに、

狭　今日やさばかけはなれぬるゆふだすきなどそのかみに別れざりけむ

とて、扇をもたげ給へるに、御手をとらへて泣き給ふ樣、いみじげなり。狭「よし御覽ぜよ。この同じさまにてや世に過し侍りける。とかう見奉りはつるまでと、あながちに念じ過し侍りつるを、又御覽ぜられぬやうも侍らむを、この世の思出にもし侍るばかり、哀とだに宣はせよ」とむせ返り給ふを、げにいみじき心惑と見ゆるを、さりとも今よ

一乘の門―法華經の法門をいふ　賢不肖を擇まず皆共に同一極高の佛果を得しめんとする教法の義　院―齋院　みたらし川に―「繰せじとみたらし川にせし禊袖は受けずもなりにける哉」　限の心地し―狭衣が今日やさば―彌今日がも別れか此樣なる事なら前に別れて仕舞へばよかりしに　もたげ給へる―「もたせ給へる」の誤なるべし　とかう見奉り―御身分の定まるを見屆くる迄と思ひて　又御覽ぜられぬ樣も―再び御目にはかくらぬかも知れぬ故　げにいみじき―源氏の心



かくる心も―是からは此樣な目にあふ事もあるまじと思へば心をやめて―狹衣の繼情を除き去りて殿―堀川大臣

かくる心の中は―狹衣の心、父は我此心を知らで此儘此世に留るものと思ひ居るこそ氣の毒なれ、若し我遁世せば如何に仰天するならんやつしがたし―俄に遁世する譯にもゆかず心こそ野にも―「いづくにか世をば厭はん心こそ野にも山にも惑ふべらなれ」

りは、かゝる心も見じとするぞかしとおぼすは、前々のやうなる御心騷にはあらねど、いとかう氣近きほどにては、いとゞ言ひ出でさせ給ふべき言の葉も覺え給はねば、唯、いかでか、斯う疎ましき心をやめて、いにしへの樣に、隔なく思ひかはして見聞えばや、と例の神の御しるしを念ぜさせ給ふに、殿の御聲にて、「いづら、遲しや。大將はなど見え給はぬ」と宣はすれば、立退き給ふこゝち誠にわれにもあらず、死に果てぬるをとおぼされながら、なほさすがに心づよく御供に參り給ひぬ。例の作法の事ども思ひやるべし。宮司參りて御祓仕うまつりて、榊青やかにさしつるに、いと神々しげなるを見るにも、心惑して、うち休まむとも覺えず。やがて見えぬ山路へもあくがれなまほしきに、堀川「いづくにか。大將の宿直所に、常にさぶらはれむこそよからめ」など殿の宣はするを聞くにも、かゝる心の中は知り給はであるべきものとおぼしたるこそ、哀いかばかり思し惑はむとすらむ、限あらむ御命なども思ひつゞけ給ふには、又引き返しやつしがたし。一方ならず悲しくて、狹「心こそ野にも山にも」と言はれ給ふは、いかなる

母宮の物思はしげなる獨據を怨む、子の愛にひかれて狹衣遁世の志を遂げず

今日や明日や―今日出家せんか明日せんかと山のあなた―「人知れぬ山のあなたに宿もがな世のうき時の隱家にせん」居させ給ひし―源氏の院に―齋院にこよなく―狹衣の心その儘に―源氏に付添ひ行きし儘にて院がちに―母宮が齋院方にのみ居らるゝ故

べき御有樣にか。其後は、今日や明日やとのみ、人知れず山のあなたに御心はあくがれて、いづくも心のどかにばおはせず、殿にても、常に居させ給ひし御かたを見給ふに、ゆかしきまで戀しう悲しくのみおぼさるれば、内裏にも更に參り寄り給はず、院に參り給ひても、こよなくけ遠くて、わざとさしいで見えさせ給はむとしも思召したらず、御几帳引寄せなどしておはしませば、こよなく思し疎みたるなゝめりとつらくくち惜しき心の中をば、神もいかに御覽ずらむ、斯うのみおぼえば、わが身はかゞしからじ、と自らだに理におぼされて、いと心細し。大宮は、その儘におはしまして、とみにもえ歸らせ給はぬを、殿は、さのみもいかゞはと、いざなひ聞えさせ給ふを、院はいと心ぼそげにおぼしめして、更にゆるし聞えさせ給はぬ程に、唯つねに院がちにおはしませば、上達部殿上人など、唯あけくれ大宮一條わたりを行き返りつゝ、そのわたり物騷がしきまでなりにけり。かゝる御いそぎなどに添へても、母宮などは、大將の御ひとり住を思しなげかぬ折なし。

思ひ定め給へ―妻を定め給へ　目やすかりつる事ども―相應なりし縁談も　昔の世にも―前世に定まれる縁が無いのであらう　この院の―齋院の心細き樣子なるも打捨置かれぬ故　我は彼所と此所とかけ持しの體裁なれば別して其方の獨身を気遣ふぞ　前齋院は―女一宮を貰ひては如何樣のものと―餘りいつも〳〵同じ姉妹の中からばかり撰擇するのも外聞恥し、あまり高貴でない女はあるまいか　みな心にくき―女一の姉妹はいづれもよき御器量にて、美人の噂高かりし母御に肖たり

この頃となりて物思はしげなる御氣色にていたく痩せ給へる、如何なるにかと見驚かせ給ひて、常よりも御祈どもこちたくせさせ給ふ。母宮「かくのみあくがれ給へれば、物心細くおぼさるらむ。なほ然るべからむ樣におとなしう思ひ定め給へ。かくのみ物憂がり給ふ程に、いと目やすかりつる事どもも違ひはてぬれば、あやしきわざかな」と母宮も聞えてなげかせ給へば、うちほゝ笑みて、狭「昔の世にも契りける人の侍らざりけるにこそ。今さりとも、蓬萊の山も尋ねこゝろみ侍らむ」と宣へば、母宮「いで、常にたはぶれにのみ言ひない給ふこそ見苦しけれ。かばかりになりぬる人の、かう物はかなく漂ひたるやはあるとよ。今はいとど、この院の御ありさまの心細さに、一所にもあらねば、いとうしろめたうおぼえ給ふや。三の宮の御事のくち惜しきかはりに、前齋院はいかゞおぼすらむ」と宣へば、狭「さのみ樣のものといとはれ奉らむこそ、世のおとぎきも恥かしう侍るべけれ。餘にやむごとなからぬ人は侍りなむや」と申し給へば、母宮「げにこそ、みな心にくき御宿世どもなりけれ。母宮の御物言の、などさしもと聞きしにこそたがひ

若宮―女二宮腹の兒　聞かせ―彼兒が我兒なる由を母宮に聞かせたらば　見つき給ひて―狭衣に馴れてなつかしき樣に語らひ―狭衣がかの院―嵯峨院も狭衣がかの若宮を愛する由を聞きて　睦じう―狭衣に親むべき由を言ひ聞かせたり　外へ渡らせ―齋宮になりて　迎へ奉りて―若宮を堀川邸へ　院―一條院　前齋院―女一宮　殘り―一條宮にさてもやがて―其儘に狭衣に嫁する樣になりたらばよからんと

給はざりけれ、目やすく」など宣はするにも、若宮の御美しき有樣は、まづ思ひ出でられ給ひて、聞かせ奉りたらば如何ばかりおぼさむと、わが御心にも是ばかりはくやしう哀におぼされて、戀しく覺えさせ給ふ折々は、常に參り給ひつゝ見奉り給ふに、日に添へては光るやうにのみなりまさり給ふ。若宮はこよなく見つき給ひてなれ睦び給ふに、いとど哀にて、見奉り給ふ度ごとに涙もこぼれぬべきを、あまりなりと人や見むと、紛らはし給ふもわりなし。乳母達などは、なつかしき樣に語らひ給へば、皆たのみ聞えたる樣にぞほのめかし聞えける。かの院にもかくと聞かせ給ひて、いと嬉しうおぼしめしけり。女宮達にも、睦じう思し宣はすべきさまにぞ、聞え知らせ給ひける。入道宮は嵯峨にのみおはしまして、この若宮の御事も更に知り聞えさせ給はねば、唯三の宮のみぞ、あはれには思ひ聞えさせ給へるを、秋は外へ渡らせ給ひぬべければ、いと心苦しう、狭「斯くてはいかでかおはしまさむ。迎へ奉りて殿にあづけ奉りてむ」と宣ふを、院はなほ、「前齋院のひとり心ぼそくて殿り給へるに、同じくはさてもやがてものし給はむは、

有りがたく―住み難く覺えまさり―狹衣が西の山もとに―嵯峨の方へ、女二宮のある故なりいとしも―女一宮の事　御後見―女一宮のさもあらせ―狹衣へ嫁せしめたしと申させ給ふ―狹衣がかくる御氣色―狹衣の若宮を愛する樣子を御所のしるし―狹衣の遁世もせぬは父母の佛神に祈る願なるべし

めやすかりなむかしとなむ思したる」と聞え給へど、世はいと有りがたくのみ覺えまさり給ひて、いかならむ隙にもと、心ばかりは西の山もとにあくがれはてにたれば、まいていとしも勝れてと聞かざりし御有樣の、やう〳〵盛過ぎたまへらむは更にゆかしからぬに、御後見たちは、げにさもあらせ奉らばやと思ひよりて、參り給ふ度毎には、もしさやうなる事や申させ給ふと、心づかひして待ち渡るに、唯いとすくよかにて、若宮のやう〳〵ありき給ふ美しさの、見る度ごとに、この世のものとも見えたまはず美しきを、これやさば、此世のほだしにと佛などのしおき給へる事にや、と思し知られて、悲しういみじう覺え給ふ。見奉る人々も、かゝる御氣色を嬉しく賴もしきものに思ひ聞えたり。かくのみ世の中をかりそめに思しながらも、げに朧げならぬ御祈のしるしなるべし。

かくのみ物むづかしきを慰めがてら、弘法大師の御すみか見奉りて、なほこの世脫れなば、彌勒の御世にだに、少し思ふ事なき身とならばや、など思し立ちて、さるべき人々の親しき、御供に候ふべきよしなど、忍びて宣はす。寺の僧どもに賜はすべき法服ども、あまた設けさせ給ひける。明日ばかりと思す日、殿の御前にて、狹「亂れ心地の、例ならず思う給へらるゝを、もしさてもや直り侍ると、高野粉川などに詣でむとなむ思ひ給ふ。俄なるやうに候へど、明日など日よろしく侍るなれば、忍びてとなむ思ひ侍る」と申し給へば、我もさのみ例ならぬ御氣色と御覽ずるに、俄なる御出立は、如何におぼすにかと、御胸騷がせ給ひて、まづ唯御涙のこぼれ落ちぬるは、いかに思召すにかと心苦しうて、狹「かねてより事々しくなり侍らば、殿上人なども我も〳〵と出でたち侍らむに、世のいそぎになりて、物騷がしくなり侍らむも、所にたがひてむづかしう候ひぬべければ、唯某などしたしき人々十人ばかりをぞ聞えさせ給ふ。一夜ばかりさぶらふべき」と聞えさせ給へば、堀川「同じ都の内にもあらず。大事にこそあむなれ。はか〴〵しき人も具せで、忽にはいかに思立ち給ふぞ」とて、いとうしろめたげには思したれど、又御心より外にとまり給はむをも如何思ひ給はむ、と心苦しければ、えとゞめ聞え給はで、然る

明日ばかりと―明日頃出發とさてもや―高野へ參りたらば

我も―堀川も狹衣の樣子を病氣と思ひ居るに心苦しうて―狹衣がかねてより―前前から催して事仰山にならば所に「心ゐ」の誤か一波ばかり―此前後誤脫あるべし

御心より外に―狹衣の機嫌を損ねんも惡しと斟酌する也

べき人々のうしろめたかるまじきをぞ、数多まゐるべきよし仰せられける。紀伊守には、船のまうけ、心ことに設くべきさまなど仰せらるれど、かねてさやうの事もみな宣はせてければ、心もとなき事なし。今日になりてぞ、斯くとあまた人々きゝて、我も〳〵と出立ち参らむとさわげど、狭「俄にはいかでか。殊更に忍びてなむ。精進などせざらむ人は便なく」など宣ふを、「かねて仰せごとなかりける事」とくちをしがり歎けど、これだに、いと思はずに人がちにむづかしとおぼせど、殿のあながちに添へさせ給ふ人々は、えとゞめ給はざるべし。中務の宮の少将といひしは、今は三位中将、この頃の殿上人の中には、何事にもすぐれて世の人にも知られたる、中宮の御叔父の式部卿の宮の御ゆかりに、この御方々にも、人よりはむつまじう馴れ聞え給ひて、大將の御有樣をも、なづさはまほしう思ひ聞えたるなどばかりぞ、擇り捨て給はざりける。

霜月の十餘日なれば、紅葉も散りはてて、山も見所なく、雪かきくらし降りつゝ、物心細くて、いとど思ふ事つもりぬべし。吉野川のわたり、船いとをかしき樣にて數多さぶらはせければ、乘り給ひて漕ぎ行くに、岩波高く寄せかくれど、汀は氷いたくとぢこめて、淺瀬は船もえ行きやらず、棹さしわぶるを見給うて、

狭　よし野川あさ瀬しら波たどりわびわたらぬ中となりにしものを

思しよそふる事やあるらむ。妹背山の近きは、なほ過ぎがたき御心を酌むにや、御船も出で行きやらず。

狭「わきかへり氷のしたにむせびつゝさもわびさするよし野川かな

うへはつれなく」など口ずさびつゝ、辛うじて漲り渡るに、かの底の水屑も思し出でられて、唯かばかりの深きにだに思ひ入りがたげなるに、いかばかり思ひてなど、さし對ひたりしありさまの物深くなどは無う哀れげなりしを、さしも思ひ沈みけむよなど、疎ましき方にはおぼされず、唯今見るこゝちし給ひて涙のこぼるゝを、まぎらはして、頬杖をつきて、つく〴〵と底深くながめ入り給へるまみより始め、御數珠にもてはやされたる腕つきなどの、世に人のなべてもたらぬものにもあらねど、めづらしく美しげなり。

みな宣はせて―既に狭衣より命じ置きたれば

これだに―既定の人數丈にても

知られたる―是まで中務の宮の少將の説明

御ゆかり―式部卿の宮の北方は中務宮の妹

よし野川―源氏宮に遂に逢はずなりしを嘆ちたる也

うへはつれなく―「難波女のすくも燒く火の下焦れ上はつれなき我身なりけり」

底の水屑―飛鳥井姫君

そこと教へよ―飛鳥井姫君の沈みし處を
是人命終―法華經普賢品の句、是人とは法華經を書寫したる人をいふ
石山とぞ―近江の石山寺の樣に思はる
まどろまれ給はず―狭衣が
藥王汝―法華經法師品の偈の句此次の句は「不聞法華經、去佛智甚遠」
我爾時―同上

くまなき水の上に、いとど光ことに見え給ふ。

狭「うき船のたよりに行かむわたつ海のそこと教へよ跡のしらなみ

あはれ」とひとりごち給ひて、狭「是人命終當生忉利天上」とうちあげ給へるは、四方の山の鳥獣も耳たつらむかしと尊くいみじきに、三位中將物めでする人にて、涙をほろほろとぞ溢しける。

まうで著き給へれば、御前の松山の氣色、谷の下水の流など、唯石山とぞ覺ゆる。寺の堂僧修行者どもの、よろしきもいやしき程のなども、あまた籠りたり。心細げにうち行ひつとめたるけはひども、何事を思ふらむと羨ましげなり。うちもまどろまれ給はず、夜もすがら行ひあかし給ふも、一方にもあらず、心の中はみだれぬべくて、いとかう思ふ事かなふまじくば、ひたすら此世を思ひ離るゝしるべし給へ、など思し入りつゝ、狭「藥王汝當知如是諸人等」といふわたりを、心細くうちあげつゝ讀みたまふに、太山颪さへ荒々しく吹き迷ひつゝ、わが御心の中にも心細く悲しき事限なし。狭「我爾時爲現清淨

其庭にだに―釋迦靈鷲山にて說法し給ひし時五百人の外道等之を嘲笑して其席を退きし事
普賢―普賢菩薩の形を現したる也
恒順衆生―普賢菩薩の十願の第三願
上大―誤あるべし「正路」などの誤寫か
かいせん―「かいし(開示)」などの誤歟
人にはことなりける―狭衣が人に勝れながら作禮―經文の終也

光明身」など、心にまかせてよみ流し給へるに、聞く限の人々、何事も聞き知らぬ怪しき修行者まで涙を流したり。釋迦佛の說き給ひけむ其庭にだに、笑ひまぎらはしけむ提婆達多、外道などいふらむ者だに、今宵の御聲には、皆圍繞すらむと覺ゆるに、まいて身をつゞめてとある御誓は、違ふべきならねば、御燈のいと仄かなるに、御前の暗がりたるに、普賢の御光いとけざやかに見え給ひて、程なく失せ給ひぬる、尊く悲しとも愚なりや。「恒順衆生の御願もいとど賴もしく、人天涅槃の上大をかいせむ事も疑なく、この世も後の世も人にはことなりける身ながら、心の中の物思はしさは、人よりけに口惜しかりける契と思ひ知らる。さらば、これや實に、何事も人より少しまさりたりけるものに、思はれたりけるかはりならむと、我ながら思ひ知られ給ふ。いとど心も澄み渡りて、うち休まむとも思されねば、やがて、「作禮而去」までとほし果て給ふに、御堂の内しづ〳〵として長閑なるに、行ひの聲もやめ、各所作どもうち忘れつゝ、聞き入りたるに、曉がたにもなりぬ。千手陀羅尼忍びやかに讀み給ひて、時々眠り給へる程を、う

功いりたる―修行の積みたる菩提の―千手經の文句

奥の方に―經文の末になると共にひさう―以下狹衣の心、佛敎にいふ三十三天の中の最高の天を非想天又は非想非々想天といひ又其垢を離れて淸淨なる點を讃して非想摩尼天といふとぞ

御誓―未詳

ちやすみ給ふと思ふにや、三昧堂の方に、千手經をぞ、いみじく功いりたる聲の尊きに讀むなる。「菩提の因とならむ」といふ所、中にも耳止り給ふに、中將いみじく哀がりて、いかやうなる僧ぞと、見せにやり給へば、狹「片眼あしき僧の、いみじく哀げなるに候ふ」と申せば、呼びにやらせ給へり。曉月夜のさやかなるに、紙衣のいと薄きに、麻袈裟といふものを著て、うちさらぼひたる程、さすがにいと疎ましげなる程とは見えで、わりなく寒げに哀げなり。中將、「いみじく哀なりつる御聲を、聞き過されでなむ。今少し讀み給へ」といへど、僧「かやうの御前などにて聞かせ給ふべくも候はぬものを」といへども、忍びやかに讀みたる、奥の方になるまゝに尊く哀なり。大將殿は、すこし奥のかたに入りて聞き給ふ。ひさうまにの天は、如何にしてさしもかたはになりにけむ、何事も前の世の宿世などいふらむ事は誠にや、わが身には、隨身自在陀羅尼といふ御誓違ひぬかし、など、かう淺ましきかたはにさへ、我御身を思しよそへらる。狹「この御寺に住み給ふか」など問はせ給へば、僧「かくて百日ばかりと思ひて候ふなり。親などいふもの、

昔は候ひしかど、死に侍りし後、唯かやうにいきよる山の末、鳥の聲も聞えぬ木の空洞などにて、苔の筵を敷き松の葉を食べて、虎狼といふものを、友と見ならひて過し候ふ」と聞ゆれば、人々いみじう哀がりて、「さても親は何人とか聞えし。いつまでか斯くては」とせめて問はれて、僧「帥の平中納言といふ人侍りけり。幼くてかたはものになり侍りにければ、法師になして、比叡の山に行ひしてあらせむ、など申しょ程に、うち續き筑紫にて親達かくれ侍りて後は、安樂寺といふ所になむまかりて侍りし。妹一人、乳母などいふ者候ひしかど、行方も知らずなり侍りにしを、比叡の山拜み奉らむの心深くて、一年なむ、長門守の北の方は離れぬゆかりと聞き侍りて、それにつきて都の方にまうで來しなり。さてなむ、妹などの事ほのぐ〳〵承りしに、中々夢のやうに哀なる事どもの侍りしかば、夜をだに明かさで、土佐の室戸といふ所に、この二三年侍りつる」といふに、さらばこの底の藻屑のゆかりなりけりと、いみじう哀にて、大將殿さし出で給ひて、近う召し寄せて、狭「さてその人はいかゞ聞きない給ひし。こゝにも仄かに聞き

いきよる―「行き寄る」歟

安樂寺―太宰府に在り

北の方―これ常磐尼也

妹などの事―これ飛鳥井姫君也

さらば―狭衣の心

その人―その妹

こゝにも―我も

し人の事なれば、耳とどまりて」など宣ふ御容の、いひ知らず淸らに見え給ふを、さる山伏の眼にもめでたくて、うち畏まりて、僧「その人とばかりは見給ひしかど、身を厭ふ心深くて、見給ひしかば、髪なども削ぎやつし侍りてなむ」とて、人々の聞くに殘りなくば言はじと流石に思ひたる氣色を、我もゆかしういみじといひながら、中將の向ひ居たれば、唯、如何にも〳〵、海には落ち入らずなりにけるなゝめり、と聞き給ふに、あさましう嬉しく心安くて、狭「あり所は知り給ふらむな。幼き人や具したりし」と、せめてゆかしう思されて、忍びて問ひ給へど、その事は聞えはてず、僧「中々覺束なくて別れ候ひにし。年頃よりも哀なる事多くてなむ」とばかり言ひ消ちて、僧「懈怠になり候ひぬ」とて立つ。透影隱もなくて、風止るべき樣にもあらぬを、いと哀と御覽じて、あまた持たせ給へる法服ども、事々しきやうなれば、わが著給ひたる白き御衣の、なつかしう著なし給へる移香所せきまで薰みちたるをぬぎ給ひて、狭「山おろしもいと荒けなげなゝめるを、防ぎ給へ」とて賜はすれば、僧「もの覺えて後、木の葉より外に身にも寄せならひ

その人と―妹たる事はわかりたれども

如何にも〳〵―狭衣の心、事情の如何はさてもき

懈怠に―御勤を怠りました

透影―衣薄くて肌のとほりて見ゆる也

事々しき―用意の法服をやるは仰山らしき故

侍らねば、かゝるものは苔の衣に重ね候はむもいと辱く侍るべし」とて、更に手も觸れぬを、猶、狭「あが君〳〵、又對面するまでの紀念にもし給へ。世を背きなむの本意いと深くて、いと年頃になりぬるを、ほだしなどの強ちなるも無きものから、さりぬべき所などなきを、朧氣ならず思ひ定むる程に、月日のみ過ぎ行くを、然るべきにや、弟子にもし給へと聞えまほしくなむ。されどこの度は、うちつけに物騒しきやうなれば、よろづ心にこめてなむ。京にはものし給ひなむや。いつまで斯くてはおはすべきぞ」など宣へば、僧「都の方は、今は見給ふべしと思ひ給へでなむ。殘りの日數今いくばくも候はず。此程過してば、竹生島になむ又暫し候ふべき」といふも、いと行方なきやうにて、惑はしてむは中々年頃よりもいみじかるべければ、狭「さらば唯、今しばしそのわたりにものし給へ。後夜の程過してぞ出で侍るべき。それに聞えさせむ」と語らひ給ふ樣のなつかしさは、げに然ばかりなほ〳〵しき心にもえ立ちやらず。僧「出でさせ給はむに、かの御堂の方に尋ねさせ給へ」とて去ぬる名殘も、胸ひしげたるやうにて、いとおぼつかな

さりぬべき所―遁世するに適當なる場所なき故
よく〳〵考へ居る内に日ばかりたつて居た處が
然るべきにや―これも然あるべき因緣ならん
うちつけに―今直に弟子入りするは輕卒らしき故
殘りの日數―百日籠りの日數の殘り
惑はしてむは―行方知れずにして仕舞ふのは
年頃よりも―九で手がかりなかりし今までよりも
それに―其時話をすべし
なほ〳〵しき―賤しき

う、殘りゆかしとも世の常なれば、佛にも、狭「この行方たしかに聞かせ給へ」と、數珠おしすり給ふ。しるし如何とぞ。

狹衣物語　卷第三之上

㊀狹衣再び彼の僧に逢はんとして得ず、出家の望、飛鳥井姫君の爲に法會を營む　みやまの里の―高野粉川をめぐる途中の景色也　をだまき―枝なき木なるべしといふ　もものふ心―源氏宮に對する戀　御氣色ども―父母の樣子　いつしかと―狹衣の心、父母が歸を待ち居るならんに我が行方知れずと聞きたらば　思はずに憂しと―源氏宮が

み山の里の寂しさは、げに男鹿の跡よりほかの通路も稀なりけるを、夜の程にいとど閉ぢ重ねてける氷の楔は、足もいみじく堪へ難くて、歩みもやられ給はず。そこひも知らずふかき谷より生ひ出でたる木どもの根の、苔がちにうちものふりたる氣色、枝さしなど疎ましげなるに、苦しうて寄り居させ給へる御顏の色合氣色など、山の中にも目とどめ奉るものやあらむと、ゆゝしきまで見え奉り給ふ。

狹谷ふかみたつをだまきはわれなれやおもふ心の朽ちてやみぬる

例の事に觸れて、まづ思し出でらるゝに、これより山深くも入りなまほしきに、うしろめたくわりなしと思したりし御氣色どもの、思ひ出でられて、いつしかと思すらむに、行方なく聞きなし給ひて、いかばかり思し歎かむ、と思ひやらるゝあらましごとに、あぢきなく涙も落ちぬべきに、又うち添へて、思はずに憂しと思したりし折々の御氣色は、

おしあけ方の月ならねど、よろづにすぐれて戀しく思ひいでられ給ふに、いとど道も見えぬまでかきくらさせ給ふ。

狹戀しさもつらさも同じほだしにて泣く〳〵もなほ歸る山かな

と、ことごとなき御心のうちながら、辛うじて、下山に歩み盡き給へるにぞ、いつしかと奉らせ給へる御迎の人々、參り集りたるさるべき若上達部殿上人など、おくらかさせ給ひてげる怨めしさのかはりに、われも〳〵と競ひ出でて、吉野の川の所もなきまで、心慌たゞしくなりぬれど、ありし山伏今朝尋ねさせ給へば、もの騷がしくて、え逢ひ給はずなりぬれば、必ず尋ねて參りあへとて、道季を止め給へる、待ち給ふとてやすらひ給ふに、辛うじて問ひ給ふに、道季「此頃候ひける所も取拂ひて、紙障子に、よべの御衣をなむ掛けて候ひつる。こもりて侍る僧どもに問ひ候ひつれば、妹の月ごろわづらひ侍りけるが、限になりたるよし、告げにおこせて侍れば、夜の間候はむ、もし死なば後のあつかひも見讓るべき人もなきを、如何すべからむ、よろしげならばやがて歸りなむ、

おしあけ方の―「天の戸をおしあけ方の月見れば憂き人しもぞ戀しかりける」
かきくらさせ―涙にくれ給ふ
ことごとなき―父母源氏のことなどを思ふ外には他事もなき
奉らせ給へる―父母より差向けたる
辛うじて問ひ給ふに―辛うじて歸り來れる道季に問ひ給ふにの意なるべけれど詞足らず脫文あるべし
妹―飛鳥井姫君
夜の間―今夜中彼處へ行きて居ちん
後のあつかひ―葬式など

と申して、夜中にまかり出でにける。その往き所などは、知りたりと申す人さぶらはず」と申すに、くち惜しなども世の常なりや。よべ、など今少し問はずなりにけむ、曉に召せといひしかば、心安くて、行もまぎれがまし、人目もいかゞ、など心長閑に思ひしも悔しく、いみじとも世の常の事をこそいへ、いとゞ都の方のものうさもわりなけれど、人々「出でさせ給ひしのち、殿は物などすべて御覽じいれず、夜など、露ばかりも御殿籠らで、覺束ながりあかさせ給ひける」と口々語り申しつゝ、疾く〳〵と急がし聞えさすれば、心にもあらず棚無小舟に漕ぎ歸り給ふ程、胸の關路は隙なし。笛など持たせたる若き人々ありて、折に合ひたる音ふきならしたる、水の上にては、いとゞ面白くをかし。又櫂の雫のしほどけさも知らず顏に、手づから漕ぎ歸りつゝ、聲をかしうて、「あれ妹背の山か、さばれ」と謠ひたる樣どもは、各誇かに思ふ事無げなるは、なほ我ばかり物思はしきは無きなゝめりと、羨しく思ひわたされ給ふ。

狹行き歸りこゝろまどはす妹背山おもひはなるゝ道を知らばや

上べなど―以下狹衣の心
行も―佛の勤の妨にもなる
都の方のものうさ―都へ歸ることの嫌さ
御覽じ入れず―食ひ給はず
棚無小舟に―「堀江こぐ棚無小舟行きかへり同じ人にや戀ひわたるべき」
胸の關路は―常に胸のふさがれるをいふ
しほどけさ―濡れ加減
あれ妹背の―俗謠なるべし
我ばかり―我程憂を懷ける人は無きならんと

よく方のなかりけるも、契心憂くながめ入りて、舟のはたに寄りかゝりつゝ、眠り給へる御まみの氣色なまめかしう見え給ふを、もの好ましき若君達などは、めでたうのみ見奉り給ひて、物心細げなる御氣色を、なほ如何なる御心の中にかと、安の河原の千鳥にも問はまほしかりける。

殿には、ゆゝしきまで戀ひ聞えさせ給ひければ、うち見つけ奉らせ給へる嬉しさの限なきにも、止めがたげなる涙の氣色も見奉らせ給ふに、戯にも、わが思ひよる筋はあるまじきかなと思し知るべし。雪やけに足も腫れてなやましう思さるれば、ゆでつくろひなどして、あるきなどもし給はず。けざやかなりし佛の御契の面影戀しく思ひ出でられ給ふにも、なほいかで此世を、樣あしからぬやうにて厭ひはなれなむ、と心の中ばかりは、ありしよりけにあくがれ勝りて、行に心を入れ給へれど、齋院ばかりには、え覺束なき程にもなし給はず。さるは隔なく見奉る事さへあり難くなりにたれば、この世の厭しさも催され給ふなるべし。

よく方の―避くる途なく往復共に妹背山の邊を通らねばならぬ運命をつらく思ひて、妹背といふ名が心にかゝりて也
安の河原の―「物思はぬやすの河原に住む千鳥何を憂しとて音をば鳴くらん」
殿には―堀川邸では父母が嬉しさ―父母の戯にも―狭衣の心
思ひよる筋―出家の望
ゆでつくろひなど―湯にて暖め治療してけざやかなりし―普賢菩薩の出現せし時の佛
齋院―源氏宮
隔なく見奉る―齋院を

あな心うや―狭衣の心
阿私仙―かの僧を片目の緣にて彈迦の師たりし阿私仙人に比せる也
まどはしてし―行方を失ひし
稻淵の―「年を經し涙かいかに逢事はなほ稻淵の瀧まされとや」
ありなしの―方士が楊貴妃の魂のありかを尋ねたる長恨哥の故事を思ひてよめり
池の玉藻と―奈良の帝御寵愛あり采女が身を投げし猿澤池に御幸ありし時の御歌「わぎもこが寢くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」
忘草も―漸々忘るゝ樣にもなりしならんにされば―「これは」の誤なるべし。ありし曉―かの

狭　思ひ侘びつひにこの世は捨てつとも逢はぬ歎は身をも離れじ

あな心うや、この心ながらは、後の世もいかゞとうしろめたし。

さても哀なりし阿私仙をさへまどはしてし口惜しさも、思ひやる方なきまゝに、かへり來てやあると、粉川に人度々つかはせど、無しとのみ言ひつゝ歸り參れば、妹のはかなくなりにけるにやと思すも、なか〳〵なる稻淵の瀧なり。

狭　ありなしの魂の行方に惑はさで夢にも告げよありしまぼろし

池の玉藻と見なし給ひけむ帝の思も、中々目の前にいふかひなくて、忘草もやう〳〵しげさまさりけむを、されば、さま〴〵夢うつゝとも定めがたう、心をのみ動かし給ふ。げにいかなる昔の契にかとぞ思し知らるゝ。さらばありし曉、その夕べにや消え果てにけむ、とおぼせば、誰ともなけれど、その程よりむつまじう思す僧どもにいひつけ給ひて、七日々々まで、とぶらひをぞいみじう忍びてせさせ給ひける。いかなるにても、この忍草のありなしをだに、聞くわざもがな、と御心に離るゝ折もなし。

僧を尋ねにやりし曉　誰ともなけれど―誰の爲の法事とも言はずに　忍草―飛鳥井の腹の子

㊁狹衣前齋院と若宮とを預る齋宮―女三宮　若宮―女二腹の狹衣の實子　前齋院―女一宮　見つき―狹衣になつき　住吉の里―若宮の處を狹衣が居心よく思ふ樣になれり　入道の宮―女二宮　夢のやうなりし―以下狹衣の心一くだりの―女二宮が一行の返事をもくれざりしも、源氏宮をのみ強ちに戀し居たる時分は別に恨めしくも感ぜざりしも

まことと齋宮は寮へ渡り給ひしかば、若宮はいとど人少にもの寂しうてものし給ふを、大將は心・苦しく思ひ聞え給へど、前齋院の一人住の心細きにより、嵯峨の院の、なほさながら思ひうしろみ給へと宣はすれば、大殿へもえわたし聞え給はで、常に自ら渡り給ふ。夜などもとまり給ふ夜な〳〵おほかり。若宮も見つき聞えさせ給ひて、いみじうまとはし聞え給ふを、いかでかは疎には思ひ聞えさせ給はむ、やう〳〵住吉の里にもなりぬべかゝめり。いづれも、この女宮達をば妹のやうにあつかひ聞えさせ給ふにも、入道の宮の厭ひすて給ひしつらさも、飽かずくち惜しう思しけり。ありし雪の夜の枕の雫は。忘れがたう悲しう思ひいで給へる。今はいかやうにか思しめしなりたるとも、如何樣にしてか、今一度け近きほどの御けはひを聞くわざもがな、と思ひ侘びては、中納言のすけをのみぞ怨み給へど、かひなき由のみ聞ゆれば、いと心憂し。夢のやうなりし夜な夜な、泣き給ふよりほかの御けはひは聞かで歇みき、一くだりの御返しなど、はた見すべきものとも思ひたらざりしも、わが心のあながちに盡しそめてし方より外には、なげき

萬に―源氏をも手に入れ難くなりし今日は、一日に二三度も女二宮へ文をやる故　あま―蜑、尼　限なき―女二宮は勿論貴き御身分なれど　淺からぬ御契―子まである中なるをいふ　をがみわたす―誤あるべし、不詳　ありのまくに―狹衣の實子なる由を聞かせたらばどれ程堀川が寵愛するならんと思ふ「とや」は「とぞ」の誤なるべし　古宮―皇太后宮

のもとに枝さし添へじと、切に思ひ離れし折こそ、これを強ひて怨めしかるべきものとも思はざりしか、萬にとり所なく、悔しき事のみ盡きせぬまゝに、今更に日に二たび三たび、藻鹽草かきつめつゝ怨み聞え給ふさま、あまの濱屋に餘りぬべし。されど見るべきものとも思したらずとのみ聞くは、過ぎぬる方の報にやと、つらく心憂し。限なき御身の程といひながらも、わが身はなどて、さばかりの哀をもかけられ奉るまじきぞ、と淺からぬ御契の程も思し知るまじくやはと心憂ければ、をがみわたすにても止みぬべけれど、月日の過ぐるまゝに、珍しき樣におよずけ給ふ若宮の御樣を、さすがに餘所のものと見なし給はず、かく契深くてわがものにあづかり聞え給へるなどは、いかでかは世の常に思しなさむ。是より外のうき世の慰めはあるまじかりける身にこそ、と思ひ知られ給ふ、哀も悔しさも世の常ならず。大殿も常に渡り給ひつゝ、見奉りうつくしみ聞え給ふ樣は、疎ならぬにつけても、ありのまゝに聞え給はば、如何にとや思さるゝ。宮の荒れたる所々つくろはせなどせさせ給ひて、さるべき家司など別ちなさせ給ひつゝ、古

宮にさぶらひし人々、かたへは嵯峨の院の齋宮などに別れにしのこりは、さながら寂しからぬ様にして候せ給ふ。

雪降りて物心細げなる夕つ方、大將殿内裏より出で給ふまゝに、いかに物心細げなる故郷に、をさなき人、何心なくまぎれ給ふらむと、思ひやらせ給へば、其方様にものし給へるに、思しやりつるも著く、山里の心地して人目も稀なるに、若宮の御乳母たちばかり、はしつ方にうち眺めける程なり。今ぞひき返されたる御座どもなほしなどして、打解けたる姿どもを、かたはらいたげに思ひたるもをかし。若宮は寢起きてむづかり給ひけるに、かく渡り給ひければ、喜びてむつれ聞え給ふ。いみじう哀にて、狭「參らざらましかば、いかに口惜しからまし」とて打涙ぐみ給へる氣色など、なほざりの志とは見えず、いみじう哀と思ひ給へるを、見奉る乳母たちなどは、かゝる人ものし給はざらましかば、限なき宮仕といふとも、此頃はいかに心細く、よるかたなき心地せまし、と殿の御志をうれしと思ひけり。乳母「見えさせ給はぬほどは、つれ〴〵げに思して、いみじ

三 雪の夕狭衣繪をかきて若宮を慰む、女二宮の感傷をさなき人―若宮 其方様に―若宮の方へ行きたるにひき返されたる―不用なる故座席を疊みておくなり

かゝる人―狭衣をいふ、乳母の心

見えさせ給はぬほど―狭衣の來ぬ間

白き唐の―狭衣の服装

かいつき―若宮が狭衣にかぢり付きたるを

大殿など具して―父も同居せる私の邸に來給へ

おとしめ―惡く言ひ

姫君―女二宮

髪は短くて―尼なれば也

う戀ひ聞え給へるこそ、心苦しう。院のさばかり疎ならず思ひ聞えさせ給ふをば、怖ぢ奉らせ給ひて」など聞ゆれば、狭「院の御志に劣るべくも侍らぬものを。なほ幼き人は、中々おとなびさせ給ふまゝに、思し召し知るにこそ」など宣ひて、はしつ方なる御座にうち臥し給へれば、若宮も御懐に入り給ひて、何とはかゞ〴〵しうも聞えぬ事を、聞え戯れ給ふ御あはひ、いとかゝらぬ兒ならば、かたはらいたくやあらまし、と見えさせ給へり。白き唐の御衣どものなべてならぬに、同じ様なる紅のかさなりたる、常の事ぞかし。されど夕映にや、なべてならずめでたく見ゆ。霰のいとおどろ〴〵しう降りたるに怖ぢ給ひて、衣を引き被きて、身にかいつき給へる、いみじうらうたくおぼえ給へば、狭「參らざらましかば、誰がふところにか入らせ給はまし。かく怖しき雨も降らぬ、大殿など具して常に諸共に侍る所に出で給ひね」と宣へば、うちうなづきて、若宮「大臣はよしな。嵯峨の院こそ頭はきら〴〵として恐しげなれ」と、まづおとしめ聞えさせ給ふぞをかしきや。狭「姫君も、髪は短くて、憎げにぞおはしますらむな」と宣へば、頭うちふ

幼き―狹衣の心
宮の―若宮が早く成人なさればよい
起き出で―若宮が
おのが―汝が思ひ捨てて―實は我子なるを女二宮が構はずして
うき節は―狹衣をつらく思ふは尤なれど、若宮をいとしくは思はぬかと也
この―此、子の御心の中―女二宮のかやうにこそ―女二宮も此通り
目ざしたる―目の上の處にて前髪を切り揃へたる髪を自ら氣にして拂ひのけつ

りて、若宮「いな、然れどそれは善きぞ」と宣ふ。幼き御目にも然ぞ見え給ふらむかし、中々さま變りて、いとゞいかに美しげにおはすらむかし、とおしはからるゝも、罪深うおぼえながら、なほゆかしきにぞ、胸うち騷ぎて物哀なれば、枕がみなる笛を取りて吹きすさびつゝ、狹「宮の、とくおよすけさせ給へかし。をしへ奉らむ。いかに美しう吹き給はむ」と宣へば、ふと起き出で給ひて、さかさまに取りて、美しき御口にあてて、笛の音のやうに聲を細く出して、さて、若宮「おのが吹くに似たるは」と宣へば、いひ知らず美しうおぼえ給ふにも、つれなく思ひ捨てて知らぬ顏に見はなち給へる御心の中は、なほ我があやまちと言ひながら、涙こぼれぬ。

狹　うき節はさもこそあらめねに立つるこの笛竹は悲しからずや

さても如何樣にか思したらむと、御心の中もゆかしく悲しき慰には、懷に引き入れ奉りたるも、いとつめたき御身形の美しさなどの、唯かやうにこそと思ひ出でられて、いみじう悲しきにも、げに疎なるべきかたみにはあらざりけり。目ざしなる御髮を切にかき

手習など―狭衣が

おもふ處―「おもふ」は「たがふ」の誤寫歟

御ひとりごと―「うき節も」の歌奉り給ふ―此畫を

内侍―中納言也

四女二宮狭衣の畫を見て悲む

若宮の―狭衣が若宮を預り居る故其方の用向の爲に誰ともよく音信すれども女二宮は狭衣に音信せぬを見てこの人―狭衣

宮―女二宮

ひろげて―狭衣より贈り來れる畫を

やりつゝ、遊びむつれ給ふにぞ、憂き涙はこぼれながら、うち笑はれなどし給ふ。硯引きよせて手習などし給ふに、御殿油まゐるまで、懷よりも出で給はで、火近く取りよせ奉り給ふに、やがて畫の空の景色より始めて、しつらひ有様なども違はで、わが日一日眺め暮したる様などを、おもふ處なく繪に畫き給ひて、若宮の笛吹き給へる傍に、ありつる御ひとりごとも書きつけ給ひて、

狭　塵つもり古き枕をかたみにて見るもかなしき床のうへかな

とて、泣き給へる所もあり。嵯峨の院へ奉り給ふ。内侍侍ふ頃なればなるべし。

若宮の御方ざまにつけて、今は何方にも、疎々しからず聞えかはし給へど、中々入道の宮には猶え聞え給はぬを、院は、「御返など、時々は人傳ならで宣はせよ。かゝる方様につけても、この人をなむ誰が御爲にも賴む」など、常に聞えさせ給ひけり。宮は念誦堂におはしますに、例のもて參りて、ひろげて參らせたるを、誰がぞとて目止めさせ給へるに、御心得させ給へるにや、御顔の色移ひまさらせ給ひて、御經に紛らかさせ給へ

ゆかしがり聞えさせ給ふめる人―狭衣

いでや―中納言の心、狭衣が最初女二宮を嫌ふ様なりしは不審なり

御覽じ―女二宮が床の上の―女二の心、「見るも悲しき床の上哉」の歌によれば、若宮が女二の子たる事も狭衣が承知したりと見ゆ

なべての―女二の心

御心構―故母宮の若宮誕生前後の若心

この世も―現世の父帝もあの世の母宮も

御心の深さ―母宮の

亡き影―母宮の憂き事も―母宮は憂きに堪へずして亡せたるに我は何とて今迄死なぬならん

るさまなど、明暮ゆかしがり聞えさせ給ふめる人に見せ奉らまほしきに、いでや、過ぎぬる方の怪しく思はずなりしぞかし、何事のさはあるべきぞ、と思ひ續くる。斯うのみつもる御文の數も、さだかに御覽じ續けねば、なか〳〵何とも知らせ給はぬに、床の上のかたみなどは、殘りなう聞きあらはし給ひてけりと思すに、なべての人も皆斯くのみこそはあらめ、されど餘所の人は、何しにかは斯うもいひ聞かせむ、中納言などをも、其折は知らぬとこそは思ひしか、などおぼすに、其折の御心惑におとらず恥かしういみじきにも、身ひとつにだにあらず。强ちなりし御心構の程を、院も聞かせ給ふ樣もあらむかしと、他人よりも御心の中はいとほしう、この世もかの世も、唯憂き身ひとつのゆかりに寢れ給ひぬるぞかし、と思しやらるゝ御心のうちなどは、長らふるもあさましくのみぞおぼし知られながら、げにかう死にせぬ例もありけるを、ごよなかりける御心の深さかな、と羨しう、亡き影の見給ふらむも、つきせず恥かしうぞ思されける。

女二　憂き事も堪へぬ命もありし世にまだ長ふる身をいかにせむ

つちきをあらぬには—かの夜の契を今更取消す譯にはゆかぬ　今はなほ—女二の心、狹衣との文の遣取なども見苦しき故、かかる文の來ぬ樣にしたしと　御氣色を—女二の樣子を見れば中納言も返事を催促する譯にゆかぬ　憂きものに—狹衣の心、女二宮につちき者に思はれて仕舞つた　五今姫君を入内せしむべき洞院上の計畫、狹衣に後見を賴む大殿の御方—堀川邸　母上—養母洞院上　行末—我身の行末　聞き給へば—「聞え給へば」の誤ならべし

など思しつゞくれば、今はいみじき事をつくし給ふとも、つらきをあらぬには、なし難けなり。今はなほかやうの事も、いとどかたはなるを、見ぬわざもがなと、あらぬ所のなきも、われしうおほし亂れながらも、言に出でてこそ宣はせねど、いと苦しき御氣色を見れば、いかゞは聞えむ。中納言「常よりは御覽じつ」とばかりなる返事を、憂きものに思ししめられにける、わが心の恨めしさを、今はいかゞはせむと思ししづめず、若宮の御うつくしさの斜ならずおよずけ給ふ事、くやしう悲しう思さるべし。

まことかの、大殿の御方にかしづかれ給ふ今姫君は、廿歳にもやゝあまり給ふまゝに、いとをかしげにねびまさり給ふを、母上いとはなやかに物好し給ふ御本性にて、齋宮の御有樣を見奉り給ふもうらやましう、行末の心ぼそさも、年月に添へておぼし知らるれば、この君をかうまで取り寄せつとならば、同じくば人なみ〳〵にもてなして、かく樣樣にもてかしづき給ふ御方々の、くさはひにもせむかし、など、切に人に劣らじの御心おきてにて、内裏參の事など思し寄りにけり。殿にも斯くなど聞き給へば、まことの御

この御爲—洞院上の爲め、以下堀川の心　母は内裏にも—今姫君の母は一條院に仕へし事あるに又其娘を奉るはさやうの御交らひまでは—今姫君の孫子が女御などになる器量でない　中々なる事—入内後此樣なる事なら入内せしめぬがよかりしと後悔する事あらば　大將—狹衣　一人の御ゆかり—坊門上の子供ばかりを世話する御了簡ならんと　御はらから—洞院上と姉妹　この人—今姫君　大臣のゆかりには—堀川の一族　たちまちの—誤あらん歟

子とも覺されねど、げにこの御爲には、さあらずとも同じ事なれば、などかは、然もありぬべうは、惡しかるべき事ならねど、母は内裏にも御覽ぜしものを、いでや、御心の中もいとほしうやあらむ、あながちなる事とや、世の人も言ひもどかむ、など思すをばさるものにて、時々見給ふに、いかにぞや、さやうの御交らひまでは、思しかくべうこそあらざめれ。堀川「中々なる事などもあらば、たゞなるよりは、かたはら痛うこそは侍らめ。唯大將だに平にて侍らば、自ら誰が御行末にも仕うまつりてむ。同じ御心に思し賴みてを、ものし給へ」と聞え給へば、唯一人の御ゆかりよりほかに、思しあつかはじとにこそはあらめなど、怨しうおぼされて、后の宮と聞えさせしは、尼にならせ給ひて女院とこそ聞えさすれ、御はらからといふ中にも、いと懇なる御中なれば、いかなる事なりとも、御心に任せぬやうはあるまじければ、洞院「この人の事をかくなむ思ひ侍る。大臣のゆかりには、中々かうしも思ひ扱ふまじけれども、年の積るまゝには、世の中も心細きを、おなじうはとなむ思ひ給ふる。たちまちの徒然のまぎれにも、さま〴〵羨し

奏せさせ―后の宮が齋院の―源氏宮が終に入内せずなりしが殘念なるに
かの大臣―堀川ねぢけがましき生出―今姫君の素性のよからぬ
御覽じ知るも―后の宮が御事―崩御の事
御心にこそ―后宮の御了簡にある事
わたらせ給ふるに―帝の后の方へ來給ふ折に、此下に脫文あるべし
思ふかた異に―堀川が別に了簡があるかも知れぬに
御覽ずれど―后宮が怨み聞え―洞院上が御心―洞院上の氣象少しは―洞院上の心

き慰に」など聞えさせ給ひければ、內裏の渡らせ給へるついでに、しかぐ〳〵なむと奏せさせたまひける。帝「齋院の御事のいと口惜しうなりにしを、かごとばかりも、そのゆかりは嬉しかるべけれど、かの大臣のさも思ひ寄らざらむは、如何なるにか」などばかりぞ聞えさせ給ひける。御心の中には、おとゞの思しやりしもしるく、ねぢけがましき生出などを、いとめやすき事とも急ぎ思しめされざりけり。かやうの御氣色と御覽じ知るもいとほしければ、后「故院の御事の後は、よろづ物をのみ思召して、かやうの事を、唯今は物憂げになむ。猶大臣の奏し給はむぞよかるべき」などぞ宣はせけるを、洞院「殊更に大臣の方ざまならでもと、思ひ侍るなる。御心にこそ侍らめ」など、度々聞えさせ給ひけれど、いと苦しう覺えさせ給ひて、例のわたらせ給ふるに、帝「今おとゞの氣色見てこそは。思ふかた異にもあらむを、進み出でてはしたなうや」など宣はせて、御心にも入らぬ事と御覽ずれど、かく怨み聞え給へば、唯思し立つべきさまにぞ聞えさせ給ひける。いたうおし立ち物花やかなる御心にて、少しは御心ゆかぬ事なりとも、女院もかく思し

いたうも―堀川によく相談もせず
大將殿―洞院上が狹衣を招きし故をさなくより―狹衣がこの御方―洞院上
みづから―洞院上自身
わらゝかに―がちがらしてかた紋―地紋、浮紋に對していふ
聞えさせつる―御招き申したるなり

はなたぬゆかりにもあり、我もてなしかしづきて候はせば、えおろかにも思さじを、大臣もさ宣ふとも、いづれの御事にも、え思しおとさじ、と思ひ立ち給ひて、殿にもいたうも聞え合せ給はず、御心一つに急ぎ立ちて、二月ばかりにと思しけり。

つれ〴〵なる晝つ方、大將殿わたり給ふべく聞え給へれば、參り給へり。をさなくより、いづれの御方にも隔なう、殿のならはし聞え給ひつれば、女房なども見え奉らぬはなき中にも、この御方はみづからもわらゝかに愛敬づき給へる御心ざまにて、わざと隔て奉り給ふこともなかりけり。紅のきぬどもあまたが上に、櫻のかた紋なるを著給へる御容、はな〴〵と淸げにて、見るかひある御もてなし有樣なり。洞院「年のつもり侍るまゝには、世の中もいと心細くのみ侍るにも、後の世の爲までも賴み聞えさせてこそ、中宮の御方には、明暮へだてなくものし給ふなれど、此方にはいと戀しき程にのみなさせ給へば、思ひ侘びて聞えさせつるなり。この世は實に、斯うても過ぎ侍りぬべし。後の世のためを思ひ侍るにも、いとくち惜しうのみ侍れば、この姫君の御有樣をも、いかでなど思ふ事

内裏の度々―帝より今姫君入内の事を女院に催促あり―し故斷りかねて承諾せんと思ふと詐りていふ也

ぼけ〳〵しう―毫碌したる女ばかりを力にも出來ぬと思へば、自分の外には頼になる人もなき故

内裏わたりの―帝はよもや嫌ひ給ふ事もあらじと力強く思ふ

いづれの御事を―誰をも疎畧に思ふ譯ならねども

かくりける御いそぎ―今姫君入内の準備

幼うより―幼時より巧者なるに

これは―今姫君

この御後見―今姫君の世話する母代

侍りしかど、同じ心に思ひあつかふ人なき事は叶ふまじげに侍りしを、女院に、内裏の度々聞えさせ給ひければ、いかにもかの御ことを否び聞えさせむが辱さに、いかにせましと思ひ侍るめれど、いさや、今はいとほけ〳〵しうなり給ひにける人ばかり頼みてはいかゞなど、心ひとつなるやうに侍るを、聞えさせむとてなむ。内裏わたりの御有様などは、さりともえ御覽じ放たじとなむ、頼みきこえて」など宣へば、狹「いづれの御事をも思ひわき聞えさせ侍らねど、何となう身のいそがしう侍る程に、怠り侍るにこそ。中宮の御方などには、おなじ百敷にて、自ら覺束なからぬ心地し侍るを、げにさやうにておはしまさば、同じ事にこそは。かゝりける御いそぎをも承らざりけること」などきこえたまふ。洞院「今様の人は、幼うよりあるべかしうこそあれ。これはいかなるにか、あまり心もとなき御有様なゝめるぞ、さやうの御交らひには、かひなき様にやと見え侍るを、さるべき事など教へ聞えむ人もがな、と言ひしを聞きて、この御後見の、琵琶をかしう彈く人ありとて、此頃習はし聞ゆるを、同じくは、いかでまことしく、人の聞

まことしく―本物らしく

ひがごとども―今姫君の琵琶の悪しき所

かやうの人を―狹衣の如き人を一人子に持たぬが殘念

こぼれて匂ふ―「淺緑野べの霞はつゝめどもこぼれて匂ふ花櫻哉」

渡り給ひて―今姫君の方へ行きて

かばかりまで―狹衣の心、洞院上が斯迄思ひ立たるは

憎からざりし―狹衣がはじめて今姫君を見し時の事卷一にあり

かせ給ふばかりも、とこそ思ひ侍れ。此頃ばかり、御暇のひま〳〵に、このひがごとどもも直させ給ひてむや」と聞え給へば、狹「人の師などすばかりにては、直さるばかりの僻ごとには、よも侍らじものを」とてうち笑ひ給へる愛敬、こぼるなどは、是をいふにやと見えたるを、うちまもり給ひて、洞院「何事も、御有様ばかりはいとありがたうこそ。などて唯世の常のさまにても、かやうの人を一人まうけ侍らずなりにけむ。若かりし程は、斯うしも覺え侍らざりしに、今こそいと心憂く侍れば、かくあながちなる事をも思ひ立ち侍るぞや」など宣ふ。淺緑なる空の景色いといみじう霞みわたりたるに、こぼれて匂ふ御前の花櫻、常よりもおもしろう見わたさるゝに、いとゞ催されて、洞院「物の音も榮えぬべき程なゝめるを、渡り給ひて少しも聞きならし給へかしと聞えよ」と宣ふに、かばかりまで思し立ちにけるはげにめやすきほどの御有様にこそはなり給ひけれ、げにさま〴〵のもの思に、心も盡き果てて、憎からざりし風の迷の後も、え氣色見ぬぞかしと、なまゆかしければ、狹「やがてかの御方に參り侍らむ」とて立ち給ひぬ。

☆狭衣今姫君を見て其の痴呆なるに驚く、母代より飛鳥井姫君の消息を聞く
上の御ぶきて―狭衣の心、洞院上のしつけならんすぎ〳〵―次々色にて―色髪として髪の美しきをいふとぞこちたうは―多過ぎはせず頓にも居ず―直に坐りもせずさはいへど―狭衣の心　この身の程―今姫君の身分にては言ふべき事も覺えず―今姫君がおはしそめたりし日―狭衣が始めて訪ひ來し日　かの母―母代　母上―洞院上　おびれ―幼稚に吉野川―母代のよみたる歌卷一にあり　これより後―吉野川の歌をきくて以來、よき歌もあしき歌も多く聞きたれども

例の御簾の許にて、狭「人や侍ひ給ふ」とおとなひ給へば、蚊の聲ばかりにて、「内にこそ」といふまゝに、走りて隱るゝ音す。上の御おきてなゝめりと聞き給へば、御簾を引きあげてのぞき給へるに、人々あまたありけるが走り重りて、衣の裾を各踏まへつゝ、すぎすぎに倒れ臥したるは、牧の馬の心地ぞしたる。几帳なども倒れなどして、いとゞ物騒がしければ、つくゞゝと見入れて頓にも入り給はぬに、姫君も、端つ方におはしけるなるべし、今ぞ立ちて入り給ふ。色々の衣どもに、濃き擣ちたる櫻の小袿著給へるうしろで、いとをかしげなり。髪は少し色にて、こちたうはあらず、さばらかなるさがりばなど、あてやかになまめかしき樣にて、小袿とひとしうぞ見ゆる。うち見かへりて、顔いと赤うなりながら、頓にも居ず、あきれたる顔、さるかたに美しげなる樣ぞし給へる。さはいへど、重りかならぬならひの立ち走りやすなるこそはと、この身の程にては、それを罪とも見なされ給はざりけり。辛うじて母屋の柱のつらに居給ひぬれど、扇などの行方も知り給はず、唯うち伏し給へる髪のかゝり、つらつきなど、少しけぢかくては、

今少し目止らぬにしもあらず。狭「疎々しくのみ思したるがつゝましさに、常にもえ參らぬを、又疎なるにやおぼしなすらむと、心ときめくばかりは絶え侍らず」など聞え給ふを、言ふべき事も覺えず恥かしげに、汗のみ流れて侘しきに、始めおはしそめたりし日、人々いらへ遲く聞えたりとて、母代が腹立ち罵りて、人々をはしたなく言ひしを思し出づるに、又如何に言はれむとおぼすに、身もわなゝかれて、いとゞ更に物も言ひ出づべうもなければ、かの母咏みかけたりし歌をこそは、母上聞きてほめ給ひしかと、まれまれ思ひ出でて、いたうおびれしどけなき聲にて、今姫「吉野川何かは渡る」と一文字も違へず言ひ出で給へるを、げに人の忘れぬふしやよみ出でたりけむと聞き給ふも、これより後、よきもあしきも數多見聞くを、さしも御心にも耳にも止らぬを、いつぞやかゝることの聞えしと、おぼし出でたるはをかしきに、その折のいらへは、又いかゞありけむと、忘れにけるぞいと口惜しきや。ほゝ笑み給へる氣色は、いひ知らず恥かしげにて、

狭　吉野川かへすゞゝも渡れとや渡るより又渡れとや瀬に

入立つもこと―何程立入りても構はぬちしき樣子は氣がおけずして上―洞院上

筋ことに―今姫君の琵琶は特別なりと也

猿―轉柱の事かといふ

いたち―此頃の俗謠なるべし心もすみ立ちて―母代がうかれていなごまろは―上の歌のつゞきなるべし

入立つもことに咎め顔ならざめるは心やすけれど、ひとわたりも心劣ぞし給ひぬる。母代局なるに、かくなむと人の告げければ、急ぎのぼりて、姫君の居給へるうしろの方の几帳おろしたる所に居たり。さなめりと見給ひて、狭「いづら、琵琶承れと上の宣はせつるは」と宣へば、母代「いでや、人のなべて聞き知らせ給ふべくも侍らぬ、筋ことにこそ侍るめれ」と、いみじうしたり顔なる氣色ことにて、琵琶をとりよせて姫君に奉るまゝに、母代「まづ猿をつなげ」とさゝめくしも、例のあらはにぞ聞ゆる。教へられていとしどけなう、ゆる〳〵とぞつなぎ給ふ。又さし寄りて、母代「その次には、かなでをかなでを」と、肘して突くめれば、今姫「いたち笛吹く、さるかなづ」と、彈き給ふを、母代いと面白うめでたう思ふに、え堪へず心もすみ立ちて、末に待ち取りて、扇うちならして、母代「いなごまろは拍子打つ、きり〴〵すは」など、細目開けて首筋引立てをれかへり〳〵彈く側顔の、御簾に透きて見ゆるは、をかしなども世の常の事をこそいへ、明暮ものむづかしき心の中、けふぞ皆忘れぬるに、思ふ儘にも、伏しまろびえ笑は

御後見の―狹衣の心、從來は今姫君の不肖なるは世話する人の惡きにて、當人は只田舍びたる迄の事ならんと思ひしに、今見れば案外なりかど過ぎて―才はじけすぎて―あな恥かしや―以下狹衣の心　唯國王とて―今の帝は國王と申せども、只花々しくいかめしきのみならず　このわたりより―堀川の由緣とて所謂る人物を奉らむは恥辱なり　給へむよ―「給はむよ」なるべし　ひとへには―朽

ず、念ずるぞいと侘しかりける。ふたかへりばかり彈き給ふに、いとわりなき聲をおとしあげ、唱歌するに囃されて、かき返しかき返し、同じ「いなごまろ」にて、時もやゝかはるは、いとすべなきまでおぼえ給ふ。御後見のいとさかしく、かたはらいたき樣したるもてなしに、よからずあやしき若きものどもの集りて、人にうちはやりありつかぬなゝめり、自らの御有樣も、唯おびれて、うちさとび給へるにこそは、など世の常におもひつるを、いとことの外におはしけるかな、又これを内裏に參らせむなどまで、思し寄りつらむ上の御心ぞ、今少しあさましきや、年頃もいかにぞやある御心とは見つれど、あまりかど過ぎて、何事ももて出でて、好ましき所などはすゝみ給へる、と見つるは、そらごとにこそありけれ、かうまで心おくれ、思ひやりなきわざし出で給ふべしとは、思はざりける我心さへ、口惜しきまでぞ思ひ知られ給ひぬる。あな恥かしや、見るに唯國王とて、あざやかにそばくしうもおはしまさず、さばかりなまめかしう恥かしげなる御有樣に、このわたりよりとて御覽ぜられ給へむよ、げにひとへには思召すべきにもあ

予定規に此人を以て堀川一家を評價もし給ふまじけれど

うへ―洞院上

かたはなる事―今姫君の缺點に氣がつかぬなるべし　うちわたり―洞院上が今姫君方へ來て

かうしも―斯く入内せしめん抔と洞院上が思ひ立つ事もなからんに　ありつかず―落付かず

らねど、大臣などの見るくし、出し立てけむよと思召され給はむ、いと名だたしう憂き事にこそはあらめ、など思すに、いかさまにてか、この事今日明日の程に止むるわざもがな、とあぢきなきもの歎さへ添ひぬる心地し給ひてけり。まことにうへの御心、もとより、こまやかに人のありさまなど知り給ふ事もなく、唯ひとへに人に劣らじの御心華かにおはして、女院の御方ざまも頼もしきを、中宮の御有樣に、やゝ立ち勝りてもてなしかしづきて、われも出入り見あつかはむと思し立ちてしかば、少々のかたはなる事も、見とがめられ給はぬなるべし。時々うちわたり見奉り給ふには、唯いとおれくしう、物つゝましげなる樣にて、居給へるかたちなどは美しけれど、内々のかたくなしき御有樣など、見咎め給はぬなるべし。けしからず聲高になどやうに見え給はば、かうしもえおぼし立たじを、もとよりいと言ふかひなきやうにおはせしを、いとゞ母上におくれ給ひて、程もなく、知らぬ人の御あたりに、ありつかず引き別れて、はなくともてかしづかれ給ふに、われかの心地もせずほれ惑ひ給へるに、此御後見さへ、心にまかせで、

手づからの―今姫君自身の

さばわが―狹衣の心、扨は今姫君自身のよめるならん

ゐり深う―彫り入れたる如く一字一字にしつかりと書きたる

いと荒々しう責めおどし聞ゆれば、いみじう怖ぢ勝りて、うつし心もなき樣に、月日に添へてなり給ふなンめり。持ち給へりける扇の、うち置かれたるが、手習せられたるは、手づからのしわざにやとゆかしうて、取り見給へば、まだはかゞしうも續かぬ文字どもの、いと幼くあさましき樣なるは、何と見解くべうもあらぬを、切にまもれば、「天地を袋に縫ひて」とあるは、母代が習はし聞えたる祝ひごとなンめりと見ゆるに、繪に苗代し、荒田うちなどしたる所に、「母もなく乳母もなくて、春のあら田をうち返しうち返し、返すゞも物をこそ思へ」とあンめり。又、「柳櫻をより合せ、うせざンめれば、亂れぬめり」とあるは、歌にやとて切に讀み續くれど、一つにはあまり二つには足らぬを、怪しくと思せば、さすがに繪の心どもなンめりと見ゆるにぞ、さばわが詠み出で給へるなりけり、三十一字とだに知り給はで、何しにかは扇の繪の歌よまむとは思し寄るらむ、とをかしきに、書樣さへうらうへ上下等しうて、一つに足らぬ歌を、やがて扇のひまもなく書きなされたる文字樣、ゐり深うわけ置かれたるなど、すべて斯かるはまだ見

きち〳〵しく―今姫君の手は立派になるべし

わが御心の程―母代の氣風の知らるゝ樣に今姫君を仕立てられたれば、琵琶も洞院上より直せとの御詞はありたれど直さば却て惡くする樣な事になるべし

人の御文―狹衣が人にやりたる文と思はせて―誤あるべし

けふの―狹衣が飛鳥井姫君に賜りし歌の下句

ざりつるを、樣變りてうちおき難うぞおぼされける。母代うち見おこせて、母代「きらきらしく遊ばしつべう侍るめり。今樣の手は、草がちに濃く薄き墨つき紛はして、うちよろぼひて侍りつる。これは、强き文字づかひ昔やうに侍る。さは見知らせ給へりや」といふにぞ、え堪へで打笑はせ給ひぬる。狹「さやうの事もはかゞしう見知り侍らねど、げにかくこそはと、わが御心の程見えて、習はし聞えさせ給ひければ、琵琶もなほせなど上の宣はせつるを、中々ゆがみぬべうぞ侍りける」と宣へば、母代「いでや、然まで事事しうはいかでか」とてうち笑ふ氣色、いとしたり顏に心づきなしとも世の常なりと思ふに、母代「まことや、思ひかけぬ人の御文をもちて侍りしかな」と言へば、狹「朧氣にては散らさぬものを、世に侍らじ」と宣へば、母代「げに世の常の御事とは見え侍らざりき」と思はせて、心だつが憎ければ、狹「空言しける人なンなり。さやうの事はまだならはず」など殊の外に宣ふを、いと高らかにうち笑ひて、母代「けふの晝間はなほぞ戀しき」など、やさしだちたる心づきなさぞ堪へ難けれど、狹「まいて然まではいつ習ひにける戀

御秣がくれ―これも狹衣の歌の句

さらばこそ―「さればこそ」歟

この御前―今姫君

中納言の女―飛鳥井姫君也

召しくかど―帝が

御覽ずる樣も―御氣附の仔細もありしとかいふ

尼になりて―飛鳥井姫君が

の道にかは。猶たしかに宣へ」とあるにぞ、母代「大宮のわたりにて御秣がくれせさせ給はざりきや。萬おしはからるゝ御口淸さかな。いとよう知りて侍るものを」といふにぞ、耳とどまりて、何となう胸騒ぎて、狹「更に覺えぬぞとよ。たしかに唯宣へ。何のたよりぞ」と今少し近づき給へば、母代「いで、さらばこそ。殊の外に宣はせつれども」とて、母代「この御前の御母、故平中納言の妹にはおはせずや。その御姉は女院に中納言とて候ひ給ひしを、長門の前司何がしの朝臣に盜まれ給へりしぞかし。守うせ侍りにしのち、尼になりて常磐といふ所にぞ侍る。中納言の女は乳母のもとに心細げにてなむと聞かせ給ひて、召しょかど、乳母、心かしこき樣にもてなさむとて、參らせざりし程に、御覽ずる樣も侍りけるとかや。前の別當左兵衞督の少將となむ名告せ給ひけるを、さやうの生公達の陰妻にて益なしとて、三河の守何がしにつけて筑紫へ出し立てて侍りける。女は本意なきものに思ひ歎きて、海の底にも入りなむとて逃げて侍りけるを、かの長門の尼君の、不意に尋ね取りて常磐に置きたり。明暮物を思ひ歎きて、尼になりて侍りけれど、

さばかりなるは―あの位な器量は無い事もあるまい

濃かに語らふべき―母代の人となりが

七狹衣常磐尼を尋ねて飛鳥井姫君と其子との消息を聞く

其人を―今更飛鳥井姫君を尋ぬるも異なものなるに

しのぶ草―飛鳥井姫君の遺兒

かばかりの程ながら―是位の近處に居ながら

先つ頃つひに亡くこそはなり侍りにけれ。かたちなどは御覽じけむな。さばかりなるは自らもや侍らむ。唯人樣などこそ、怪しきまで有り難うをかしきまで見え給ひしか」などいふは、如何なる夢語ぞと、心もことに騒げど、狹「今更にこそおぼえね。聞き違へ給ひつる事ならむ」とて、濃かに語らふべき人樣にもあらねば、唯かの常磐といふ所を尋ねむと思して立ち給ひぬ。

世にありと聞くとも、今は其人をとかく思ひ尋ねむも、いとねぢけがましきを、ひたすら亡くなりにけむは、中々心安くめやすきに、唯かのしのぶ草の行方のいみじう聞かまほしきにより、いとど御心地も靜かならで、道季を呼び給ひて、よろづにぞ語らひ給ふ。所の程などはいとしるかりければ、黃昏時の程に、いと忍びて京を出で給うて、雙の岡のわたりにてぞ馬に乘り給ひて、かばかりの程ながら許多の年頃おぼつかなくて過しけるも、淺ましくいみじきに、ありくてなき跡をしも、誰に逢ひ見るべきにかとおぼすは、くち惜しう悲しとも、世の常なり。月もおそく出でて、空も霞み渡りたれば、雲の

たゞずまひだにはかゞ〳〵しうも見えず、道の空もたど〳〵しう、習はぬ御心地にいとゞ心細くわりなし。

狭なき人のけぶりはそれと見えねどもなべて雲井の睦まじきかな

霞まむ空を見るべきものとは思はず、程なくあり〳〵て立昇りけむむなしき空は、恨めしさも悲しさも様々に、中々なる心地しぬべけれど、跡の白波をだにゆかしがり給ひしかば、まして眞木柱のよすがもいかでかはとと思すなるべし。近うなるまゝに、風につきて念佛の聲々仄かに聞ゆるは、その人の名殘にこそはと聞きつけ給へる、かの「底のみくづ」と書きつけたりし扇見つけ給へりしに盡きはてぬと思されし涙も、殘りある心地ぞし給ふや。おはし著きたれば、門などもなくて、唯釘ぬきといふものをぞしたりける。道季を入れて、若しありし山伏やあると尋ねさせ給へば、しばしありて、「とく唯入らせ給へ」とあれば、しるべするまゝに入り給へり。少し離れたる所の、紙障子などばかりにて、あら〳〵しき假初の居どころと見えたり。おまし敷きなど經營し騒ぐ姿、見

跡の白波をだに―姫君入水の噂ありし當時は、其入水の跡をさへ見たく思ひしかば
眞木柱の―「吾妹子が來ては寄り添ふ眞木柱そも睦まじみかたみと思へば」
いかでかはとと―「と」は衍文
釘ぬき―木柵ありし山伏―初瀬にて逢ひし僧なり
騒ぐ姿―かの山伏の僧の姿
見給ひしより―初瀬にて逢ひし時よりは人間らし

給ひしよりは少し例の人に似たり。狭「夢のやうなりし對面の後、よろづに尋ね聞えしかば、行方なうまどはし給ひてしかど、おぼろげならぬ志の程には、げにこそ端山のしげりもさはる所なきわざに侍りけれ。今朝、思ひかけず、このわたりにや通ひ給ふらむといふ人の侍りつれば、喜びながらなむ。この世とのみは契り聞えざりしを、心憂く」など怨み給へば、眞「聞えさせし妹のわづらひ侍りける、限になりて侍りける、今一度逢ひ見むと消息せさせてさぶらひしを、必ずあひ訪はむと思ひ給ひてまかり出でし程に、案内も取り申さでなむ。終に亡くなり侍りしかば、念佛も眞心に仕う奉りて、後の世の弔をだにと思ひ給うて、かく籠り侍るも、明日なむ四十九日になり侍る」といふを聞き給ふに、涙とりあへずこぼれ給ひぬ。狭「粉川にて思ひかけざりし御物語の殘を、こまかに承らまほしかりしかど、よからぬ事どもを、なべての人にも聞かせじ、と思う給へし程に、淺ましうなか〳〵なりつる心の中を、又今宵遂にかひなく聞きなし侍るも、唯さばかりにてこそやみ侍りぬべかりけれ」とて、おしあて給ひつる袖の雫、疎ならず

端山のしげり―「筑波山端山繁山繁けれど思ひ入るには障らざりけり」
喜びながらなむ―喜びて尋ね來れり
取り申さでなむ―申上げずして歸れり
おしあて―顔に

見奉るに、思ひかけぬ心地する、さる樣こそはあらめと思ふに、斯うまで尋ねられ奉るべかりけるにては、げに口惜しうもありける命の程かなと、然る山伏の心地にも、今ぞいと口惜しく悲しかりける。僧「都の内は、またかへり見るべきものとも思ひ給へざりしに、この人の終に逢ふべき契や侍りけむ。故なにがしの朝臣の女房のまかり上りしに、切にいざなひ侍りてしかば、かゝる序に比叡の山拜み奉らむの志にて、まかり登りし道に、思ひかけず見つけて侍りし有樣など、取り申すもいと氣疎き心ばへの程と、聞かせ給ひぬべけれど、ひたすら身をなきものになし侍らむと思ひ入り侍りし、海の底をも妨げて、この山里に尼になりて過させ侍りつるを、こゝかしこ修行の程に委しき有樣もえ承らざりしに、いみじう物をのみ思ひ侍りつれば、病のつきて遂にかくなりぬ」といふさま、いとすく〳〵しうて、委しき有樣など問ふべき樣にもあらねば、狭「さてその筑前の尼君はこゝにか」と問ひ給へば、僧「しか侍る。明暮戀ひ歎きて、いとゞほれぼれしき樣にぞなりて侍れど、彼に何事も仰せ給へ」とて、僧「かくと案内傳へ侍らむ」と

さる樣こそは―何か仔細のある事ならんと僧が思ふに

この人―飛鳥井姫君

取り申すも―申上ぐるも

すく〳〵しうて―無愛想にて

戀ひ歎きて―故飛鳥井姫君を

て立ちぬ。佛すゑ奉りたる方に、御座などひきつくろひてぞ對面したる。げに年經にけるけはひしるけれど、故なき樣にはあらで、尼「思ひ給へかけぬまほろしにやと、いとゞ亂心地にも靜め難う」とうちわなゝく。狭「魂の在處はこゝにこそ尋ね參り來つれ。こまかならむ御物語に少しもや慰むと、試みまほしう」などうち始め、この年頃さまざまに思ひ慰む世なう、歎き過しつる有樣などを、夥しからぬものから、少しづつ洩しいで給へる氣色など、いと忍び難げにせきやり給はぬを、さらばこの御心に、いとかうこそ思され給へりけれ、げに海の底に思ひ入りても、なほあまりあるわざかな、と聞くまに、短かりける命の程、今しもぞいとゞ悲しくくち惜しかりける。まして聞く人は絞るばかりになりにけり。狭「さても、その幼かりけむ人は侍るや」と宣ふに、尼「樣々にかひなく聞えむもいとほしければ、あが君や、すべて聞えさせむ方こそ侍らね。斯かりける御事を露ばかり知り侍らましかば、限ある命をこそえ止め侍らざらめ、この宣はする御事をさへ、かく跡はかなくはしなし侍らざらまし。如何なる事ぞなど、常に夥しか

魂の在處は―「尋ね行くまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」

さらば―尼公の心

短かりける命―姫君の

幼かりける人―幼兒樣々にかひなく―何につけても埒あかぬ樣な事申上ぐるもむ氣の毒なれど斯かりける御事―狭衣との關係宣はする御事―遺兒

夥しかりし心もきて―懷胎の身ながら身を投げんとせし了簡

かけて―一すも

兵衛督のしるべ　きゆかり―右兵衛督の子と狭衣が稱し居たれば也

自らは―姫君自身は非常に其子を大事にして

斯うにこそ―狭衣の御子なりし上

御美しさ―其兒の一品の宮―一條院皇女

知る人など―此兒の素性を知る人

言はむも―「言はむと」なるべし

忍ぶの露―遺兒御前―一品宮こそは、狭衣の心

りし心おきてをも問ひ侍りしかど、かけてかやうなる事とは仄めかし侍らざりしよ。いと心はかなく、いふかひなかりける心の程かなと、今宵こそ承りあきらめ侍りぬれ。兵衛督のしるべきゆかりとばかりぞ、ほの聞き侍りしかど、かの自らは更に殊の外に思ひて、數ならぬ身の程にたぐひ給はむも、いと辱なきものになむ思ひたまへりしかば、然らば斯うにこそ侍りけれ。世に知らぬ御美しさを聞かせ給ひて、一品の宮のいみじうゆかしがらせ給ひしかば、百日の折に參らせ奉りたりしを、やがて止め給ひて、乳母たちなど數多しておほしかしづく樣などは、今自ら聞かせ給ひてむ。いと哀に戀しきものに思ひ聞え給ひながらも、かゝる山がつの垣根に生ひいで給はむもいとくち惜しきを、如何はせむなどぞ思いたりし。宮にも、中々なる知る人などやいで來て、知り顏にいはむも忍ばせ給ふなゝめり」などいふを聞くにも、さらに思ひ慰む方なく、よろづいとかひなき中にも、なほこの忍ぶの露は、斯うてやむべき心地もし給はず。御前わたりにこそ、美しさに罪ゆるしても思すらめ、侍ふ人々などは、いかに侮らはしく思ふらむ、

列まで―宰相の君位の身分になるなちん

斯うこそ―實は我が隱し子なりと言出さんも

人のまどふなる道―「人の親の心は闇にあちれども子を思ふ道にまどひぬる哉」

遠山鳥にて―隔てたる儘にてわが過の心地―尼自身の仕損じ

參らで―一品宮へ

誰かはと―尼公より外には誰かあるべきと

かくなむと―實は狭衣の子なりなどと

見せ給へ―其兒を

幼き程こそさ言ふ〳〵もあらめ、物の心知りおとなび行かむまゝに、その數多侍ふめる中納言、宰相の君などの列までこそあらめ、さりとて今は、斯うこそありけれなど聞えいでむも、人のまどふなる道といひながら、なほ如何にぞやおぼゆれば、遠山鳥にてやみぬべき事にこそは、と思しつゞくるに、亡きものにおほしつる年頃より、今少し御心の中いとあはれなり。狭「いさや、さまゞ〳〵聞えむ方こそなけれ」とて打泣き給ふに、まことにわが過の心地して、いとくち惜しう歎かしければ、尼「今自ら、さるべき御中には、覺束なからぬさまにもならせ給はなむ。なべての樣にもてなさせ給はざむなれば、行末頼もしう侍る。自らも、今は參らで久しうなり侍りぬれど、この御有樣によりてぞ、時々も立出でぬべく侍る」などいふ程に、後夜の念佛も始めつなり。尼君には、狭「かひなき世のかたみにも誰かはと、今よりは頼み聞えてなむ。宮の邊に、かくなむとゆめ〳〵な聞え給うそ。かまへてなほ見せ給へ」などぞ語らひおき給ひける。明けぬさきにといそぎ出で給ふとて、遣戸を押し開け給へれば、曉かけて出づる月影ほのかに霞

心の中―飛鳥井姫君の

いかで〳〵と―如何かして狹衣に思はれたしと思ふに心止め給はで―狹衣が

み渡りて、四方の山邊心細げに見渡されたるに、近き寺々の鐘の聲々も聞えつゝ、いづくに誦むにか、經の聲もほのかに聞ゆなり。所の樣もをかしう心細くなりけるを、物思はしくて眺め過しける心の中おぼしやるに、いといみじう哀なれば、とばかり眺め入りて、とみにも出でやられ給はぬに、唯この佛の御後の障子のつらに、若き人々物語するを聞き給へば、出で給ひぬと思ふなるべし。人々「あな口惜し。今少しとく尋ねておはせで」「をかしの御匂や。猶とまりて枕にもうつりにたり。かゝる人を、この邊に時々にても待ちつけ侍りておはせば、如何にめでたからまし。いみじかりける御心惑は、げに身を投げ給ひけむも理ぞかし。やむごとなき人々だに、いかで〳〵と思はれ給ふに、露ばかり心止め給はで、心盡し給ふ人々多かりとか」「姫君の美しさに、なべての兒ども覺え給はざりしは、斯くにこそおはしけれ。年經にける名殘をだに、さばかり忍び難げなりつる御けはひを、この曉までの命だにおはせざりつらむ。いみじかりける幸を、口惜しき事なりや」といへば、今一人出で來て、「三河守の妻にておはせましよりは、これ

まろはかくて―自分も此姫君の樣にして死にたし

常磐の森に―姫君出發の少し前によみし歌

木綿著鳥も―これも姫君の歌と共に一卷下にあり、「も」は「よ」の誤

云何云々―提婆品の句

明けぬる由申せば―從者が思ひ立つ方―出家の志佛の導き給ふにや―汝に逢ひしは

こそめでたけれ。まろはかくて死なばや」などもいふなり。いと若き聲にて、「今こそ思ひ合せらるれ。明日下り給はむとて、夜さりまかりたりしかば、乳母のおとどがさゞめきがちにて言ひしを」など語る。かの「常磐の森に」と宣ひし曉に、車にもえ乘りやり給はで、「木綿畠鳥も」とありし樣など見ける事どもを語るに、いとど哀のみ勝り給へど、よろづいとかひなし。

狹　秋の色はさもこそあらめ賴めしを待たぬ命のつらくもあるかな

などおぼし續くるに、念佛の回向果つ方は、唯打聞く人だに哀なるを、まいて御袖もえひき放ち給はざるべし。「云何女身卽得成佛」などいふわたりを、いと密に口ずさび給へるが、はな聲なりしも今少し哀にめでたきを、聲しつる人々、「いまだ出で給はざりけるものを。聞きやし給ひつらむ」といふ。明けぬる由申せば、出で給ふとても、山伏にあひ給ひて、狹「人知れず思ひ立つ方の心深きを、佛の導き給ふにやと、賴み聞えてなむ」など語らひ給ふさま、いと悲しければ、われも打泣かれて、狹「さのみ思し取りてけるを、

いかでか御心に違ふことは侍らむ。さるべくこそ、釋迦佛も三途をも出で給ひにけれ。前の世の契おはしますらむ」とて、明けゆく光に、目もあやにめでたき御容をうちまぼりつゝ、僧「げにこの五濁惡世には餘らせ給ひけり。いかにして假にも宿らせ給ひにけむと、うち歎くめり」とぞ聞えさする。狭「さて此後は、何處にかおはすべき」と宣へば、僧「この尼君の最期に逢ひ侍らむずれば、遠き修行などえ仕うまつるまじければ、和泉の嶽、竹生島などにぞ、今年明年は侍ふべき」などいふも羨しく、打添ひぬべうぞ思さる。されど、明うなりぬべしと急がし立てられ給ひて歸り給ひぬ。かの、人知れずおきて給ひし七日々々の果にもなりぬれば、忍びたれど又々添へさせ給ふ事ども疎ならず、常磐へも、さるべき人々に宣はせて、僧どもの布施、かづけ物、誦經の料など、なべてならぬ樣にてぞ數多遣しける。その後は、尼君に、まめやかなる樣に思しやりつゝ、絶えず訪はせ給へば、かたじけなき御志を見るまゝに、短かりける命をいとゞ悲しう、姫君をかく思はぬ方にしなし聞えたるも、いと悔しう思へど、今は引きかくし紛らはし

さるべくこそ―「さるべくてこそ」歟
打添ひぬべう―連立ちても行きたく
短かりける命―飛鳥井姫君の姫君を―飛鳥井の遺子を一品宮へ讓りて仕舞ひし事をも

聞ゆべき隙も忽にはあり難く、もてかしづかれ給へば、すべき方なきなるべし。

二月には、今姫君の内裏參あるべければ、おほき大殿、腰いたきまで出入り急ぎ給ふを、殿の内の人も、「幸おはしける君かな。今こそその人の御むすめなども言はれ給へ。いと物げなき母の局より生ひ立ちしさま」など、めでたきにつけても、世の人の物言は聞きにくきものにて、この頃のあつかひぐさにこそいひ罵りけれ。大殿のみぞ、更にいと見苦しき事に思して、殊に口入れ給はで、夜晝言ひくねられ給ふ。大將殿も、かの「吉野川」の後は淺ましく、帝の渡らせ給はむ度毎に、よみかけ奉り給はむずらむと、かたはらいたう侘しき事限なし。琵琶の音も、母代が唱歌してはやし聞えさせむさま思ひやられ給ひて、獨笑せられ給ひて、いみじき物思にぞなりにける。如何なるわざをして、この事思ひ止めさせ奉らむと、まめやかにわりなく思し歎くしるしにや、母上の御兄宰相の中將、はなれぬ中にて、自ら見給ひて、なつかしき御容貌に思ふ心つきて、ほのめかし給ひけるを、上も聞き給ひながら、かく思し立ちぬるも、いとねたう心やましきを、

宰相中將今姫君の許に通ふ事露れ入内の沙汰やむ、今姫君出家
おほき大殿―太政大臣、洞院上の父
大殿―堀川
見苦しき事に―今姫君の入内を言ひくねられ―洞院上に
吉野川―吉野川の歌を聞きし後は
帝の―狭衣の心、入内の後帝にあふ度毎に例の吉野川の歌を出すならんと
上も―洞院上も
宰相中將の今姫君に心あるを聞きて居ながら入内を思ひ立つが氣にくはぬ上

見知れば―宰相中將が明後日ばかり―明後日は入内といふ夜になりて宰相中將が今姫君の寢所に忍び入りたり兒などの樣にて―今姫君の樣子忍び隱さむ程も―早く晴れて我が物にしたしと迄執心に思へる也

帝も大殿も、いとしもうけひき給はぬ氣色などを見知れば、後の罪もあへらじとや思ふらむ、明後日ばかりになりて、寢給へる所に、入り臥し給ひにけり。唯兒などの樣にておはする、さまかはりて中々美しう覺え給ふに、かねて思ひしよりも、忍び隱さむ程も苦しかりぬべきを、如何にせまし、と思ひなりぬるけはひなどや著かりけむ、近う臥したる母代驚きあひて、ふと聞きつけて、母代「いなや、こゝに男のけはひこそすれ。空耳か。いで〳〵、今日明日帝の君のうつくしみ愛し給ふべきあが佛を、いかなる盜人の如何にしつるぞや」といひて、火も消えにければ探り寄りたるに、烏帽子も手に當りぬ。されば、こそと心地も惑ひて、母代「人々紙燭さして參り給へ。こゝにいと怪しきしれものあり」と高やかにいふに、寢たる人驚き騷ぎぬ。母代「さて〳〵。先上の御前に申さむ」とて立走りて、足音いとおどろ〳〵し。近うだに寄らず、道中より、母代「ものけたまはる。姫君の御前に、男入り臥して侍り。如何仕うまつらむとする」といふ。夜聲のいと高きに、うち聞き給へるぞ、けに淺ましきや。近う寄り來て忍びやかにだに言へかしといみじけれ

ものけたまはる―物承る、もしもし

近う寄り來て―洞院上の心

浦通ふ―常見なれたる我なれば名のらずとも よく知り居るならんに

受領宿世―受領の妻になるべき悲しき運命

ば、急ぎ起き給ひて、洞院「あなかま、あなかま」と言ふ〳〵、如何なる事ぞとわたりて見給へば、消えたる火どもまだ燈しつけぬなるべし、帳のかたびらを褰げつゝ、紙燭手毎にさして、まづ〳〵此頃參り集りたる女房の限、二十餘人ばかり重りて居て、見あざみたり。洞院「あな物ぐるほし。忍びやかにてこそ出し遣りてめ。などかく見苦しう集りたるぞ」と宣ふも、聞き入るゝ人もなければ、御供に參りたる宰相の君といふ人して、人々除け、紙燭ども消たせなどし給ふまぎれにぞ、男君帳の内よりいと忍びて出づるを、母代おひつきて、袖を控へて、母代「誰ぞ、名のりせよ。さらずば、天が下に出しやらで、辛き目を見せむ」と、叱りかゝる氣色いとほしければ、

中將　浦通ふみるめは常に變らじを蜑の刈るてふなのりせずとも

といふ聲をも、心まどひて聞知らず。「浦通ふ」とあるがほの〴〵聞ゆるにぞ、西の國の受領にやと心得て、いとゞ悲しう心憂ければ、つい居て、母代「あな悲しの受領宿世や」と、足摺といふ事をして泣く聲いみじければ、上いと淺ましう思されて、今ぞ近う寄りおは

したる。洞院「あなかま、給へ。如何なるにても、かゝる事は忍びやかにもてなしてこそあらめ、世の音聞のいみじきをだに、もて隠し給へかし」と、いみじう制し給へば、走り來て、又君の臥し給へる所に寄り來て、床より荒かに引きおとしつゝ、母代「こゝらの寶をつくして、上の思し急ぐ幸を、心として燒き失ひほろぼし給ふにこそあゝめれな、今いくばくの日數の心もとなさに、受領男は急ぎし給ふぞや。下萬の身の物の用なきだに、名の惜しければ、若うよりひたすら、ものしたゝかなる男はまうけ侍らぬものを。いづちも〳〵も早亡せ給へ。恥知り給はぬかな」と、顔にあてて爪彈をしかくる樣、いとおどろ〳〵しげなるに、髪をふりかけて泣き給へる灯炭、いと心苦しければ、上、「いでや、さばれ然るべきにこそおはすらめ。唯まろが、切に、かゝる方樣の宿世のなかりけるを、あながちに思ひ立ちて人笑へになりぬるのみこそは心憂けれ。殿のうけひき給はざりつる事を、いかに聞き給はむと思ふこそ、萬よりはねたう恥かしけれ」とて、いとものしと思したるも理なり。受領とさへ見顯はして、さわやかに言ひ續けたるを、か

あなかま給へ―喧しく靜かに
世の音聞の―世間の評判の甚しかちぬ樣にでもせめてしてくれ
上かし
今いくばくの―もうどれ程の日數が待遠しとて
受領風情を密夫には持ちたるぞや
上―洞院上
かゝる方樣の宿世―今姫君が宮仕すべき運はもたぬに、強ひて入内させんとしたる故物笑の種になりたるがつらし
いかに聞き給はむ―此始末を堀川が聞きて何と思ふならん
受領とさへ―母代が男の受領なる由を見顯はしてはつきりと言ひたる以上は、其を宰相中將なりとは洞院上の知るべくもなく

いかでかは見合せ―誰にも合せる顔がない筈

その受領の―受領の北方なぞになる人の世話は出來ぬ

同じ樣にて―今迄同樣に此御殿に居る事も出來まじ

額髮を―今姫君の切に心地の―せきのぼせて居ると見えて誰ぞとよ―手引をしたるは誰なるぞ

心より外の―姫の心、宰相中將に犯されたるさへ心外なるに人の思ふらむ―他人の手前が恥かしと思ふからでは無く、只母代の呵責を畏れて

かる人とはいかでかは知り給はむ、まことに斯くゆゑしく思さるれば、ことにものも宣はで歸り給ひぬる御氣色を見るに、いとゞ腹立ち勝りて、母代「早う〳〵尼法師になり給ひね。誰々にも、いかでかは見合せ奉り給はむ。その受領の北方にて居給ふらむ後見、更に〳〵えし侍らじ。同じ樣にて又殿の内にもえおはせじ。さても〳〵、などか、入り來りつらむ折に、聲高らかに打泣き給はざりし。心やすくひれ臥し給ひたりつらむ事よ」とて、額髮をひきあげて、母代「いで〳〵」とにがみかゝる顏氣色、やゝもせば食ひかきぬべし。切に心地のおほゆべかゝめれば、又立走り、北面に行きて、母代「誰も〳〵、むげに知る人なくて入り來る人あらじ。いみじき盜人といへども、たよりを尋ねてこそ入るなれ。誰ぞとよ」と、ある限の人々を言ひ責むれば、各え言はぬ誓言立てつゝいひ誓ひ、泣き腹立つ樣どもも、聞きにくゝゆゝし。かく言ひ合へるを、姫君聞き給ふに、生ける心地もせずいみじきに、心より外の事だにあるに、尼になれといふをだに聽かずば、遂にいかゞしなされむ、と思せばおそろしきに、人の思ふらむ事の恥かしさなどに

かい越して―後より前に搔き下して

然こそは―尼になつたものぢやせためにー貫めさいなみにかき臥し―姫自ち

よからぬ人と―今姫君のよからぬ人なるを承知しながら

たゞならむよりは―入内を思ひ立たぬよりは

はあらで、尼になりなむと思ひ給ひて、櫛の筐なる鋏を取り出でて、髮かい越して見給ふに、常よりも此頃つくろはれてをかしげなるが、さすがに惜しう悲しけれど、昔物語にも憂き事あるには然こそはしたりけれなどほの聞きしも思ひ出でらるれば、泣く泣く、こゝかしこしどけなく削ぎおとして、泣き居給へるに、母代又せために寄來たるに、見附けて、跡まくらも知らずかき臥し、「いかにせむ、いかにせむ」とまどひ、死入りて泣き入りて臥せり。上聞き給ひて、洞院「尼になれ尼になれと責むればこそはあらめ。とてもかくても、よからぬ人と見る〳〵、かゝる事を思ひ始めけるまろこそ、かへすゞ〳〵恥かしけれ」と宣ふを、大臣聞き給ひて、「いで、さればこそ、はかゞ〳〵しき事はあらじと思ひ侍りし。世の音聞も、たゞならむよりは誰が爲も恥かしうもあるかな。內裏にいかに聞かせ給はむとすらむ。よくぞ此事に一言もわが口入れそめざりける。母代が足ずり、理なゝり」とて笑ひ給ふを、上は、げにねたう、腹立たしうも恥かしうも、方々におぼし歎く事限なし。大將殿は、いで、さればこそと、辛うじて思ふ事かなひぬる心地

品定まりたる―母代に受領と身分をきめてしまはれたる宰相中將こそ
憎からざりし―今姫君の憎からぬ器量をば狹衣も萬更にも思はぬ

し給ふものから、あまりいと品定まりたる聟の君ぞ、いと名だたしく思さるゝ。憎からざりし顔つきは、さすがに哀にも思されけり。内裏には更に御心もゆかざりし事なれば、何とも御耳にも止らせ給はざりけり。

狹衣物語　卷第三之中

月日過ぐれど、故院に、淺ましく覺束ななから別れ聞えさせ給ひにし事を、飽かず思召さるれば、帝「その御代には、女院の姫宮などを目がれず見奉らむ」と宣はせて、藤壺に御しつらひせさせ給ひて、常におはしまさせ給ひけり。姫宮をも一品になし奉らせ給ふ。大將、かく御内裏ずみにも、かの忍草は具してやおはすらむとゆかしければ、人知れず、然るべき折々は、そのわたりを彳み寄り給ひつゝ、氣色を見給ひけり。早うも、少將の命婦とてしたしう候ふを、語らひ給ひて、御文を時々奉らせ給ふ。御けはひもほのかに聞き給ひしを、賀茂の川波に立ち別れ給ひにし程に、わざと聞え給ふ事は絶えにしぞかし。今はおなじ百敷になり給ひて、覺束なからぬ程に、ことゝひ寄り給ひつゝ、猶その御心絶えぬさまにぞほのめかし給ひける。里におはします折も、若宮のおはする一條の宮は、たゞ這ひ渡る程なれば、つれ〴〵に思さるゝ折々は、御文も聞え給ふなるべし。

❶狹衣飛鳥井姫君の遺腹の子を見んとて一品宮の方に忍び入る。權大納言に見咎めらる
飽かず思召さるれば―帝が女院の姫宮―一品宮、帝の妹
忍草は―飛鳥井姫君の遺子を内裏迄召連れて居られるかしらと
そのわたり―藤壺近邊
御文を―一品宮へ
賀茂の川波に―一品宮が賀茂の齋院になりし故
その御心―一品宮へ懸想する心
里におはします―一品宮が一條の宮―即ち一品宮の里也
御文も聞え給ふ―狹衣が

自ら—狹衣自身
さる人や—養女ありやなど
見つくる人も—狹衣の立聞覗見が人に見付けられたらば浮名が立ちて、一品宮が迷惑する事もあるべしと
院は—狹衣の心、女院、一品宮の母
宮—一品宮

自らも、さるべき宵々は渡り給ひつゝ、命婦と語らひ給ふ折もありけり。その序にも、狹「さる人や」など、たゞ大方なる樣にて問ひ給ふに、誰とたしかには言はねど、世に知らず美しき由を語り聞ゆるに、いとゆかしうあはれにて、この御あたりの立聞きかいま見も心に入りたり。もし見つくる人もあらば、宮の御爲、あぢきなき事や出來むと、煩はしき方も無きにしもあらず。常磐の尼君のむすめ小宰相とて候ふを、思ふ事も語らはまほしけれど、さすがに何となくて言ひ寄らむも、さやうの懸想など、おしなべては習ひ給はぬ心地に、人も怪しと思はむとつゝましくて、え言ひ寄り給はざりけり。

忍びたる所より夜深く歸り給ふついでに、やがて一條の宮へおはするに、この宮の御門いととく開きて、いづれの殿上人の車にか、夜ちすがら立ちあかしけると見ゆるは、如何なる人の局より出づる人ならむ、と見入れ給ふ。院はよべ内裏に入らせ給ひにしを、宮もや參り給ひにけむ、さらば忍草も人少にてや、と思しやるに、いと過ぎ難くて、例のやをら入り給ひぬ。常に立聞き給ふ戸口に入り給へれば、局に急ぎ下りける女房の、

弘徽殿の—女二宮に忍び入りし時の事
ありつる車—前に立てくありし車の主なるべし
さしあひたるに—出合ひたるに
斯うにこそ—狹衣なりと見極めて
思ふ心ありて—一品宮に心ありて
御乳母子—一品宮の乳母内侍乳母の子

押しも閉てずなりにけるにや、いと廣うあきたるを、人起きにけりと見給ふに煩はしけれど、宮などおはせぬ程にて、人少ならば、かき抱きてや出でぬべき、と思して入り給ひぬ。御前の方を見入れ給へれば、御殿油消えがてにまだたきて、奥は暗うて物も見えず。こゝかしこに人々あまた寢たりと見ゆれど、幼き人はいづれとも見えず、臥したらむ所も知らねば、たゞり寄らむ方もなくて、唯つくゞくと見入れらるゝにも、弘徽殿の南の戸口は、まづぞ思ひ出でられ給ふ。思ふまゝなるは、わが爲にも人の御爲にも、あぢきなういとほしく悔しくもあるわざぞかし、と幾許の年の積りならねど、思ひ知られ給ふ事多かれば、煩はしく、やをら出で給ふに、ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさしあひたるに、出でどころの便なければ、袖して顔を隱して、馬道の口に隱れ給ひぬれど、闇はあやなき御匂より始めて、なべての人にまがふべき御有樣ならねば、斯うにこそありけれと見はてて、見ぬ顔にて過ぎぬるも、太政大臣の御子の權大納言なりけり。早うより思ふ心ありて、御乳母子の中納言の君といふに、志あり顔に見せ

責め渡る―中納言君を淺ましき心地―中納言君が參上らず―一品宮の側に出ず近きわたり―一品宮の近き處につれて行け責めあかし―中納言君を權大納言が世の中思ふまゝに―權大納言の人柄をいふ、狹衣の心

㊁權大納言狹衣と一品宮との浮名を言觸らす、堀川大臣二人の婚を結ばんことを乞ふ、狹衣の迷惑

かし―我が一品宮への愁を方外らものゝ樣に言ふのも此故でありよ

何とも思ひ聞えぬ人―狹衣はまめやかに―此兩人の中無事には行くまじ

つゝ通ひけるに、今となりては仄めかし出でつゝ責め渡るを、いと珍らかに淺ましき心地して、今はをさ〳〵對面する事も物憂くのみ思ふに、よべ院も内裏に入らせ給ひて、宮はとまらせ給ひて、母の内侍の乳母も風に煩ひて、參上らずなりにしかば、内侍「代には御かたはらにとて參り給へ」といひしを、權大「かく人少なる程にて、近きわたりにしるべせよ」と、よき折と伺ひて、生憎に取籠めて責めあかしつれば、御側にもえ參らずなりにしなりけり。世の中思ふまゝに誇りかにもてなして、ものいひなども少し憚なき人樣なるを、見や知られぬらむ、さらば、あぢきなくいとほしかるべきわざかな、と大將は苦しう思したり。

その後、中納言の君に、大納言あひて、しかぐ〵確に見し事と、ありし曉の有樣を語りて、權大「いでや、かゝれば、さしも殊の外にも宣ふなりけり。然はありとも、親王達をも何とも思ひ聞えぬ人にこそあゝめれ。あなをこがましや。見むかし。内裏や院など聞かせ給ひてば、更によもまめやかに御覽ぜられじ。いかに口淸くあらがひ逃れむとすら

かたちけはひに―狹衣の器量に目がくらみて

聞え放たせ―一品宮がきつぱり斷りしかば

我は―御身はにぶ〳〵しき―胡亂な事を見て我が言ふならば疑はれても仕方が無いがげに人も―中納言君の心立ち返り―度々狹衣一品君に文を贈る事ありと嵯峨院の―女一女二女三を取りかへ引きかへ與へんといひしをさへ斷りたる狹衣なれば盛過ぎ―一品宮は

むものを、御後見たちの、かたちけはひにはかられ給ひて、かゝるわざはし給ふにこそあゝめれ」など宣ふに、いとあさましくなりぬ。中納「早うこそ、さやうの御氣色見えしかど、あるべき事にもあらずとて、聞え放たせ給ひしかば、さて歇み給ひし事を、まして内裏の御氣色に從ひて、今日明日にても世を背きなむとこそおぼしめしたれ。いとゆゆしき事かな。かけてもかゝる事な宣ひそ。實事しう言ひなす人もこそあれ」などけざやかに言ふを、權大「さらば、我は知り給はぬなゝり。今自ら聞き給ひてむ。世にある事は暫しこそ隱はあれ。少しにぶ〳〵しき事を見たらばこそあらめ、口淸くも宣ふものかな」などいふ樣の、戯事の氣色にはあらねば、げに人も、なからむ事を斯くのみ宣はむやは、唯一夜迄はかくは言はざりしを、如何なりける事ならむ、と怪しう思ひて、母の内侍の乳母に、かくこそ宣ひしかと、忍びて言へば、内侍「少將の命婦の、いつぞや、如何なるにか、この頃立ち返り宣ふ事どもこそあれ、と言ひしかど、あなくるし、嵯峨院の宮達をうちかはり預けさせ給へど、聞入れ給はぬに、まいて盛過ぎさせ給ひぬ。あ

言ひなす―狹衣が一品宮に通ふと　高きも短きも―身分の高下を論ぜず　まねびをだに―噂をもするな出でおはせし―狹衣の心やましき―自分の不快までが手傳ひて物まねび―口眞似　年經にける樣―一品宮と狹衣との中が久しき以前よりの事なる由を

な恥かし、おほろげの人見え給ひぬべくやは、とてやみにしを、少將の命婦の局になむ、時々立ち寄り給ふと聞きしを、人の言ひなすらむ。すべて高きも短きも、侍ふ人々につけて、斯る事も出來るなり。又まねびをだにしなし給うそ」と、むづかられて歇みぬるに、大將の思しやりしもしるく、大納言は、いとけざやかに、出でおはせしを見てしかば、ことに憚もなく、心やましき方さへ添ひていふを、聞き繼ぐ人はあまたになりつゝ、内裏わたりにも聞え、院の邊にもやう〳〵言ひ出でければ、近う侍ふ人々は、「あさましきことかな。かゝる物まねびなせそ」と、互にいひ諫めけれど、まことならぬ事も、唯片端出でくれば、まことしうのみ言ひなす人多かる世のさがにて、「その夜の曉に、さていで給ひし事、御車そこ〳〵にこそ立てたりしか。夜深う其の間の御格子、つま戸の開きたりしは、然にこそありけれ」など、折々の立聞き、垣間見の程をほの見ける人々も、その折は何と目も止め給はざりしを、かゝる事出來て後は、忍びつゝ各言出しなどして さゝめくもあるべし。ましてなべての世には、年經にける樣を、つき〴〵しう言ひなす

いでされば こそ―院の心　いちじるき御氣色―狹衣が格別一品宮に執心なる樣子も示さぬは無禮千萬なる了簡　はかなき―かりそめの手紙なれど、取次をするは年來の事なれば　御前―女院の　その人―少將の命婦が此一件を知らぬ筈はない　宮も―一品宮も　糺の神―加茂の糺の神は糺といふ名によりて屢眞僞を糺す神として歌に片ひられたり　さだ〳〵と―確に辨明する譯にもゆかぬ故　唯ひとへに―院の方では只狹衣との不埒故とばかり思ひ居るが

を、女院も聞かせ給ひて、内侍の乳母を召して、女院「かく、いとあさましき事を、世の中にいふなるは、いかなる事ぞ。むげに無き事をば、人のいふ事にもあらぬを」と宣はするに、いとあさましくなりて、この權大納言の宣ひける事をぞ語り聞ゆるに、いで、さればこそ、少將の命婦のしわざにや、と思しよせ給ふに、いと心憂く胸ふたがりて思し歎くに、その後とても、いちじるき御氣色もなきは、如何ばかりなめげなる心の程ぞなどさへ、さま〴〵安からぬ御心のうちなり。少將の命婦、かゝる事を聞くに、あやまちは無けれど、はかなき御文の傳も、さすがに年經ぬれば、いと苦しうて、をさ〳〵御前わたりにもさし出でぬに、内裏にもきかせ給ひて、なま煩はしきに、帝「その人知らぬやうはあらじ」など、仰せられければ、いとあさましく思ひ歎きて籠りゐたり。宮もいと若き御程にもおはしまさねば、かゝる事を聞かせ給ふに、いかゞ疎に思し歎かせ給はざらむ。糺の神も引きかけて、さだ〳〵とあきらめさせ給ふべきならねば、院にもさやかに見合せ奉り給はず、おほし亂れたるをも、唯ひとへに思はずに、心憂くのみ見奉らせ給

情無し

ふのみぞわりなきや。

大將は、斯くなむと聞き給ふに、さればよ、すべて良からぬわが心の、何事にも後悔しきぞかし、といといとほしう思されて、少將の命婦の許へ、こまやかに書き給ひて、「御前わたりには、いとゞ如何にはしたなう侍らむと、つゝましう思ひ給へど、この度ばかりはあへなむとて」とあるを、わが許なるも取り具して、内侍の乳母に忍びて見せて、泣く〳〵誓ひ聞かすれば、女院の御前にも参りて、少將のいふ事啓すれど、如何なるとても、かく輕々しうよろしからぬ御名の流れぬるを思召し亂れて、ものも宣はず。文はさすがにゆかしうや思さるらむ、取りて御覽ずれば、

狹　思ひやるわがたましひや通ふらむ身は餘所ながら著たる濡衣

とある、書きざま手などはしも、げに親王たちなどの御あたりならでは、散らさむは口惜しかりぬべかめり、と御覽ずるにも、如何なる心にてかく濡衣にしもなしたらむとさへ、なほ涙のみこぼれさせ給ふ程いといとほしう、聞えさせやらむかたなし。

情無し
されば よ—狹衣の心
御前わたり—女院
この度—今度だけはまあ許さるべきかと思ひて
此手紙を奉るわが許なる—自分にあてたる狹衣の手紙をも取り揃へて
如何なるとても—事實の如何は兎に角

大殿にも細々と聞えさする人ありければ、年頃もこの御事を深う思ひて、いとひが〳〵しきまで、思し離るゝ事もあるなりけり、と思すに、いとゞらうたう美しとおもひ聞えさせ給ひて、大將に、狹「かく世の中には殘なく聞ゆるまで、知らせ給はざりける事」と、打笑みて宣ふ御かほの氣色、いと嬉しと思したるを見給ふに、宮の御爲いといとほしう、みづからの爲には、まことしくも取りなされば、いと煩はしく便なかるべき事なれば、いたうまめだちて、狹「少將の命婦といふ人は、早うより知りて侍りつるを、内裏わたりにて、時々立ちより侍るを、言ひなす人の侍るにや。かけてもあるまじき事を、内裏などにも聞かせ給はば、便なうかたはらいたき事にこそ」とて、いとまめやかに苦しと思いたれば、堀川「何かは、さまで便なかるべき事かは。帝の御むすめ、今も昔も得奉る事世の常の事なり。われらより劣りたる人だに、當代の帝の御聟になりたるためしいと多かり。まいて、更によも便なき事とも思召さじ。斯くのみよるべなくて過し給ふ、いと心苦しきに、誠にさやうにもものし給はば、内裏にも院にも奏してむ。あるまじき事と

大殿—堀川
年頃も—年來狹衣が一品宮を思ひ込み居る故に
偏屈に思はるゝ迄他の緣談を斷りたるなりと思ふと
宮の御爲—狹衣の心
まことしくも—堀川に事實の樣に思はれては面倒故
言ひなす—自分が一品宮に通ふといひなす
よるべなくて—獨身にてさやうにも—一品宮と關係あるならば

思召すとも—帝が さやうに—一品宮を狹衣に嫁す 思召は無かりし事故 もとなしき—一品宮も年長じたる事故 宿世などいふもの—緣のある女もあるべし かくても—よもや何時迄も獨身でも居るまじ けざやかに—はつきりと 聞えさせ給ひて—「給ひて」は「給はで」の誤なるべし 御文だに—文の便もむつかしき故、人知れぬ中に一品宮との緣を切りて仕舞ふ積ならんと細々と申す—堀川に されば こそ—堀川の心 わが進み—此方から申上げぬ内に女院の方から斯く〳〵の次第故降嫁せしめた

思召すとも、わが申さむ事更に否びさせ給はじ」と宣ふを、狹「故院も、すべてさやうに思ひ聞えさせ給はざりければ、女院も今更によき事とも思召さじ。いとおとなしき程にもならせ給ひにたれば、何事にか、さやうに强なる心などつかひ侍らむ。すべてあるまじき事に侍る。今自ら宿世などいふものある人も侍らむ。かくてもよに侍らじ」など、いと侘しきまゝに、けざやかに聞えさせ給ひてやみぬるを、かくても、「いみじう忍びて、御文だにおぼろげならでは難ければ、唯人知れぬ樣にてやみなむと思したるなゝめりと、女院はいみじく思し歎かせ給ふ」と細々と申す人のありければ、さればこそ、この御事をさへ、唯かやうに紛らはして歇みなむと思う給へる、いとあさましき御心の程なゝめり、といとほしがり歎き給ふ事限なし。堀川「わが進み申さざらむに、彼よりいかでか、かゝりけり然は、とも宣はせむ。無き事にても、かばかり人に名を立て奉りて、音なくてやまむは、いとゞ不便なる事なり。うけひき給はぬまでも、我この事を女院に申さむ。さのみ心に任せて見るべき事ならず」など、まことしうむづかり給ひて、參り給ひて、

しと仰せらるゝ 筈なし あづかり—一品宮をされば こそ—女院の心 かやうの筋には—人に嫁せしめんとは みづから の御本意—一品宮出家の望 ふかくの意歟 うちまかせ—堀川の言分に任す る も憚あり 斯く人の—人の噂のやみて後も さばかりこそは—あの位の事で すみて仕舞ひたりなどと 釣する—「伊勢の海に釣する海人のうけなれや心一つを定めかねつる」 ほのめかし—一品宮降嫁の事を人の物言は—帝の心 遠山鳥にては—帝の心、相思の中でありながら 離れ居るはつまらぬ事故許して

然るべき人して、いと忍びて、「唯あづかり聞えむ」と度々啓し給へば、さればこそ、自らは人目を切につゝみ給うて、大臣してかく申させ給ふなりけり、と心得果てさせ給ひぬれど、「如何はせむ、さらば」などは、いかでかは宣はせむ。もとよりかやうの筋には思ひ聞えざりしを、今はいとゞ盛も過ぎさせ給ひにたり、みづからの御本意深きさまに、今日明日にてもと思したゝめるを、かゝる御名の隱れなくなりぬるを、いみじくおぼし歎かる。さりとても又確ならぬ事によりて、我さへうちまかせ聞えむも、なほつゝましく心苦し。又斯く人のあながちにいふ程を過ぐしても、さばかりこそは歇み給ひにしかなど、世の例にいひ流され給はむさまなどを、さまゞ〳〵に、釣するあまにも劣らず、しほたれ過し給ひにけり。

内裏にも大臣、序つくり出でて、ほのめかし奏し給ひければ、人の物言はまことなりけりと思して、遠山鳥にては取所なきを、げに然もなどかは、と思しめすに、さばかり若くめでたき有樣を、おとなしき程の衰も恥かしうやあらむ、限なき御事といふとも、心

ゆかず思はれて、うちまもられ給はむこそ、いといとほしかりぬべけれ、嵯峨の入道の宮又なくめでたく聞えしをだに、齋院にはおとり給ひてあらむかし、この御有樣に劣らざらむを、わが妻に見定めてこそ、とて今まで斯くはあるとこそは、あなかたはらいたと思召されながら、然はいかゞは宣はむ。又さきぐ〳〵の事を聞かせ給へば、かの心に少しも物憂からむ事をば、更にすゞみ言はざンなるものを、大臣のかく方々に懇にいふは、かの自らの氣色にしたがふにこそあらめ、と推しはかられ給ふぞたのもしう思召されける。女院にもかくなむと聞えあはせ給ひて、免れぬ御宿世やありけむ、誰もいとつゝましう思されながら、人のかく懇にいふ折に、思ひよわりぬる樣にもてなしてむと思しなりぬる。大殿は限りなく嬉しと、年頃の本意は叶ひにたりとおぼし悅びたるを、大將の思し歎く樣ぞいみじかりける。嵯峨の院の、昔より殿の御志に劣らず、あはれに辱かりしをだに、この方樣には、見知らぬ樣にてやみにしものを。げにその折は、思ふ心一つによりてぞかし、今は然りとても、心より外に世に長らへてむ限り、かゝる獨ずみ

もさばかり若くー狹衣の若盛なるに一品宮のふけ過ぎたるは恥かしかるべし心ゆかずー不足に齋院にはー「見定めてこそ」迄狹衣の意を推測していふ詞然はいかゞはー帝の心、どう言つた物であらうかの心にー狹衣の心に

聞えあはせー帝が相談して

嵯峨の院の—狹衣の心

この方樣にはー女の事に關しては、女二宮女三宮を辭したるをいふ

その折はー其時辭したるは源氏宮に執心なりし故なり

にてもあり果てぬやうもありなむを、されど、かく心より外に、なげの哀もかくる人のあらむ折にや、その心もたがはむ、來む世のあまとなりても、更にかづかではやむまじき御有樣に、少しもよからざらむ人をば、夢にも見まうければ、然ばかりはかなき世に、自ら歎く〳〵も、過ぎなまほしく、あるまじかりける事と、片つ方の御契を見果てて後は、かく心よりほかに、世に長らふるにては、然てこそあらましか、されど今は、かたがた世にな在りそと、佛などの示し給ふなゝめりと見えつれば、ひとへに思ひ立つ事一つより外の心なきものを、かの辛きものと思し果てて背き棄て給ひにし御心にも、いかなる心にて、かく世づかぬ獨ずみにて過ぎたるぞ、とだに聞かれ奉らむと、すべて何事も露ばかり心に飽かぬ所ありて、この人々に少しも劣り聞えたらむは、見ず聞かじ、かく歎く〳〵も、はかなき世のもとの雫の程は、自ら過ぎなむ、とのみ思ひ取り給へるに、かく芹つみし世の人にも問はまほしき御心のうち、いふかたなかりけり。心にかゝりて、ゆかしく哀に思されし忍ぶ草も、露知らまほしからず恨めしくなり給ひて、その

その心—獨住の覺悟

來む世の—女二宮の尼になりて堅固に過さるゝにつけても不十分なる女を妻にする氣にもなられればあるまじかりける事と—とても無き緣と源氏宮の方を思ひ切りて以來は然てこそ—此儘に過したし思ひ立つ事—出家の望辛きもの—我を辛く思ひて出家したる女二宮にもこの人々に—源氏宮、女二宮等に

もとの雫の程—暫く生き殘り居る間の雫や世の中の末の露元の雫や世の中の後れ先だつためしなるらん」芹つみし—「芹つみし昔の人もわが如く心に物の叶はざりけん」

渡りかき絶え、あながちなりし夜なくの立聞も、例の癖なれば悔しくわりなし。六月十日、宵のいと暑き晝つかた、一條の宮にて、若宮具し奉りて、はしつ方に涼み給ふに、俄にかき曇りて、村雨のおどろくしきに、柏木の下風涼しく吹入れたれば、御簾少し上げて見出し給へるに、楢柏はげにいたくもり煩ふも目止りて、

狭　柏木の葉守の神になどてわが雨もらさじとちぎらざりけむ

雨風につけても悔しき事がちなる慰めに、若宮を見奉る度ごとに、さておはしまさましかばと思されぬ折はなかりつるを、いとどこの頃は、御心にかけぬひまなく、哀に悔しき御心のうちなり、いとあつかはしげなりつる前栽どもの、雨に心地よげに思へる中に、大和撫子のしをれたる氣色中にもらうたげなるを、一枝折らせ給うて、嵯峨の院に參らせ給ふ。

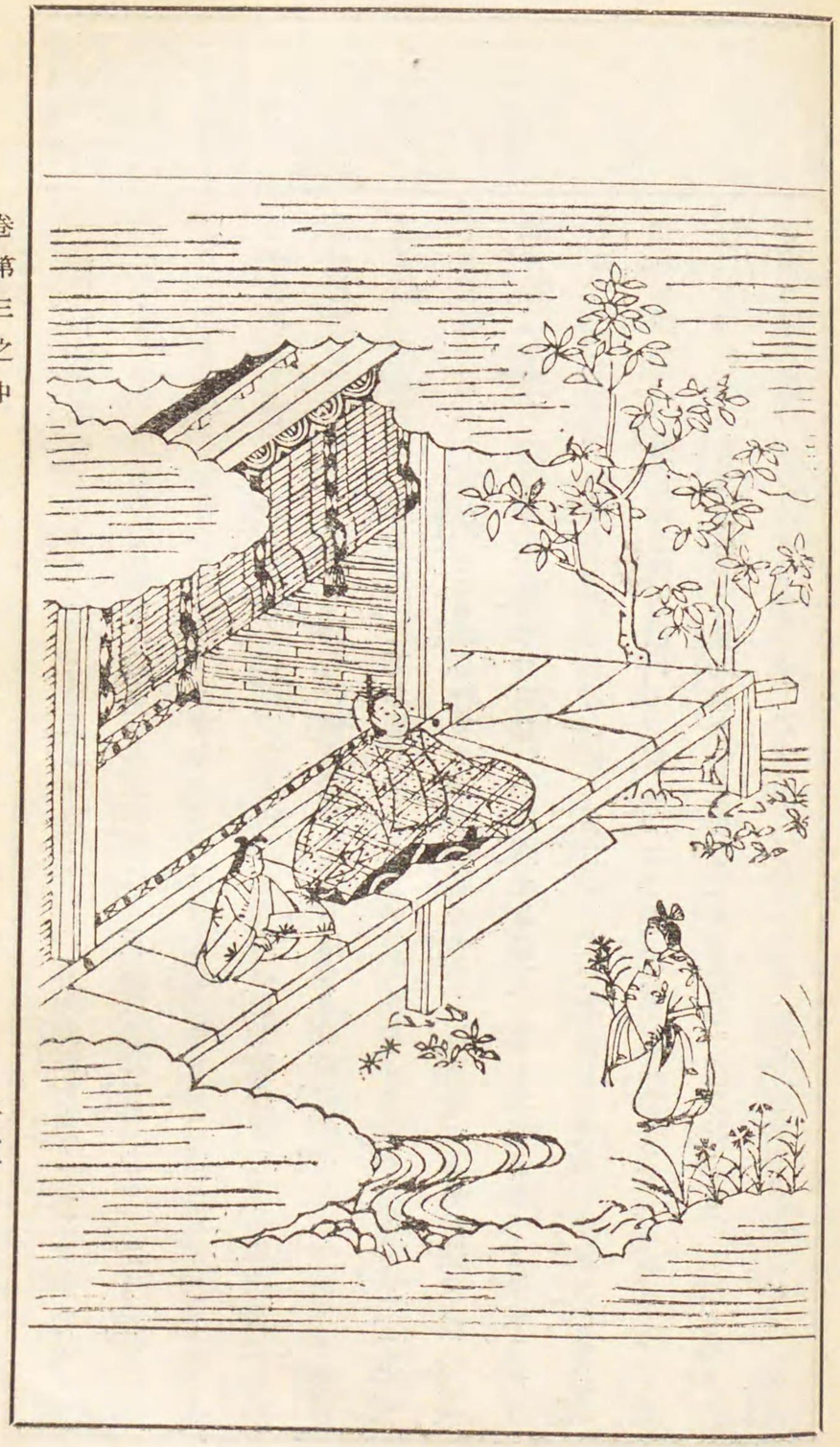
狭　戀ひわびて涙にぬるゝ古里の草葉にまじるやまとなでしこ

とあるを御覽ぜさすれど、例のかひあらむや。

㊂狭衣一條宮にて納涼　涼み給ふ―狭衣が

さてもはし―女二宮が元の如くならば

御覽ぜさすれど―女二宮に



㉔狭衣中納言のすけに托して文を女二宮に贈る、すけ女二宮の書棄を狭衣に贈る
一品宮の御事―狭衣に嫁する事
かゝる御事に―一品宮の關係あればこそ狭衣が今迄獨身にてありしなりなど變らぬ樣にて―女二宮かゝることを―一品宮の事をかゝる事を聞き給ひて―女二宮があくがれ增りて―女二宮が戀しく
參りたり―中納言のすけが

一品の宮の御事は八月十日のほどと定まりぬ。さばかりの御程に思し急がせ給へば、世の中ゆすりて、いとめでたくあらまほしき御事に、世の人さへ思ひたり。かゝる御事によりて今まで怪しかりつる御獨ずみなりなど、疎きも親しきも思ひあはせ、つきづきしうぞ言ひなしける。自らの御心には、いといみじうのみ思し歎かれて、一條の宮にのみ籠り居給ひて、若宮と起臥し語らひ聞え給ひて、叶はざりける世の中を、恨めしく思すまゝに、唯今しばし變らぬ樣にておはせましかば、かゝることを人も思し寄らましや、などおぼすに、わが過とも思されず、辛さの數も多く、況てかゝる事を聞き給ひて、如何樣にか思したるらむ、唯今もさしむかひ聞えさせて、言ひなやましつゝ見奉るわざもがなと、あくがれ增りてわりなければ、言合せてだに慰まむとにや、中納言のすけ尋ねさせ給へば、齋宮にぞ侍らひける。車遣して、狭「かならず聞えさすべき事ある」と宣ひたりければ、若宮も久しく見奉らぬにと思ひて參りたり。待ち給ふとて、はしつ方に寄り臥し給ひたりける。狭「やよやいかにと、思ひわびて聞えつるなり」と宣ひて、若宮を抱き奉りて、明暮の御有樣、物いひの美しさなどを、泣きみ笑ひみ語り給ふ。狭「かかる人おはせざらましかば、何事によりて今まで侍らまし。長らへても、げに心より外に、ものむづかしき事もありぬべければ、今ぞまことに世にあらじと思ひ果てぬるを、唯この御有樣にこそ思ひわづらひぬれ」とて泣き給ふさまいと心苦しげなり。すけ「過ぎぬる方こそ侍らめ、今は萬この御有樣には、憂きも憂からずこそ思し慰まめ。いとゆゝしくあるまじき御事かな。又此頃は、思ふ樣なる事と、世の人も聞えさせ侍るは、いと嬉しうこそ侍れ。げに又かゝる事の侍るべかりければ、過ぎにし方は、怪しう心苦しき事も侍りしにこそ」と聞ゆるを、狭「他人よりは、さりとも同じ心にやとてこそ聞えつれ。心憂くも宣ふかな。いでや、今は聞えじ、藻にすむ蟲なれば」とて、思ひ亂れ給へるけしき、今少しいとほしげになり增り給ふと見るも、例の御癖ぞかしと、なま憎かりけり。狭「さてもかやうの事ども聞かせ給ふらむな。いつか嵯峨へ參り給へりし」と宣へば、すけ「先つ頃參りて侍りき。何事もく、すべて聞きやせさせ給ふらめど、更にしるき

明暮の御有樣―若宮のものむづかしき事―一品宮と婚嫁の事
この御有樣―若宮がある故にあるまじき御事―御田家などとは
思ふ樣なる事と―一品宮との御婚嫁は丁度よき御中と
心苦しき事―女二宮との關係の斷えたるも、畢竟此度の事のあるべき故なりしならん
同じ心にや―汝は我と同じ心ならんと思ひて話したるに
藻にすむ蟲―「蜜の刈る藻にすむ蟲の我からと音をこそなかめ世をば恨みじ」
聞かせ給ふらむな―女二宮がしるき事も―聞き知り給へりと思はるゝ事も

あさましく―女二は方外に心深くもはしますあきらめ侍りしかば―「ば」は衍文なるべし

琴の音より―狭衣の心

斯くても―獨身にてもあるまじき事―今一度の御對面もけしからぬ事と否定すべき御仲とは思はねどはちふべき―誤あるべし

ゆくりなくは―不意に御案内は決して出來ぬ有難く―よく思ひ切り給ひし事よと思ひし過去の關係なれば

事も侍らばこそあらめ。よき人と申すなかにも、あさましくおはしますなり。されど、はかなき御手習にこそは、御心の中をも見奉りあきらめ侍りしかば、今はたゞ佛に向ひ奉らせ給うてのみ暮させ給へば、世の中のよしなし物語も、御前にて申す人も侍らず」など語るも、げにかの見奉りそめし夜の事どもなど思ひ出でられ給ひて、琴の音より外のさしいらへ無かりしぞかし。あるべきかぎり美しうめでたかりし御有様けはひなど、唯今の心地して、いふかひなく悲しく思さる。いと斯くのみ物のおぼゆれば、狭「よし見給へ。つひには斯くてもえ侍るまじきを、唯今一度みづから聞えまほしき事のあるを、その明暮向ひ居させ給ふらむ佛の御前にしるべし給へ。それをだに此世の思出にし侍らむ」と語らひ給ふを、すけ「げにあるまじき事と、切にはらふべき御なかの契とは見奉らねど、昔物語の姫君のやうに、媒の人のいふに從ひて澁々にゐざり出でさせ給ふべきにもあらず。その佛の御前にも、ゆくりなくはいかでかと、恐しうぞ侍るや。中々見奉り參らせ給はば、御心こそ亂れ增らせ給はめ。有難く見はなたせ聞えたると覺え侍りし過ぎに

言ふかひなき心―中納言のすけの心

げにさこそ―左樣に遠慮せらるるも尤の次第なれど

收めやらぬ心の程―あきらめのつかぬ我心と

もろかにて―大抵では思切らぬ積なりしかど生けるわが身と―「逢ひ見んと思ふばかりを命にて生ける我身ぞ頼もしげなき」

自らの罪に―我ばかり惡き樣に御身迄が言ふがつらし

言ひむかへ―反對

われだに―せめて汝でも

嵯峨の院へ―女二宮へ

し方に侍れば、今は何か、返事もかひ侍らじものから」と見るまゝの事を聞ゆれば、狭「あな心憂の御物いひや。方々に、むげに言ふかひなき心の程とこそ思ひ侍れ。それもげに理なりや。げにさこそ思し憚らるゝ御樣なれど、いとさまで收めやらぬ心の程と見給ふらむこそ恥かしけれ。おろかにて見放ち聞ゆべくも思はざりしかども、いとかく生けるわが身といひ顏なりける宿世にてありける事も、自らの罪に、われさへ常になし給ふは心憂きなり」とて、いとつらしと思したれば、すけ「いでや、ことの外に、たゞ〳〵しげに聞え侍りし關の戸ざしも、しるべなくて、たどらぬ人も侍りければ、いとうしろめたう。まめやかに、過ぎにし方いと斯ばかりなる御心ならましかば、如何にめやすく侍らまし」といへば、いたくまめだちて、狭「斯くな常に言ひむかへなし給うそ。時々はわれだに哀と宣へ。昔も、心には罪ありきとも覺えざりき。唯物を思ふべかりける契のみこそは、自らの過なりけれ」など、夜もすがら打もまどろまず、歎きあかしたまひて、やがて嵯峨の院へ贈り給ふとて、御交書き給ふに、まだいと暗ければ、御簾を少し捲き

げに袖にはたまらぬ―「つゝめども袖にたまらぬ白露は人を見ぬ目の涙なりけり」
細やかなる―細細と多き文言の末文に
折れかへり―今迄歎きくらしたる末終に心にもあらず一品宮を娶る我心を察してくれよかしこればかりを―此文の返事をのみ御身の我に對する厚意のしるしと思ふべし
御堂におはしませば―女二宮が取出でて―狹衣の文を
今更に―女二宮の心

あげ給へるに、御前近き透垣のつらなる荻の葉の露の、いたう亂れて折れかへりたるを、吹きこす風に、はら〳〵と亂れ落つる露の白玉、げに袖にはたまらぬと思されて、とばかりながめ入りて、押拭ひつゝ、えぞ書きもやり給はぬ。細やかなる端つ方に、

狹　此心は聞かせ給ふ事も侍らむものを、などか、
　折れかへりおきふしわぶるした荻の末越す風を人のとへかし

などやうにて、狹「この御返、露も見せ給はずば、苦しう思さずとも、又對面せじ。唯こればかりをなむ御志に見るべき」など宣ふを、すけ「いと侘しきわざかな。さらばこれや限に侍るべからむ」と、侘ぶ〳〵車に乘りぬ。

嵯峨にはいと疾く參りたれど、後夜起の御行のまゝに御堂におはしませば、かひなきまでもえ御覽ぜさせぬに　晝つ方になりて、齋宮より奉らせ給へる御返聞えさせ給ふとて、御硯召寄せたるついでに、取出でてひろげて打置きたり。今更にかゝる物の常に見ゆるを、人もあらば如何にと、いみじう思召さるれど、さわやかに物もえ宣はせねば、

少しづつ聞えさせて―すけが女二に申上げて
院の御前―嵯峨院
この御事―狹衣が末々まで若宮を世話すべき樣の仰もあればなどかは殊の外に―若宮の事に關しての音信とすれば、狹衣の文を取次ぎても格別不思議もあるまじと思ひての事
宮―女二宮
末越す風―狹衣の一品宮に對する仕方は過去の我に對する仕方に似たりと
夢かとよ―我身の憂さは例無き事と思ふに、又それに似たる例を見る事よ

唯御顏の色いとほしげにて、御覽ずる樣もなけれど、夜もすがら宣ひつる事ども、思したりつる樣など、所々を少しづつ聞えさせて、若宮の御うつくしさに、よろづを思ひ慰め給ふさま、あはれも淺からず聞えさせて、すけ「御返事見ずば世にもあらじ、など侍りつるを、前々も聞えさせ出でて、かやうにも傳へほのめかし申すも、あるまじき樣に、かたはらいたく、返すゞ〳〵も思ひ給へ知りながら、院の御前にも、流石にこの御事をば、行末までさし放ちてはあるまじき樣に思召し宣すめれば、若宮の御方樣にことよせては、などかは殊の外にと思ひ給へ侍りてなむ。今は如何樣にも、それによるべき御事ならねば、心やすく」など申せば、いとゞ御顏の色移ろひまさりて、寄り臥させ給ひぬれば、「この御かへり、なほ」と聞えさせむもかたはらいたくて立ちぬ。宮つく〴〵と思し續くる事多かる中にも、この「末越す風」のけしきは、過ぎにし其頃もかやうにこそはと、少し御目の止らぬにしもあらで、筆のついでのすさびに、この御文のかたはらに、

女二　夢かとよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと思ふに

下荻の露―我が其昔憂きに身もよもあらざりし當時君は訪はんとしせざりしならずや

うしろめたき―すけの心

いとほしく宣へる―狭衣が面隠にせむ―此破棄てを狭衣に與へて、あはす顔のない氣の毒さを紛らはさん

殿より―堀川より

遁るゝわざ―一品宮との結婚を逃るゝ手段

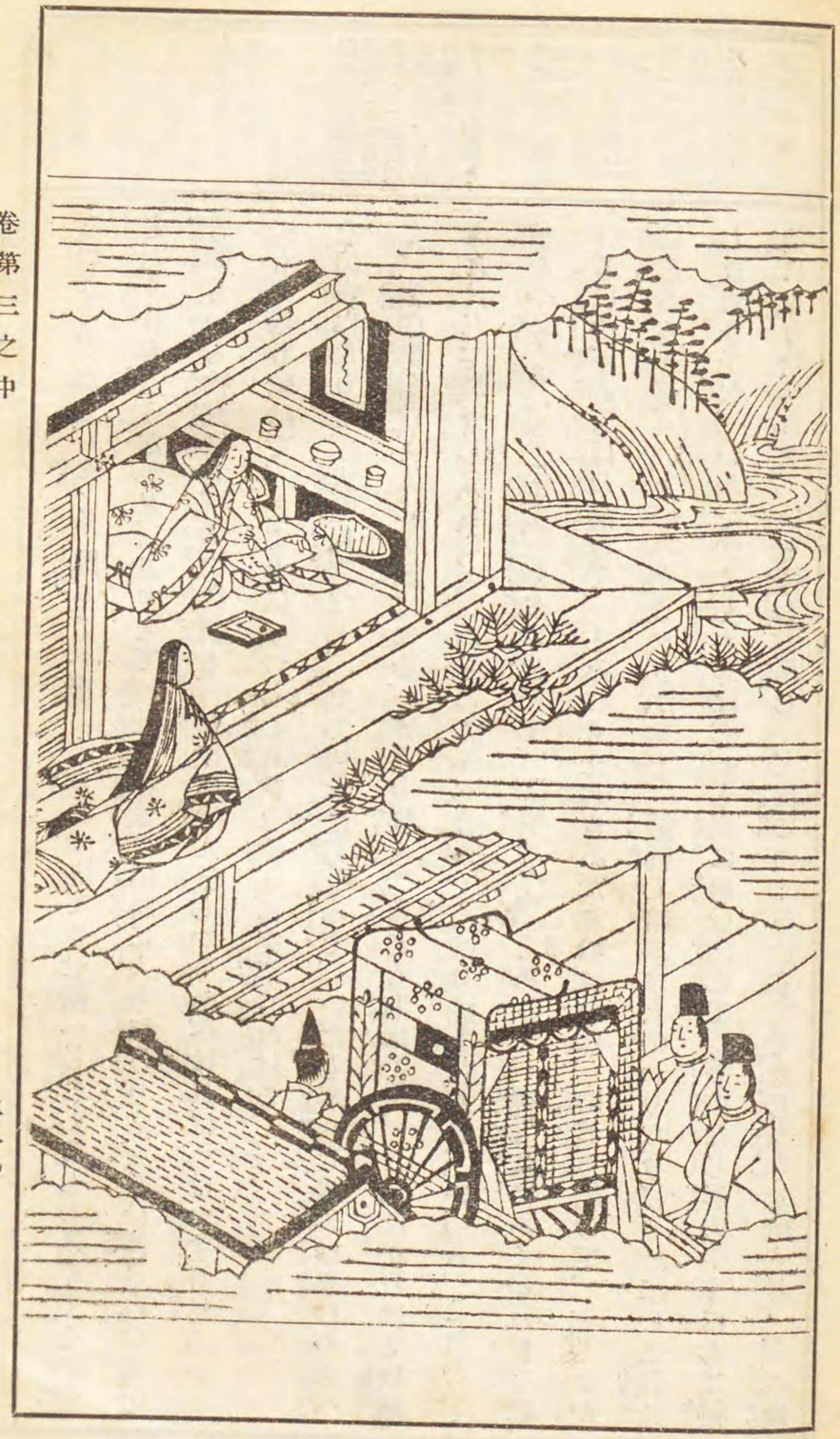
「起き臥しわぶる」とある所に、

女二　下荻の露きえ侘し夜なくもとふべきものと待たれやはせし

女二　憂き身には秋も知らるゝ荻原やする越すかぜの音ならねども

など、おなじ上に書きけがし給ひて、細やかに破りて、すけの參りたるに、「捨てよ」と賜はせたるを、かくれに持て行きて見れば、物書かせ給ひたりけりと見るに、うしろめたき樣にはありとも、いとほしく宣へるに、これを面隠にせむと思ひて、すけかゝる物をなむ思ひかけぬ所にて見つけて侍りつるを、奉るもおぼろげならぬ御志に侍る。さば今は思し慰めよ。

など聞えさせたり。一條の宮には、殿より、「今日よき日なり。一品の宮に御文奉り給へ」と宣へど、今朝のまゝに眺め入り給ひて、佐の許より如何いはむと待ち給ふに、辛うじて、かく破反故をえ給ひて、切に續ぎつゝ見つゞけ給へる心地、げに今少し御心のうち亂れまさりて、引き被きてぞ泣き臥し給ひける。此後はいとど、如何樣にして遁る



人の御爲も―一品宮の爲にも

五狹衣一品宮を娶る、女二宮を戀ひて一品宮に冷淡なり、父母の憂慮その夜―婚儀の夜時なりぬ―時刻になれり心もほれ惑ひて―狹衣がげにいと―狹衣の心御前に―父の

るわざもがなと、多くの願をさへぞ、人知れず立てさせ給へど、しるしも無くてその程と聞く日も近うなれど、さりとて、此事により山林に入りにけりと、言ひ流されむ世の音聞もいと物狂ほし、人の御爲も、むげにいとほしかりぬべければ、ひたすら思ふまゝにもえなり給はで、まことにうつし心もなきやうにぞ思されける。

その夜になりて、大殿母宮など、立ち居おぼし營みて、いだし奉らせ給ふ樣思ひやるべし。常の御匂ひも人に似給はぬを、晝より樣々の香ども取出でて、これはかれはと伏籠あまたして焚きしめらるゝ、おどろ〳〵しきまでくゆり滿ちたるを、「いづら、これをや、彼をや奉るべき」とて、數多取出でて、「時なりぬ」とあれど、魂も眞にあくがれ出でにけるにや、心もほれ惑ひて、とみにもえ起きあがり給はねば、殿渡り給ひて、堀川「いかに思さるゝぞ。いといみじきわざかな」と、經營し給ふさまのわりなきに、げにいと淺ましきわざかな、いかでかくしも思はじ、と萬に思ひ念じて、裝束など形のやうにして御前に參り給へるを、いと嬉しと思して、萬につくろひ立てて出し奉らせ給へど、狹「心地

旅所―一品宮方をいふ

斯うまで―母宮の心、斯く迄狹衣のいやがるものを

歎く〳〵出で―狹衣がつく〴〵と眺めて―母宮が斯うのみ―狹衣の御心が斯樣では一品宮がも可愛そうなり

蘆火たく屋の―蘆火たく屋の物語といふ小說中の事なるべし

少將も―右の物語中の人物

物語にてだに―母宮の心今はさばかりに―いよ〳〵今夜結婚と差迫りたるに

宮の御有樣―一品宮方の有樣

もまことに惱ましきかな。旅所にて斯う苦しくばいかゞせむ」とて、まみなどもいたう泣き給へりと見ゆるを、母宮はいと心苦しう、斯うまで思したる事を、我さへ何しにながちに聞えつらむ、と胸ふたがりて思さるれど、今宵になりては、實にすべき方もなければ、歎く〳〵出で給ひぬる後に、火をつく〴〵と眺めて、人やりならずうしろめたう思しやりたり。御前なりつる人々も、女房「いとほしかりつる御氣色かな。男の御身も、え心にまかせ給はぬものなりけり。斯うのみ思したらば、女宮の御爲こそ心苦しけれ。何の物語ぞや。かゝる事のあるよ」といへば、女房「それのみぞ多かる。蘆火たく屋の親の心こそ憎けれ。少將も餘りなれども、男親に從ひたるぞとよ」などいふを、母宮聞き給ひて、物語にてだに、さばかり心づきなき事を、今はさばかりになりぬる御有樣を、いとかく切に思ひ歎かするも、人はいかに思ふらむ、など思しけり。待ち聞え給へる宮の御有樣、世の常ならむやは。三十歲にも餘らせ給ひぬれば、おとなしう、飽かぬところなく、ねびとゝのほらせ給ひて、恥かしげにけだかう心にくき御有樣など、唯ほの見聞

如何樣にして―狹衣の心
うきはためしも―女二宮の書きよごしの歌
世はいと―狹衣の心
何事を飽かずと―女二宮の何處が不足で
むかはりぬる―報いられたる
たが玉章を―「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらん」せいたいの―朗詠、雁「碧玉裝箏斜立柱、青苔色紙數行書」
聞かせばや―女二宮に我が泣く音を聞かせたしと也

き奉り、思ひやりしに違はず。如何樣にしてあかし暮さむと、獨寢のあかし難かりつるのみ戀しくて、「うきはためしも」とありし御手習の、心にかゝりて思ひ出でられ給うて、枕の濡れぬるぞゆゝしきや。世はいとあり難うこそありけれ、思ふ事一つによりて、何事を飽かずと思ひはてられ奉りて、すぎ給ひけむ、その報は必ずわが身にありなむと思ひつゝ、唯今宵の内にむかはりぬる心地し給ふ。

惱ましきにことつけて、いと夜深く出で給ふ。一條の宮におはしぬ。まだ夜深うて起きたる人もなければ、格子を一間手づからあけ給ひて、やがてながめ臥し給へるに、雁の數多列ねて鳴き渡るは、狹「たが玉章を」とひとりごちて、狹「せいたいの紙の色紙」と、誦じ給へる御聲など、げに帝の御妹と言ふとも、世の常ならむは飽かずおぼされむも理なる御樣なり。

藤　聞かせばや常世はなれし雁がねの思の外に戀ひてなく音を

など獨ごち給ふを、聞く人だになきぞいとかひなき。硯引きよせて御文書き給ふを、今朝のにやと見れど、嵯峨の院へなるべし。

今朝のにや―一品宮へ今朝贈るべき後朝の文なちんかと思へど女二宮への文なるべし

入道の宮は、御持佛堂の妻戸押開けさせ給ひて、峰の朝霧の晴間なきをながめやらせ給ひて行はせ給ふに、院も後夜の御念佛のついでには、必ず渡らせ給へば、阿彌陀の大咒讀ませ給へるいと尊く聞ゆる。御前の花ども露に亂れ合ひたるなどを、人も疾くおきてつくろひなどするに、中門のかたに人のけはひのするを見やれば、何の尉などにやあらむ、太刀佩きたる人の、こゝかしこさし覗きつゝ、人案内すると見ゆれば、御簾など下して問はすれば、使「大將殿の御使、内侍のすけの御局に案内し侍る」といふを、院も聞かせ給ひて、嵯峨「思ひかけずをかしき程の使かな。よべは一品の宮に參ると聞きしを、まづ急がれつらむもをかしうこそ」とて、やがて召入るゝを、すけ今ぞ聞きつけて、こまかなる事もやとわびしければ、惑ひ出でて、局の方より尋ぬれば、「早く御前に召しつれば參らせつ」といふを、胸つぶれて聞き居たるに、院の御手づから引きあけさせ給ひて、嵯峨「見る度ごと、さもめでたうなりゆく手かな。あやしうこの世の人とはおぼえず

まづ急がれつらむも―一品宮への後朝の文をさしおきて、此方への分を急ぎたるも興あり
こまかなる―若し此文に、院などに見られて惡き委細の事が書いてありては大變と

思ひきや―葎の門は女二宮、草の枕は一品宮
かやうにも―嵯峨院の御前へも披露する樣に豫め狹衣が用意したるにやと胸落ち居ぬ―すけが
今朝は―嵯峨院の心なりたる人―生れ出でたる人、狹衣をいふ
恥かしう―女二宮が見苦しうや―我如きものの書くは見苦しかるべし
御みづから―嵯峨院が

のみ、何事もねび行くこそ、餘りゆゝしけれ」と、めでさせ給ひて、讀ませ給ふを聞けば、

狹　思ひきや葎のかどを行き過ぎて草の枕にたび寢せむとは

とばかりありけるは、かやうにも取出でよと、おほしけるにやと聞くも、なほ心ある人の御しわざはかゝるぞかしと、胸落ち居ぬ。今朝は他事思ひ紛はしたりつらむものを、如何ばかり疾く急ぎ起きて書きつるならむと見ゆる心の、たゞなるよりはをかしう思されて、嵯峨「はかなき事につけても人に情を見せ、哀をかけられむと、なりたる人なりけりや。かく急ぎものしつらむものを」ともてはやさせ給ひて、嵯峨「この御返事は、珍しげなき内侍が言ひたらむよりは、今少し心を動かすばかり、御手づから宣はせよ。何事も折からになむ侍る」とて、御硯などまかなひ聞えさせ給へど、今朝しも思ひ知り顏に見せむも恥かしうおぼしやらる。院はさも思したどらで、心強きやうに思しめしたれど、女二「かやうにをかしき程の事は、見苦しうや」とて聽かせ給はねば、聞え煩はせ給うて、御みづから書かせ給ふ。

まことに―狹衣の心、女二宮と交情の絕えざりし當時に取つてかへしたく
今日の雅使―一品宮への後朝の文の使
ことなしび―何げなき素振
院―一條院女院
一品宮の母
思ひかけざりし―かく冷淡に狹衣より取扱はるるは
かばかり聞えさせ―狹衣の文が通り一遍の挨拶だけなるに、此方の返事のみが度外に熱心なるも、醜ければ形だけの返事をし給へ
いはけなからぬ―一品宮は年とりたる丈に

嵯峨　故里は淺茅が原となりはてて蟲のね繁き秋にやあらまし

今こそ嬉しう。

と、あるを見給ひて、まことにありしながらの御身にはなさまほしう、思ひこがれ給ふ程に、秋の日もはかなう暮れにけり。

殿より、「今日の御使は、いかなれば今までは奉り給はぬぞ」と、聞えさせ給ふも聞きにくければ、渡り給ひぬ。御使は、内裏へも殿上人の數にて候ふ左衞門の權佐といふをぞ奉り給ひける。

狹　まだ知らぬ曉露におきわびて八重たつ霧にまよひぬるかな

などやうにことなしびならむかし。院は、めでたき書樣などを御覽ずるにも、思ひかけざりし事かなと、なほ御胸つぶるべし。母女院「この御返は、かばかり聞えさせ給はむに、さだ過ぎたらむはかたはなるべければなむ、殊更ばかり」と聞え給へば、なかくいはけなからぬ御程は、萬いとつゝましげに、いとほしき御氣色なれど、筆紙などなべてな

らぬを、御几帳の内にさし入れ給ひて、母「なほ〳〵」と聞えさせ給へば、思しわびて、たゞ引結びておかせ給へるを、包みて出させ給ひぬ。御使には、例の事なれば、世の常ならぬ女の裝束に、細長などにこそはあらめ。しがらみかくるさを鹿の心地して、御前に參りたるもいとをかしくて、思ふさまなる御心どもなり。御返いかならむと、これさへ見劣りせむと侘しかりぬべければ、とみにも開け給はぬを、いと心もとなしと、母宮思したれば、ひろげ給へるに、物も書かれざりけり。古代の懸想文の返事は、伊勢がかゝる事をしける、げになか〳〵ならむよりはいとよしかしと、これにてぞ思ひ勝し聞えさせ給ひける。されど、「あなおぼつかな」とて、うち置き給へるを、宮は、「忌みもこそすれ、ことになきわざもし給へるかな」とて、ものしげに思したり。

三日の夜の事、例の事なれば思ひやるべし。さばかりの御中におぼし急がむことの、何事も斜ならむやは。四日のつとめては、心のどかにてものし給ふを、男の御有樣ぞいとまばゆかりける。唯みすの外にて見奉るだに恥かしく、いかなる人、彼に見え奉らむと

しがらみ―秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ」御返いかならむ―狹衣の心

げになか〳〵―狹衣の心

宮―狹衣の母宮

忌みもこそ―白紙の返事は忌はしきものに思へる也

ことになきわざ―變つた仕方

三日の夜の事―婚禮後三日目の祝

心のどかにて―狹衣がゆるりと一品宮に居るに

覺えつるを、あたり苦しきまで光りかゞやくやうに見え給へば、さぶらふ人々はいとわりなく、顏の置かむ方なき心地するに、まいて宮は、こよなき御衰の程をおぼし知れば、唯御衣にまとはれて臥し暮らさせ給ふを、いたうもあらはし聞え給はず、夜な〳〵の御手あたりには違はずやと、恥かしげなる尻目に、時々見奉り給ひつゝ、かねては、されど如何はせむ、忍草を近くて見むを取所にて、思はずなる世をも過すばかりと思ひ、その慰もまた見給はぬほどなればにや、かなはざりける世の中をつらう心憂くぞおぼえ給ふ。さばかりあかぬ所なく、らうたげに美しかりし御色樣をだに、なほ室の八島には立ち竝び給はざらむと、切におとしめ思ひやり聞え給ひし御目のならひに、理ぞかしと、まづうち思ひ出でられさせ給ふも、いとわびしうて、狹「垣ほに生ふる」とぞ言はれ給ひぬべき。いとさばかりの宿世こそ難からめ、などこの嵯峨野の花は、餘所の物になしはて聞えけむ。何事かは斜にいでやゝと思ふ事のありし、と思ひ出でられ給ふにも、さはいへどけ近き程のあはれは、こよなく忍びどころ多かるにや、涙もこぼれぬるを、見咎

宮は―一品宮は

いたうもあらはし―狹衣が強ひて容貌を見顯はさんともせず

かねては―結婚前の狹衣の了簡

されど―どうせ仕方がないから

此結婚は飛鳥井腹の子を手近に見られるのを取得にして

過すばかりと思ひ―此下脫文あるべし

さばかりあてに―女二宮の容色をいふ

御色樣―「色」は「有」を草體より誤れるなるべし

室の八島―源氏宮

理ぞかし―一品宮の見劣りする也道理

垣ほに生ふる―「山がつの垣ほに生ふる撫子に思ひよそへぬ時の間ぞなき」

いとさばかりの―源氏宮を手に入れる事は出來

ぬにしても、女二宮をなぜ他人にして仕舞ひしならん

け近き程の―一度近づきたる女には思出も多きものと見えて

年頃の本意―出家の望

殿の御しつらひも―結婚後も自分の室も侍女宰も總て從來の儘にし置きてとまりなど―自邸に

心の儘なる我儘に振舞ふべき年輩に非ず

悔しともぼす―父が後悔する時あるべし、出家の望あるをいふ

せめてむづかしき―差迫りてむしやくしやする

のどかにおはする―狭衣が一品宮にゆつくりして居る

なほとも―猶來給へと強ひて狭衣が呼びもせず

見ま憂く―狭衣をつらく思ひて鬱々たる中に心づくろひ―心を引締め居ること

山のあなたの―「三吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隱れがにせん」家居も出立ち―誤あるべし

寄すれば―「白波の寄すればなびく蘆の根のうき世の中を見るが悲しさ」

殿の一つ心に―堀川と一所になりて狭衣を責むる事はせず

思ひ出て―狭衣が

ありし樣にてや―先の樣にして再び天稚御子の下り來るや否やを試みんかと

誦經を人知れず―誤脫あるべし

むる人もやと苦しきに、心安く泣き暮しつる來し方いと戀しく、いつまでいと斯うのみ思ひて過さむとすらむと、さすがに行末とほき心地ぞし給ひける。かへすがへすも、いと侘しうおぼされける年頃の本意遂げつべきなゝめりと、今朝の間に多くの事を思ひつゞけて、かたはらに臥し給へるも、いとすさまじげなり。

日頃の過ぐる儘には、人目もえつゝみあふまじく、有り經べきこゝちもし給はねば、殿の御しつらひも、なほさながらおかせ給ひて、さぶらふ人々もおなじ樣にて、夜も常にとまりなどし給ふを、殿は、「いとあるまじき事なり。たとひ心にあはずとも、むげにいはけなく、心の儘なるべき心つかふべき程にもおはせず」など、むづからせ給へば、狭「いでや、さは思ひし事ぞかし。いつまで斯くさいなまれむとすらむ。悔しとおぼす折もありなむかし」と、せめてむづかしき折々はうちむづかり給ひて、いと近き一條の宮に隱れゐて慰め給ひにける。まれ〳〵のどかにおはする折も、殊の外に若くめでたき御樣の恥かしさに思しつゝみて、女宮は更に晝はわたり給はず、恥ぢ聞え給ふを、「なほ」とも聞え給はず、唯かしこまり從ひ聞えたる樣にて、つれ〴〵なる折々は、をかしき人々の數多さぶらふを召し出でて、琴琵琶彈きあはせて遊び給ふ。さてやがて夜などあかし給ふを、かたはらいたくわりなしと思ふ人もあるべし。女宮も、限なくあてなる御心といへども、さきの世より結ぶの神のしおき給へる御契なればにや、かる〴〵しき御名を流し給へる始より、見ま憂くつらき人と、おぼし結ぼほるゝ程に、いとど中の疎くのみなりまさらせ給へど、見知り顔にも恨み聞え給はず。心づくろひもあまり苦しき折は、今日今日とのみ、山のあなたの家居も出立ち給へど、明暮他事なき御祈のしるしにや、心は空ながらも長らへ給ふまゝに、唯、狭「寄すればなびく蘆の根」とのみ言ぐさになり給へるを、母宮は御目にかけて、いとゆゝしくうしろめたく思さるれば、殿の一つ心に、あながちに聞え給はざりけり。ありし天稚御子におくれ給ひけむ悔しさも、この頃ぞ思ひ出で給ふ。ありし樣にてや試みましともおぼえ給ひけり。普賢の御光も忘れ難きを、いかでとくかの誦經を人知れずおぼしけり。

六狹衣一品宮に行きて飛鳥井腹の姫君を見る、一品宮姫君が狹衣の實子なるを悟る、夫婦の中益疎し

まかで給へる―狹衣が女宮―一品宮ひきあちはし―衣を引き除けて顔をあらはさしむる也

畫つ方、内裏よりまかで給へるに、一品の宮に參り給へれば、辛うじて女宮こなたにおはしましけり。うちそばみて臥し給へるを、まづさし寄りて、狹「あなめづらし。己が妻と聞えさせむぞなめげにや」とて、打笑み給へるにほひも愛敬も、あたり苦しければにや、いとゞ顔を隱してそむかせ給へば、狹「あないぶせのわざや。時々は内外はゆるさせ給へ」とて、例ならずひきあらはし聞え給へば、げに御年もさばかりにこそと見えて、痩々にあてやかにて、まみいと恥かしげに、らう〳〵しく清げにぞおはしける。御髪のかゝりたる程、さばらかに清らにて、たけ三尺ばかりにや餘り給ひつらむと見ゆる、末など細らせ給へり。香染の御衣どもに、青き濃き薄きわれもかうの織物奉りたるも、いとゞにほひなく、すさまじき心地したるにも、ありし雪のあしたに、齋院の、枯野がさね奉りし御寢くたれ姿ぞ思ひ出でられ給ふ。花やかなる色合よりも珍しうも見えしかなと、まづ思ひ出でられ給ふ。

狹武藏野の霜枯に見しわれもかう秋しもおとる匂なりけり

餘りおとなしく―餘り老人じみて居る

あなあぢきなの―一品宮の心

心とげなる―神經質らしき一品宮の樣子に

何しに―狹衣の心

然にや―飛鳥井腹の子にや

然までは―それ程にはまだ馴染まぬ

程ある事かは―小供はぢきに馴染むもの

馴れぬるは―「馴れぬるは浮世なればや須磨のあまの鹽燒衣間遠なるらん」

おなじ色とも見えぬは、くちをしき事かな、と心の中におぼし續くるをも、人聞かざりし所にて心に任せたりし獨言さへ、口ふたがりぬるを、なほいと侘しう思ひあまり給ひて、狹「冬深き霜枯の雪のあしたこそ、この色はをかしけれ。この頃は餘りおとなしくこそありけれ」と宣ふを、あなあぢきなの事どもやと耳とまり給ひて、引きかづかせ給ひぬるもいとほしく、心とげなる御氣色に、何しに聞えつらむと、なほ煩はしければ、いとゞ言少にて、つく〴くとながめ臥し給へる御心のうち、いと物すさまじ。女院のおはします方に、幼き人々のけはひどもして、走り遊びなどするを、然にやと耳とゞまりて聞き給ふもゆかしければ、宮に、狹「をさなき人のものし給ふと聞き侍りしは、など見え給はぬ。この足音はそれにや。つれ〴くなるに、こなたに渡し給へ」と宣へば、一品「いつの程にか然までは」と答へ給ふ。狹「幼き人は必ず程ある事かは。御心ならひに疎々しくもてなさせ給ふめり。如何なるものをさなき人のゆかしく侍るを、唯見せ給へ」と聞え給へば、一品「いさや、馴れぬるは悔しきとかや聞けば」とて、扇のそばよりまれ〳〵ほ

八重たつ山の―「白雲の八重たつ山の櫻花散りくる時や花と見ゆらん」

例の姫宮―飛鳥井腹院の御方―女院の方のぞき給へば―狭衣が若宮の御程―女二腹の若宮位の年輩

夜な〳〵の月影―月あかりに見し飛鳥井の姫君の面影

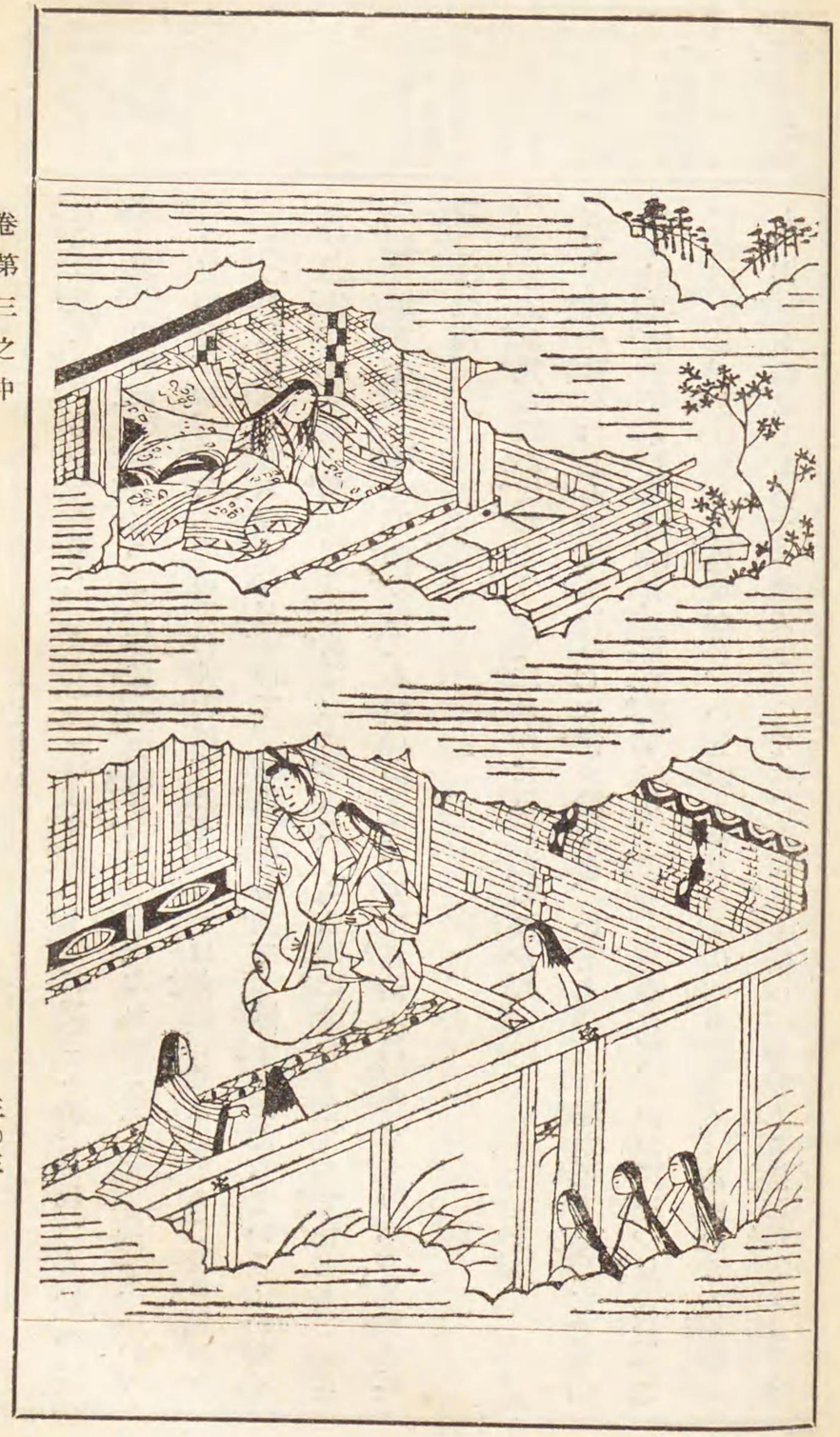
宮の御前―一品宮

あるぞとよ―と」一つ衍

唯おはせませ―憚はずに行き給へ

のかに見おこせ給へる目尻、らう〳〵しげに煩はし。狭「あなうたてや。いと輕々しき事をも知らせ給へるかな。八重立つ山のなどこそいひ侍るなれ。あな心憂」など、うちなよび給へるかたちけはひなどは、心あらむ女、高きもみじかきも、いかゞは見知り聞え給はざらむ。

例の姫宮は院の御方におはします。つれ〴〵なる晝つかた、をさなき人々の音のせし障子のもとに寄り給ひて、ほのかなる穴よりのぞき給へば、八つ九つ十ばかりなる、又それよりもをさなきなど、次々にていと數多がなかに、襞枋の織物の細長著て、髪は肩の程よりも過ぎて、若宮の御程なるやそれならむと見ゆるに、物言ひてうち笑みなどしたる口つきの愛敬、いとかをり美しけれど、若宮の御けだかさには劣りたるまみの、いとわらゞかにてらうたげなるは、唯かの夜な〳〵の月影に變らざりけりと見るに、涙もこぼれて、細き穴よりいとど見えずなりぬ。飛鳥井姫君「まろは宮の御前に參らばや。なでふ知らぬ人のあるぞとよ」とうちむづかり給へば、十ばかりなる兒の、「唯おはせませかし



今少し―帝より賤しき人　宮の御前の―此人は一品宮の夫ぢやから其方の父君ぢや

帝には見え奉らずやありし。ましてこれは今少し下衆にてこそあンなれ」といへば、又、童「宮の御前の御男ぞ。されば姫君の御父にこそあンなれ」とさかしく言ひて、「いざ行きてのぞかむ。かたちのめでたくおはするぞ。されば姉は、見え奉るこそ死ぬばかりはづかしけれと言ふや」など言ひて、拔足に寄り來て、障子をはなちていさゝか開くるを、此方より廣く開けてさし出でたまへるに、ある限あきれて立てる氣色どもいとをかし。姫君をかき抱きて此方に入り給ひぬ。ちかくて見給ふに、たゞその人と見給ふに、涙こぼれぬ。

さし出で―狹衣が　姫君―飛鳥井腹その人―飛鳥井姫君の樣に思はれて

狹　忍ぶ草見るに心はなぐさまで忘れがたみに漏る涙かな

とて、顏に袖をおしあてて、いみじう泣き給ふを、いとあやしう恥かしと思ひたるものから、打泣きなどもし給はず、顏も赤うなり、汗もうちあえて、いかにぞや思ひ給へるけはひなど、かばかりの程ながら、いとかう似たるものなりけりと、あはれなる事限なし。狹「放ち給はでおほすべき人ぞ。こなたに常に渡り給へ。をかしき遊び物ども奉ら

いとあやしう―姫がいかにぞやーどういふ譯かと思へる　いとかう似たる―子は親に似るものぢやわいと　放ち給はで―我は其方が親しむべき者ぞ

む」と宣へば、うちうなづき給へるなども、今より樣ことにらうたげなる事などは、唯その人とおぼゆべきなゝめりと、ゆゝしきまで見え給ふを、思はずにおぼさるゝ御あたりも如何はせむ、年頃行方もなく思ひなしつる人を、かばかり見るに勝ることは何事かはあらむ、斯からざらましかば、いかでかは見まし、今は唯この人に慰めて長らふべきにや、とこよなく思ひ慰められ給ひけり。諸共に添ひ臥し給ひて、狹「雛もち給へりや。恥ぢ給はでこなたに遊び給はば、いみじく作りて奉りてむかし。若宮の多く持ち給へる遊びものども、取りて奉らむ」など宣ひて、樣々をかしき繪など畫きちらし給ひて奉り給へる。もとよりいとなつかしき御心にて、うち笑ひ、ものなど宣へるも、あさましきまでうつし取り給へるは、なかゝなる心まどひなり。人の侮らはしく思ふらむに、かくとや宮に聞えてまし、と思せど、物語も打解けては聞えにくげなる御有樣なれば、何かは、さらずとも、今は我が斯くてあれば、いとよくもてなしてむ、と思す。女なるしも、かく物げなき樣なるこそくちをしけれ、などか今少し、人も漏り聞かむに人

思はずに―苦々しく一品宮抔が思はれても仕方がない　年頃―行方を失ひし飛鳥井を親しく見るに勝る程の事は、此遺兒を見るより外なし　もとよりいとなつかしき―以下飛鳥井腹の樣子をいふ　うつし取り―母の樣子を其儘　人の侮らはしく―素性知れずしては人も侮るべければ、一品宮に打明けようかしら　何かは―狹衣の心　かく物げなき―母方の卑しきが殘念　人も漏り聞かむに―なぜ人に知れても恥しからぬに女に子を生ます事の無かりしならん

かげのこ草―飛鳥井姫君

宮の御方―一品宮　渡らせ給はぬ―なぜ此方へ來られぬ　心の隈多げなる人―祕密の多そうな人、狭衣あけたるなど―此下脱文あるべし、以下は狭衣が姫君を抱き居る所也　今は渡らせ給へ―もう此方へ歸り給へ　聞きつけて―姫君が去なまほしげに―狭衣の所から去りたげに　この心は―此姫君は我と仲よさそうなれば

人しきわたりに、かゝる事なかりけむ、何ばかり勝れたることも見えざりしかげのこ草の、種をしもとゞめけむよ、など數ならず思し出づるにしも、いとゞ昔の秋のみ戀しくなり給ふ。萬に唯、かやうの方に思ふ事叶はざりける宿世かな、とぞくち惜しきや。涙のごひ隱して、宮の御方に　狭「などか渡らせ給はぬ。つれ〴〵に侘びて、をさなき人を語らひてなむ、慰め侍る」と聞えさせ給へど、われもかうの恥かしかりしに、いとゞ向ひにくゝおぼされて渡り給はず。ありつるをさなき人々參りて、斯う〳〵と語り申せば、一品「さばかり心の隈多げなる人に、をさなき人をしも見せつらむよ。いかにして誰が率ていきつるぞ」とて、ものしげに宣はすれば、子供「誰か率て奉らむ。この子どもの騒がしうて、御障子をあけたる」など、乳母かやと聞ゆる人ぞ參りて、乳母「今は渡らせ給へ。人に知られぬ御ありきこそ、あやしう」などおとなふなれば、聞きつけて、去なまほしげに思ひたれば、抱き給ひて、聲する方の障子のもとに寄り給ひて、狭「いみじう疎々しう誰ももてなし給へど、この心はいと美しう相思しつべかゝめれば、はしたな

扇をさし隱して―姫君が何とか―我を是から何と呼び給ふぞ　引きたてて―障子を忘れがたみに―前に狭衣の獨言によみし歌　宮の御乳母子―一品宮の乳母の子　宮の御前―一品宮　さばかり―一品宮の心　これに因りて―此兒のある故に我と縁をも結べるならん　侮らはしく―此兒は卑しき者の子ではあれど生し立てて―此子をつらき人と―狭衣を　これがゆかりばかりにて―此兒があるばかりで心にもなき夫婦の關係をつぐるはつまらぬ

う、ありつかぬ心地し侍れど、今よりは慰みぬべうこそ」とて、さし出で給へる樣の、いとまばゆければ、扇をさし隱してゐたる樣などめやすければ、狭「何とか召す」と宣へば、姫宮「母とこそは」といらへ給へるが、いとうつくしうて、狭「今よりは、さらば母をこそ頼み聞えめ。猶あひおぼせ」と教へ奉りて、引きたてて退き給ひぬ。

「忘れがたみに」とありし御ひとりごとを、宮の御乳母子の中將といふ人、御障子のつらにていとよく聞きけり。宮の御前にこまゞゝと語り聞えさすれば、さらばこの兒は、何がしの少將のと聞きしは、あらざりけるにこそはと、これに因りてこのわたりには尋ね寄りにけるにや、いみじう物思ひたる樣なるも、この事にこそあゝなれ、など心得させ給ふにも、いと侮らはしく思しつるゆかりなれど、唯うつくしかりつる人によりてこそ、徒然なるに、をかしきさまに生し立てて持たらむと、思しかしづきつれ、かくばかり見えま憂くつらき人と思ひつるに、いとどこれがゆかりばかりにて、心は空ながら見え過ぐさむこそ、などおぼすに、人わろくいとくちをしき身の宿世かなと、いとゞおぼし歎

常に渡らせ―狭衣の方へ姫君をやりて忍ぶの露に―この姫君をのみ力にして見知らぬさま―夫婦関係の面白からぬをも知らぬ顔をして　この方の御方―狭衣の方かゝる人の無き―子の無きがさびし　殿―堀川邸がまだ出来ぬかと催促するが迷惑　例の人の―他人の例の様に女狂をし　たちばが―我が子也　とて引取方を催促して　あるべき―我は来る女も　其様なる事も無き　故せん方なし　姫君をこそ―此子を子の代りに　せつれなく―知らん顔で　あながちに―一品宮の心　隈ありげなる―隠す事多き　いつまでと―「と」は「も」の誤か

きけり。その後は、姫君をも制せさせ給はず、常に渡らせ給ひて、わが御身はありしよりもけに、疎々しくなりまさり給ふ。まれ〳〵見え奉り給ふ宵々も、またいと氣遠くもてなして、いとわりなき事のみまさりゆけど、内裏などの聞きおぼしめさむ事を思すにより、宮のおぼし寄るもしるく、唯この忍ぶの露にかゝりて、見知らぬさまにてぞ過し給ひける。姫君は、いみじうなれ睦び聞え給ひて、唯この御方にのみおはすれば、抱きうつくしみ給ふ。狭「年の積るまゝに、かゝる人の無きこそ徒然なるべけれ。心にまかする事などのやうに、殿などの、今まで見せぬ事とさいなみ給ふこそわりなけれ。まことに持たるまじきにや。こゝかしこ、例の人のやうならましかば、自らかこち出づる人もやあらまし。今はいかゞせむ。姫君をこそ頼み聞ゆべかゝめれ」とつれなく宣ふを、あながちに隠すべき事かは、聞かまほしきにはあらねど、萬に隈ありげなる心の程かな、まいていかになどおぼしやらるゝ心の中も恥かしう、いつまでと假初にのみおぼされて、如何様にして、なほ思立ちにし有様にもなりにしがな、と思しけり。

思立ちにし有様―出家　七若宮姫君袴著の祝　この姫君も―狭衣の心　又知るべき人―我が外に世話する人は無きか　思ふより―君の外に世話すべき人の有無は君の心に問はゞ明なるべし　聞き給へる―狭衣の心、事情を知居るならん　見ま憂く―一品宮がげにおなじ心にて―一品宮の心、飛鳥井存命ならば心を合せて姫君袴著の支度もしたからん　渡したらむ―手元に引取りたるからは袴著もしてやるべし

霜月ばかりには、若宮の御袴著の事おぼし立ちて、大殿にも急がせ給ふに、この姫君も同じ程にこそあるらめ、とおぼせば、この序に著せばやとおぼして、宮に、狭「この君はいくつぞ。袴著はまだしきか。さらば若宮の御事、殿のおぼし立つが羨ましきに、わたくしの急し侍らばやと思ふを、さかしらにや。又知るべき人は侍らぬか」と宣ふ。いと心づきなしと思して、

姫宮　思ふよりまた思ふべき人やあると心に心とはば知りなむ

とて少しほゝ笑み給へるは、聞き給へるにこそはあらめ、常磐の尼君が、聞えてげるなんめりかし、と思せど、やがてこれに書きつく。

狭「思ふより又は心のあらばこそとひもとはずも知りて惑はめ

心得ぬ事どもかな」とてやみ給ひぬる氣色、残りおほげに恥しげなるも、いと見ま憂くおぼさるれば、げにおなじ心にて、かゝるついでに、いかに著せまほしからむ、唯うちまかせて、さやうに渡したらむついでに、然てもあれかし。これがゆかりにて、あなが

念じ過さむも―我慢して永く夫婦の關係をつぐけるも外聞惡きに

這ふ木數多に―狹衣の愛を分つ處多くなりゆかば、我が出家の本意を遂ぐる事も出來て嬉しかるべし

院にも―女院にも此兒の素性をも言はず

おなじ所にても―同じ處にて此兒にも袴著の祝をさせたしたちまちに―突然

ゆかしがり―狹衣が此兒を

え聞え給はず―袴著の事を一品宮に言はず

こゝに皆―用意は當方にて調ひたれど

序よく―若君と一所にしたらば

ちに念じ過さむも、いと人惡くおぼゆるを、這ふ木數多になりぬれば、なか〳〵思ひし本意のまゝになりて、いかに嬉しからむ、年月に添へては罪のみこそ積らめ、かくて見過しても、何ばかりの目やすかるべきぞ、などおぼしなりて、院にも、かうにこそありけれども聞えさせ給はず、唯、一宮「若宮のついでにおなじ所にても」と聞えさせ給へば、女院「ついでならずとも、さばかりの事はこゝにても難くやは。たちまちに、知らぬ人に何かは任せ給はむ」と宣へば、一宮「されど、わざとは事々しう思ひ立つべきにあらぬを、何かは。たゞにてだに、いみじうゆかしがり給ふを、かゝるついでにと思ふにこそあらめ」とて、なほ渡さむと思したれば、女院「さる樣こそは」とて、その御心まうけせさせ給ひけり。大將殿は、ありし後は、煩はしければ又もえ聞え給はず、人知れずくち惜しくおぼしけるに、明日になりてぞ、一品「姫君は今宵や渡し給はむ」と聞え給ふに、日頃さも宣はせざりつれば、狹「俄にはいかでか」と宣へば、一品「こゝに皆思ひまうけたれど、こゝにてはわざと思ひ立たむもうるさきに、げに序よく侍りなむとこそ、院も宣はすれ」

聞き給へる―狹衣と姫君との關係を

自ら一人こそ―自分丈は御身と一緒になりて世話もすれど、他の人には迷惑をかけたくなし

院の御方にても―女院の方にて内々に式を擧げてもよかちんことなしびに―何げなく、下の「と」は衍文なるべし

げにもぼし―以下一品宮の心

今は我しも―斯うなりては自分が世話やくは不穩當なり

引き忍び―内々にて式を擧ぐるは不快なちん

思ひ立ちぬ―思ひ立ちたる上は寧ろ公然にしたがよしと

腰結―儀式の節袴の腰紐を結ぶ役

と辛うじて言續けて宣はするも、聞き給へるなりけりとおぼせば、あまえて、狹「序ならずとも、年返りて二月ばかりにて侍りなむ。かうしも見聞ゆれば、自ら一人こそおなじ心に聞えさすれ。外へは、たちまちに、さらずとも侍りなむ」と聞え給ふを、又いかに思ひ給ふにかとおぼせば、返す〴〵もえ宣はで、一品「心もとなげに思ひたるものを、院の御方にても、忍びやかにてもありなむ」と獨ごたせ給へば、狹「さもなどか。わざとだにこそ、院の御前にて、女子は手觸れさぶらひ奉らまほしけれ。かしこにては誰かは」とこそ、ことなしびにと言ひなし給ふに、げにおぼし立ちたる事どももかひなかるべきを、うちつけの便ならずとも、難かるべきならねば、今は我しも思ひあつかふべきにあらず。さこそことなしびに言ひなすとも、いかばかりもてなさまほしからむものを、引き忍びたらむも、なほあぢきなからむ、などおぼせば、院に、内々の事は聞えさせ給はねば、狹「かくまで思ひ立ちぬとならば」など宣はせて、御腰結に、みづからの代にとて、大殿に聞えさせ給へば、渡り給ひてぞ著せ奉り給ひける。大將も若宮の御むかへに、晝

うつくしさ―姫君の

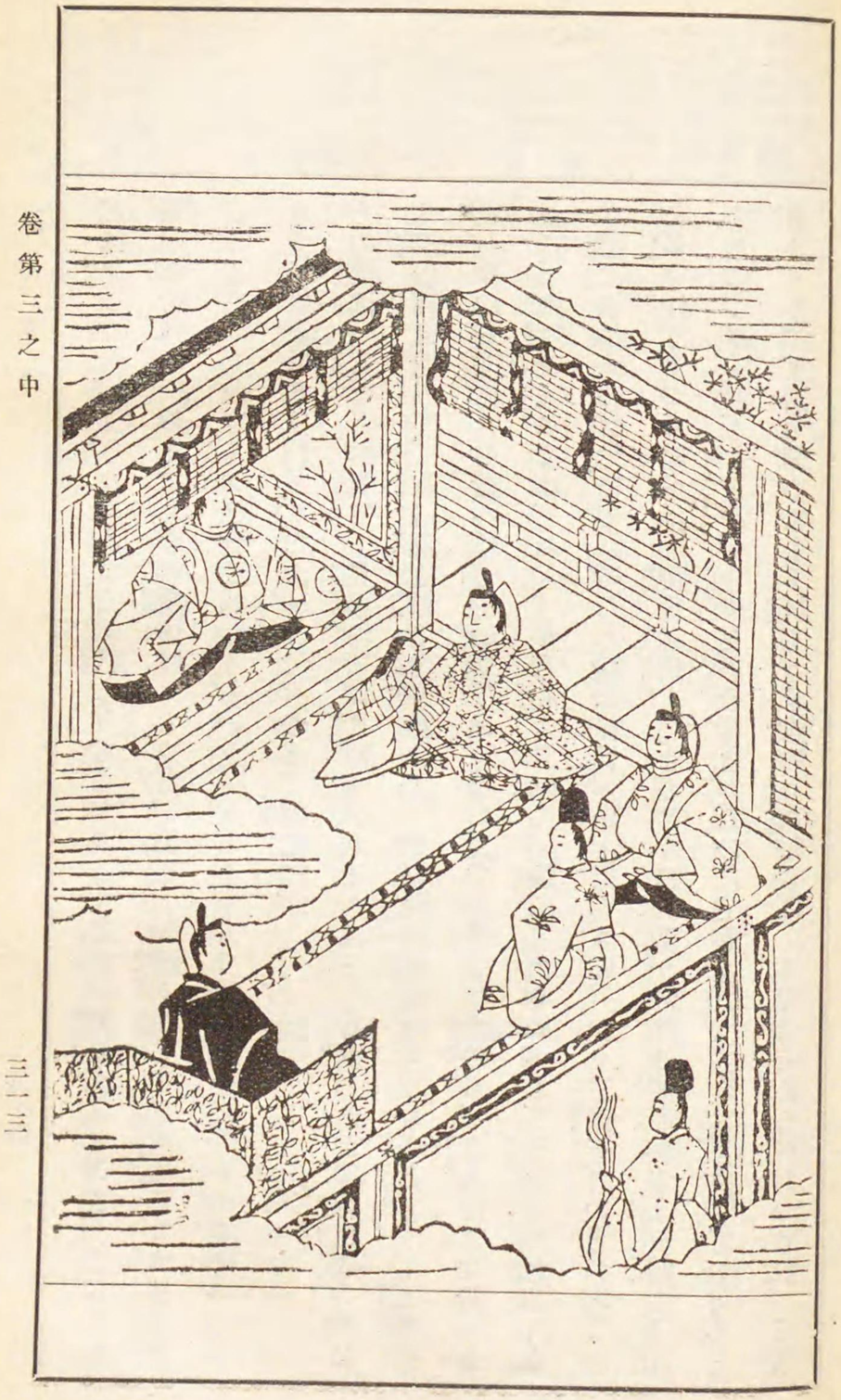
おしわたして―一様に上は―帝は

大將の御兒生―狭衣の幼時

まとはれて―若宮がすがりて

より御暇なけれど、あまり見入れざらむも人目あやしければ、同じ様にぞ扱ひもてなし給ひける。その程の有様思ひやるべし。おとなしうしたてられ給へるうつくしさを見給ふにも、人知れず哀なる御心のうちなり。

若宮は、やがてそのつとめてぞ渡し奉り給ひける。御供には乳母たち二人、女房廿人ぞ参りける。紅どもに、りんだうの表著、菊の唐衣おしわたして著たり。御しつらひなど、なべてならずめでたき事更なりや。よろづよりも若宮の御うつくしさを、上は、餘所に聞き給ひしよりもうつくしう、有りがたう見奉り給ふに、類なきものに思ひ聞え給ふ。大將の御兒生にたがふ所なく似させ給へるぞ、げに前の世より契ありける御中にやと、うつくしう辱く、あはれにおぼさる。大將の出入り給ふに、御指貫の裾にまとはれて、抱かれむとのみし給ふを、いと悲しげに思ひ聞え給へる氣色なども、近くて御覽ずれば、猶如何なりし事ぞとまで思されけり。暮れぬれば、みこ達左右の大臣を始め奉りて、世にある人、高きも下れるも、参らぬ人誰かはあらむ。御前の御しつらひ有様な



たちあかし―薪を束ねたる燈火

㊅若君堀川邸にのみ在り、前齋院の徒然母宮―狹衣の母前齋院―女二の妹、嵯峨に住む、若宮の預り人いかでか―斯う若宮を引留め置くは宜しからず大人びさせ―若宮が參り仕うまつり―前齋院へ狹衣が思ひなき仲らひ―親しき中らひ、夫婦の關係さてこそ―前齋院と夫婦になるのであつた

どは思ひやるべし。たちあかしの晝よりもあかきに、若宮の御直衣などあざやかにしたてられ給へる、おとなしき御樣のゆゝしさを、誰も〳〵涙を流して見奉るに、大將の御心のうちは、いとゞかき昏され給ふもいま〳〵しく、せきわび給ひぬ。その夜の事も書きつゞけまほしけれど、なか〳〵にもやとて漏しつ。

その後は、若宮をば母宮、見奉らでは片時もいかでかはと、樣惡しきまで御目放ちがたう思ひ聞え給うて、更に返し渡し奉り給はず。前齋院の御つれ〴〵も心苦しう、大將は推しはかり聞えさせ給へば、狹「いかでか」などおぼし宣へど、大殿も、「大人びさせ給ふまに、餘所々々にては、おのづから心より外に、疎にもありぬべし。又いとつれ〴〵なる慰にも」など宣ひて、ゆるし給はねば、いとほしさに、かくて後ぞ、いとねんごろに參り仕うまつり給へば、御後見達も、まめやかに有難かりける御心かなと、嬉しう聞ゆるにつけても、などか、今少し思ひなき中らひにても、見あつかひ聞え給ふまじき、と思ひけり。大將の御心にも、同じうき世の有樣ならば、さてこそあるべかりけれ、こま

參り給ひて―狹衣が前齋院へかく定まり―狹衣の綾も定り何のわづらはしく―餘計な事に此方ばかり氣をもむ事はなし樣にあはぬ―時宜に叶はぬ思しわくには―何と分別しての事ではなく餘りならむも―餘りに引込み過ぎたるも惡しかちん いとほしき御心ざま―狹衣の美しき心も知り居る故さにやと―前齋院にやと さこそは―以下狹衣の心、強ひて懸想もせざりしが、餘り女二も女三も色氣がなさ過ぎたり

かなる、御かたちなどや如何ならむ、大方の御有樣は、いとあてにけ高きものから、筋ことなる御有樣どもを、など今ぞおぼし寄りける。黃昏時のたど〳〵しき程に參り給ひて、狹「若宮さへうつろはし奉りて、いとゞまぎれ難からむ御徒然を、推しはかり奉りながら、御殿居も、心より外にこそ怠り侍れ」など聞え給ふを、女房達「今はまいて、かく定まり給ひぬるを、何のわづらはしく、われしも心ときめきし顏にやは。有り難き御心ばへを、あまり若々しう、おぼし知らぬさまなるも、かへりて樣にあはぬやうにや。嵯峨の院も、さこそいづれをも聞えさせ給ふめれ」と、集りて聞えさすれど、いかにも思しわくにはあらで、唯世に知らず恥かしげなる人にいかでか、といとつゝましう思されて、わざとは宣はせねど、け近き程に參り給ひつる折々は、げに餘りならむもいかゞと、いとほしき御心ざまも御覽じ知らるれば、ほのかなれど、さにやともり聞ゆる御けはひ、唯入道の宮の同じさまにやと覺ゆるに、ものあはれにおぼし出でられ給ふ。さこそはあながちなる心も遣はざらめ、もて離れたりける御宿世どもかな、心ゆかずながらも、今

隱蓑―女二宮に忍び入りし事　心おくれたりし―不注意に落し置きたる懷紙　御あひずみ―女二と前齋院と同居の間に空言など―我が一品宮に關する濡衣を干して呉れる人がなぜ無かりしぞ　おなじくば―同じ濡衣を著るならば、女二宮の爲に著たし　院は―前齋院は

九 狹衣飛鳥井姫君の縁によりて小宰相に親み、一品宮に疎しおぼし睦ぶる―狹衣が

日まで見奉る人はなくやはありける、遁れ難かりければこそ、思ひかけざりし濡衣さへ乾しわびて、誰も〳〵かくおぼしなりにしか、過ぎにしかたの隱蓑を、見あらはす人のなかりしこそ、さるはかの心おくれたりしふところ紙のついでは、もて騷がれぬべかりけるものを、よしやそは、然るべき長き世の物思となりぬべかりける宿世にてやみぬとも、この御あひずみの程に、などかは空言などいふ人はなかりけるぞ、と過ぎぬるかた悔しき御癖は、さしもあるまじき事さへ取り返しうち歎かれて、

狹　おなじくば著せよなあまの濡衣よそふるうらににくからずやと

何となくいひ消ち給へるは、人聞き知るべうもあらねど、院は少し心得させ給ふらむ。されど聞き知り顔ならむもつゝましければ、いとど奥深うならせ給ひぬるも、飽かずおぼさるべし。

誠かの常磐の尼君の女は、長門のにはあらざりければにや、小宰相とて、心ばへ容などなべての若き人よりは目やすかりければ、昔の友とおぼし睦ぶる方もこよなくて、事に

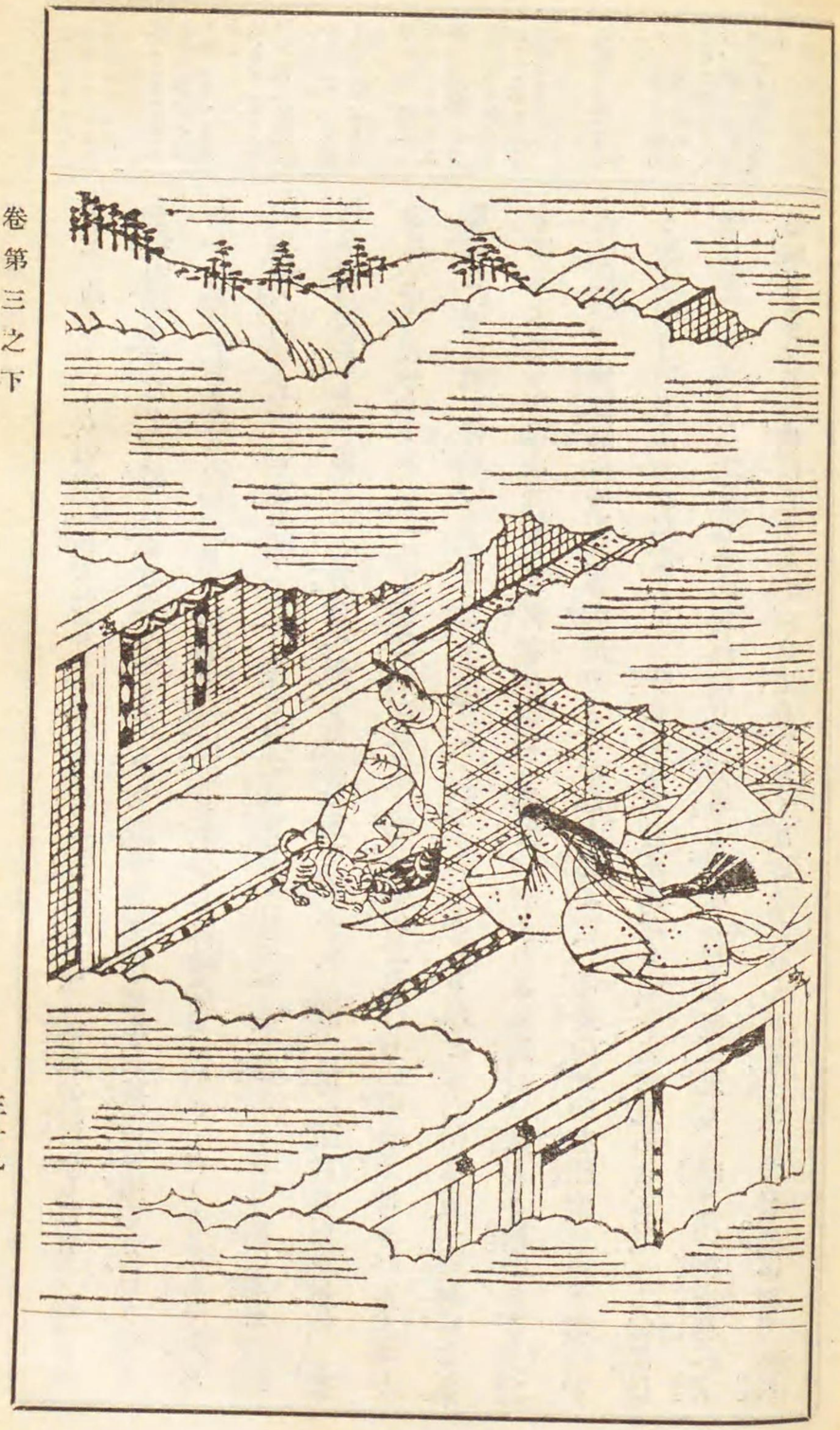
よそひ見せつゝ―故姫君に準じて親みつゝ過ぎにし人―故姫君　何方ざまにつけても―どの方面の關係につけても、我を餘所にする狹衣の心はかはらずと　宮―一品宮　見えむも―狹衣に見られるも　見奉らせ給はず―死後　見入れさせ―狹衣の行爲に干渉せず　山鳥の樣にて―夫婦かけ離れて

觸れつゝよそひ見せつゝ、なつかしう語らひ給ふを、姫君を思ひ聞ゆる方樣には、いかがはおろかに思ひ聞えむ、過ぎにし人の事なども、いとど耳とまり給ふばかり、聞えさする折々などのあるを、忍びあへぬ氣色にて、おなじ心に語らひ給ふを、おのづから氣色見る人は、安からず言ひさゝめくを、何方ざまにつけても、おなじ心なりけりと、宮は心づきなく思召さるれど、かゝるかたの物憎みして見えむもいと恥かしく、わが心の中には事違ひたるべし。唯今日明日にても、女院の見奉らせ給はずなりなむ後にこそは、身をも如何にもなしてめ、と思しとりて、いかにも見入れさせ給ふ事なくて、たゞ明暮行よりほかのことなし。夜もわたらせ給ふ事なければ、唯山鳥の樣にてぞ明し暮し給ひける。

狹衣物語　卷第三之下

あらぬ所とおぼし慰み給ひし一條の宮にも、若宮のおはしまさねば、隱れ所なくて、若宮にことづけ給ひて、殿がちにのみなり給ふを、内裏に聞かせ給はむこと、いみじう便なき事に、大殿の聞えさせ給へば、大方世になありそと思したると、むづかしければ、齋院に參りて隱れゐ給へり。常の冬よりも、雪霰がちにて晴間なき空のけしきも、いとど所がらはしめやかに物心細くて、參り給ひぬれば、又何事よりも忍ぶもぢずりは、樣異に亂れまさり給ひぬべし。御前の方を見やり給へば、ちひさき几帳を引きよせ給へれば、はかゞしくも見えねど、御衣の袖口などは隱れもなし。蘇枋の御衣どものいと濃きより、薄く匂ひたる上に、唐の浮線綾の、白きやうなる籬の菊の枝ざしより始め、うつろひたるにも、色々に織り浮かされたるも、例の事ぞかし。されど人がらには、げになべてならずあなめでたと見え、御髪の、肩の程よりこぼれ出でたる、御額髪の、袖口

一堀川大臣狹衣の一品宮に疎きを貫む、狹衣逃げて齋院の方に隱る
おぼし慰み―狹衣が殿がち―狹衣が堀川邸にのみ居る
内裏に―帝に聞えては濟まぬと
齋院―源氏宮
忍ぶもぢずりは―源氏宮に對する紫は御前―源氏宮
例の事―ありふれたる事



まで、ゆるゝと引かれ出でたるも、さまことに見ゆるに、御衣の裾にもたまりゆきたる裾の削ぎ末など、繪に畫きたるやうなるも、斯うしもなきを、萬に口惜しき目うつりの、いとゞしきなゝめりかし。いとゞ外様にも見やられ給はず、つくゞくとまもり聞え給ふ御心のうち、いと口惜しく、憂き身の宿世思し知るべし。殘なくさし向ひ聞えし折何事思ひけむと、過ぎにし方さへ戀しく思ひ出で給ふに、御懷に寢たりける猫の、起き出でて、はしざまに出づる綱に引かれて、御几帳のかたびらの引き上げられたるより見合せ給ふに、御顔いと赤うなりながら、わざとひき入りなどもし給はず、御扇にまぎらはして少しかたぶき給へる御かんざし、御髪のかゝりより始め、久しう見奉らざりつるけにや、猶様殊にめでたき御ありさまかなと思ふに、心憂の身の有様や、などか、いとかばかりの事こそかたからめ、少しもなずらふばかりの、よせ見るまじき、もの思ひ知らず、いはけなかりしそのかみより、何事も斜ならむ人をば見じ、唯この御有様に劣る宿世あらば、世にもあらじ、と安き空なく思ひくだけし心の中は、など露ばかりも叶

斯うしも―狭衣の目に映ずる程の美しさでも無きに
いとゞしき―餘計に美しく見ゆるなるべし
外様にも―餘所見する氣にもならず
殘なく―隱れる所もなく差向ふ事の出來し時分
見合せ―狭衣と源氏と顔を御顔―源氏が
心憂の―狭衣の心
かばかりの事こそ―源氏程の女こそ得難からんが、似た女位は得られそうなもの

ふ事のなかりけむ、いでや、わが心の、萬にいふかひなく、男々しき心のなくて、親にもひとへに任せられ奉りて、心づからいとかう憂き世にも長らふるぞかし、と思ひつゞくる、身より外につらき人なくて、例の脆き涙のみぞ、理知らぬものなりける。紛らはしに扇をうち鳴らして、猫を、狭「こち〳〵」と宣ふに、寄り來て、らうたげなる聲にてうち啼きつゝなづさふ移香も、身に添へまほしくなつかしければ、袖より隔てなく入れ給へるを、喜びてむつるゝ、いと美しうらうたし。くね〳〵しく侘しき目を見るよりは斯くてこそあるべけれ、とおぼされて、狭「この猫は暫しあづけさせ給へかし。人肌につくるよりは」と宣ふを、宣旨といふ人打笑ひて、宣「今さへはなでふ人肌をば尋ねさせ給ふはと、おとなしき御扱をさへこそせさせ給ふなるに、猫は所せうこそはおぼえ侍ら め」と聞ゆれば、狭「更なりや、岩間をくゞる水だにも漏るまじければ」とて、うち笑ひ給ふものから、いとかゝる心のうちも、今は知らせ給はねば、思ひ直りて、いつしかとあるべかしきゆかり睦をさへして、もてあつかふと思召すらむかし、おなじ様ながらだ

斜ならむ―つまちぬ女は娶るまじ
この御有様に―源氏に劣る女を娶る位ならば出家して仕舞はんと
なづさふ―寄り添ふ
くね〳〵しく―面倒なつらき思を尋ねさせ給ふは―誤あるべしを―一品宮が所せうこそ―結局御邪魔なるべし
岩間をくゞる―一品宮とは水も漏さぬ中なれば知らせ給はねば―源氏宮が思ひ直りて―源氏に對する戀をやめていつの間にか一品宮とよい中になりしと源氏は思ふならもんなじ樣ながら―此戀叶はずば出家せねば御目にかゝらじと源氏に言ひたりし

に知らせ奉らじ―「知らせ奉りし」の誤なるべし

かつ見れど―源氏に逢ひても我は此世に在る身とも思はぬに、源氏は相變らずと我を思はるゝならん

參りて―源氏の傍へ

㊁狹衣飛鳥井姫君の爲に法會を修す、其夜飛鳥井の舊宅に假寢して姫君を夢見、又遺題の歌を見る

常磐の事の果―飛鳥井姫君の忌明の法事

七僧―貝散花などを司る七人の役僧

讀み給へる―講師が

に見え奉らじと、聞え知らせ奉らじものを、と恥かしういみじとも世の常なり。御前なる人々の、繪など畫きちらしたる筆ども見ゆるを、とり給ひて、紙のはしに、

狹　かつ見れどあるはあるにもあらぬ身を人の人とや思ひなすらむ

手すさびのやうに、片假名に書き給ひて、懷なる猫の頸綱に結びつけて、人少し立退きたるに、狹「あな寢ぎたなや。今は起きて參りね」とおしいで給へれば、聞き知りがほに、外樣へもいかず、參りて睦れまるらするぞいと羨しきや。

年の果になりては、彼常磐の事の果せさせ給ひけり。御志のしるしには今は何事をかは、とおぼせば、經佛の御飾なべてならず。まことに日の中に佛道なりぬべき樣に思しおきてたり。その日は、いみじう忍びてみづからおはしぬ。講師は山の座主なりけり。請僧は六十人、七僧なども、なべてならぬをぞせさせ給ひける。常の法の詞といへども、思しおきてつる人がらにて、一乘の法文勝るゝわざにや、願文の心ばへ泣く〳〵讀み給へるも、涙流さぬ人なきに、いとど大將殿は、直衣の袖もえ引き放ち給はず。さるは人

誰ならむ―今日の佛は一體誰ならん

みづから―狹衣

ありしながらの―故姫君が存生中の通りの姿にて

目もあまり心弱くやとつゝみ給へど、唯うち聞く物語、古き歌などだに、わが思ふすぢなるは、こよなく目とまりて哀なるわざなればなるべし。見奉る限の人々、僧なども、誰ならむ、いと斯ばかり思されたりけるは、げにいと口惜しかりける命の程かな、と見驚かぬ人なし。さま〳〵いとたふとき事どもは多かれど、なか〳〵えまねばねば、いとかひなし。事果てて僧どもなども皆まかでぬれど、みづからは留り給ひて、尼君に逢ひ給ひて、姫君の御有樣など語り給ひて、盡きせずあはれと思したり。入相の鐘の音ほのかに聞えたる夕暮の空の氣色も、所のさま言ひ知らず心細げなるを、すだれ捲上げてつくづくと眺め給ひつゝ、行ひすまし給へるけはひ、いみじうあはれなり。曉近くなりぬらへとおぼゆるまで居明したまひて、あまり苦しければ、やがて端つ方にうちまどろみ給むるに、唯ありしながらの樣にて、傍に居てかく言ふ。

亡靈　暗きより暗きにまよふ死出のやまとふにぞかゝる光をも見る

といふ樣のちうたげさも珍しうて、もの言はむと思ふ程に、ふとさめて見あげたれば、

見え渡されて―「見わたされて」なるべし

芳野の山本―前に故姫君のよみし歌

枕は浮きぬべければ涙に皆如金色云々―法華序品の句

佛だに―初瀬にて普賢菩薩のあらはれし事

誦經―布施をやる事

はるゞと見え渡されて、月のみぞ仄に、うつりける雲のはたてまで、殘りなくさやかに澄み渡りたる空のけしき、唯の寢覺だに物心細かりぬべき程なるを、ありつる面影は唯うつゝに覺え給ひて、見まはされ給ふを、人々はみな遠く退きつゝ、いとよく寢たり。獨つくゞと空をながめ給ひつゝ、泣くく越ゆらむ死出の山路まで思しやらるゝに、かの芳野の山本恨めしげなりし樣などの、何となくなつかしうをかしかりしも、唯その折の心地し給ひて、

狭　おくれじと契りしものを死出の山みつせ川にや待ちわたるらむ

と思しやるにも、枕は浮きぬべければ、起き給ひて經をぞよみ給ふ。「皆如金色從阿鼻獄」といふわたりを心細げによみ流し給へる、いひ知らず悲しきに、寢たりける人も驚きけるにや、こゝかしこに、鼻うちかむものあり。佛だに現はれ給へりし御聲なれば、人はまして忍び難かりけり。

明けぬれば、所々に誦經などしにつかはして、今日は歸りなむとし給ふ。昨日しつらひに、よろづ取拂はれたるを見給へば、常に居たりける柱に物ぞ書かれたりける。

居たりける―故姫君が

故姫君　頼めこしいづら常磐の森やこれ人だのめなる名にこそありけれ

同　言の葉をなほやたのまむはし鷹のとかへる山はもみぢしぬとも

しひしば―前に狭衣が姫に贈りし歌

などぞあるは、かの「しひしば」とありしを忘れざりけると見給ふは、いかゞは哀に思さざらむ。こゝちなど苦しう覺えける折の手まさぐりにや、臥しながら書きたると見えて、下の方に、その文字とも、はかゞしう見えぬさまにて、

故姫君　なほたのむ常磐の森のまきばしら忘れなはてそ朽ちはしぬとも

とあるにも、夢の面影さへ立添ひて、更にえぞおぼしすまされざりける。

夢の面影―昨夜夢に見し姫の面影が目先にちらつきておぼしすまされし―心を靜めがたし

狭　寄り居けむあともかなしきまきばしら涙浮木になりぞしぬべき

知らせ給はで―父母が知らずしてあへなむ―丁度よからん

とて、とみにもえ立ちも退き給はぬに、殿より尋ねて奉らせ給へる人々參りて、人々「昨日今宵など、おはしまし所知らせ給はで、夜もすがらおぼし騷がせ給へる事」など申せば、狭「あへなむ。さて懲りさせ給へかし、餘りむづかしう宣はするに」とはつぶやき給

ひながら、今日さへ音なくて暮し給ふべきならねば、出で給ふにも、眞木柱はいと顧みがちに思されけり。

年返りぬれば、今年は齋院渡らせ給ふべしとて、本院造り磨かせ給ふに、大宮わたりの賤が垣根まで、心ことに思ひまうけて、おなじ板檜垣などいへど、ほど〳〵につけて用意加へたるは、げに情こよなし。今年の賀茂の祭は、今より様ことに、世の中ゆすりて思ひ營むは、いかなるべきにか。その日は一條の大路、わたり給ふべききはの高き賤しき家々の内、思ひいそぎたる牛車、隨身、小舍人、雜色の姿も、馬鞍、うす大くち、馬添の裝束飾を、いかで世に珍しく人にすぐれてと思し營むをばさるものにて、さるべき宮々、又人數に少しも我はと思ひ給ふ所には、たちあがる人々は、物見給ふべきいだし車の袖口、わらはべの姿、けいし、葵の飾をさへ、めづらしうと心を盡し給ふさまども、中のしなの程だに、一條の大路にさし出づべき所もなくやと聞ゆるに、遠き田舍の民どもも、苗代水の行末を知らず、早苗引き植うる田子の裳裾どもも、みな川上にさら

賀茂祭の用意、齋院賀茂川原の御祓
本院―齋院の御所
大宮わたり―大宮通り邊
うす大くち―未詳
けいし―柱枝鯨
苗代水の―苗代に引く水の事も構はず
川上にさらす―當日の用意に

すを役にして、物見む事をいとなみけり。まして都の内の賤の男は、道大路の行きかひにも、明暮の身のいとなみの苦しげさに添へて、いひ歎き思ひまうくるなり姿は、いかならむとすらむと心もとなし。

殿の中にも、いつしかとこの御營をこそは思しまうけしに、限あれば、はえなき御有様さうぞくしき事をば、人々もつれぐに思ひたるに、この折にこそは、物の淸らを盡して、神さびにける様にはあらず、めづらしう人の見思ひつべからむ様に、と思しおきつれど、何事も限ある事なれば、白銀黃金をうちかさね、高麗もろこしの錦をたち重ぬとも、目なれぬやうはあるまじきぞくち惜しかりける。世の人の、いと事々しう言ひ思ふらむしるしには、いだし車の數など例にはまさりたらむを見よかしとて、やがて女房のさぶらふ限を、引き續くべうぞおぼしおきてげる。やむごとなき人々十人ばかりは、女別當などのおなじ絲毛にて、今四十人、わらは八人乘るべき車は、所々にすきとほりて、隱れなうめでたうして參らすべきよし、受領どものあたりて、我も〳〵と心を盡し

少しも美しくせんとて衣服を洗濯する也
殿の中―堀川邸
絲毛―絲毛車
あたりて―割當てられて

たる、げに如何にめでたかりけむ。狹「近衛づかさの使の、年に一度爲出でたるをだに、その日の見物にはそれにまさる事やはある。かばかり挑みかはして爲出でたらむ透車に、なまよろしからむ頭つき、さまかたちにて乘りたらむは、まばゆかりぬべきわざかな」と、今より大將殿の明暮言ひはやし給ふに、若き人々はまめやかに侘びまどふぞ、理なるや。さるべき人々の女どもの、心のまゝにかしづき立てて、親兄などにだに、絶々にさしむかふ事もせず、帳の内、母屋にだに、ちひさき帳を身放たずなど習ひたるは、唯簾上げて、晝なかに一條わたらむだに、いと侘しかりぬべきわざなるを、まして扇などさへ隱れなくのみしなされたれば、まめやかに泣きぬばかりなる氣色どもぞ多かりける。

御禊の日にもなりぬれば、つとめてより大殿立ち居急がせ給ひて、堀川「人の上にて見るだに、日のいたう暮るゝは心もとなきに、遲し〳〵」とのゝしり給へば、常より殊に事ども疾く成りて、出し車ども寄せて載せさせ給ふ。わりなしと思ふ〳〵ゐざり出でたる人々

絶々にさしむかふ―稀に面をあはする事もせず

隱れなく―扇にて面を隱すことさへ出來ぬ樣にされたれば

のかたち有樣、げに年頃みそぢ餘り具したらむを尋ねさせ給へるしるしは、こよなく見ゆれば、心ことに世に聞ゆる透車のすきかげ、心やすく御覽じ渡す。衣の色ぞことに珍しからねど、長き世のためしとおぼしめすにや、松の深綠を、いくつともなくうち重ねたる多さはこちたし。おなじ色のさうかんの表著、藤の浮線綾の唐衣に、「松にとのみも」と縫ひものにしたり。裳は青き海部の浮線綾に沈の岩たてて、黃金のいさごに白かねの波よせて、ひたれる松の深綠の心ばへをぞ縫ひものにしたりけり。わらはは、おなじ色にて、うへの袴、汗衫など、女房の裳唐衣などの同じ心にてぞありける。言葉に書き續けたるはいと見所なう、これやいみじかりけるとて、もどき笑はれぬべけれど、その折車引きつゞけられたりしは、なほ常よりは見所こよなしとぞありし。何色も、いひ續けたるよりは、そめがら淸げにあるぞかし。おなじき綾織物、擣物などいへど、淸らはことの外に、おなじ者のしわざとも見えずとこそはあれば、かく書き續けたるよりは、見るはめでたくこそはありけめと思ひやるべし。御車はからのか、例よりは小くて、珍

みそぢ餘り―「みそぢ餘り」なるべし、三十二相揃ひたる女を擇び集めたるの心なるべし

心やすく―堀川が是なら恥かしからずと安心して

さうかん―金銀泥にて畫きたるをいふとぞ

松にとのみも―「夏にこそ咲きかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひける哉」

海部―海邊の樣の畫

沈―沈香

これやいみじかりける―何の是が珍らしかつたのかと

御車―齋院の車からのか―誤あるべし

上の―堀川の北方、源氏宮の母方
やゝましげに―惱ましげに

なほかくまで―狹衣の心
いでや―狹衣の心
立ちも離たず―源氏宮の事が始終心にかゝるならば

しう美しき樣こよなし。殿、大將殿、御几帳の左右をおさへて立ちたまへるに、上の萬につくろひつゝ載せ奉り給ふにも、猶やゝましげにおぼしめして、頓にもえ奉りやらぬを、大將殿帳のそばより少しのぞき給へれば、唐撫子の三重の織物に、同じ色の三重の小袿著させ給ひて、笄子さゝせ給へる元結に、御額髮のうち添ひてなよ〳〵と引かれ行きたるは、いとどもてはやされて、なまめかしうめでたう見えさせ給ふにも、心まどひは先づして、なほかくまで見なし奉りつるよ、あなくち惜し、と覺ゆるを、神もいかに御覽ずらむ、いでや、かうのみ流石に立ちも離たず覺えば、更にはか〴〵しからじとぞ、自らだにことわられ給ふ。

御車引き出づれば、上も物御覽じて、やがて本院へ渡らせ給へば、又御車よせて奉りぬ。かねて聞きしにたがはず、一條の大路つゆ隙なく、河原まで立ち重りたり。車棧敷のおほきなど、すべて徒歩の人かしらさし出づべうもなきに、かしこく身のならむ樣も知らず、おなじ上にかさなりたる樣いと侘しげなり。さるべきところ〴〵の棧敷の有

出し立て―銘々支度をさせて出したる家内の忙しさは如何なりしかと

㊃狭衣歌を齋院に贈る、齋院省みず

歸らせ給ひて―賀茂の本院に今は斯うて―齋院の心、今からは斯くの如くにして生活するのぢや

様、物見車の袖口などまで、げにかねて聞きしにたがはず、目もかゞやく事のみ多かり。まして御供の人々、例の數よりも多かり。おの〳〵出し立て急ぎつらむ家の内、げに如何なりつらむと見えて、めでたき年のみそぎの有様なり。河原におはしまし著きたる有様など、例の作法にも事添ひて、長き世のためしにもと、何事もめでたう見所多かり。宮司參りて、御祓仕うまつるは、いと神々しう物恐しう聞ゆれど、大將はひるの御有様のみ心にかゝりて、

狭　みそぎする八百萬代の神も聞け我こそしたに思ひそめしか

などおぼすは、うしろめたき御兄の心ばへなりかし。

歸らせ給ひてはいと苦しきに、誰も皆やすみ過して、又の日疾く起きさせ給ひて、めづらしき院の有様を御覽じ渡すに、いと狭うて、はるゝ方なきこゝちせさせ給ふも、見ならはぬ様にいぶせうぞ御覽ぜらるゝ。今は斯うてこそはと、行末遠く覺えさせ給ふにも、廣うおもしろかりつる殿の内の池、山、木立のけしき、又は見るべきやうもなきぞかしと、戀しう思し出でらるゝに、御前に流れたるは、有栖川となむいふと聞かせ給ふにも、

齋院　おのれのみ流れやはせむ有栖川岩もるあるじ今は絶えせじ

など契り深く御覽じやりて、東面の母屋の中柱に寄居させ給へるようだい、御髪のかかりなどは、繪に少し畫き似せても、人に見せまほしき。折しも、大將殿、上のおはします北の對の南の戸口より、すみの間の妻戸のみすを引きあげて參らせ給へるに、御障子の開きたるより見通し參らせ給へる、なほいと忍びがたくて、榊をいさゝか折り給ひて、少しおよびて參らせ給ふ。

狭　榊葉にかゝる心をいかにせむおよばぬ枝におもひ絶ゆれど

見だにかへらせ給はぬぞ、いみじう恨めしきや。

祭の日の事どもなど、例の作法なり。近衛づかさの使は、おほき大臣の御孫の少將ぞかし。權大納言の御子よ、いと若う美しき御さまにて參りたまへるに、やがて内裏の文つけさせ給へりければ、南のすみの間の戸口より取り入るゝ袖口思ひやるべし。上御覽ず

おのれのみ―今より有栖川のみ獨り流れじ、我も幾久しく汝と共に栖まんと也

上―母宮

見通し―齋院をおよびて―及びごしにて

榊葉に―とても及ばぬ戀とあきらめても矢張思ひ切れぬを如何にすべき

㊄賀茂祭の當日の樣、その夜狭衣齋院を見るおほき大臣―太政大臣

我身にぞ―祭のしるしに人は奚をかざせども、君が我に逢ふ日は今は無くなりぬ

置口―へり取り

身の大事なから―むは―棄て置かれぬ用事のなきは歸る者なし

れば、

帝　我身にぞあふひは餘所になりにける神のしるしに人はかざせど

葵がさねの紙の、なべてならぬ色膚など、さらなる事なり。今日は御返あるべきならねば、御使も立ち給ひぬ。出し車ども、けふは春夏秋冬の花のいろ〳〵、霜がれの雪の下草までの數を盡して、十二月まで色を盡させ給へる、表著、裳、唐衣などまで、その色に從ひつゝ、高麗もろこしの錦を盡し、瑠璃をのべ、しろかねこがねの置口をし、蒔繪、螺鈿をし、繪をかきなど、すべてまねび盡すべき樣もなかりけり。この世の人の著るべき物にもあらずぞしなさせ給へりける。御輿の駕輿丁のなり姿まで、世の例にも、まことに書き置かまほしげなり。渡らせ給ふほどは、そこら廣き大路、世にも知らず芳しきに、われはと思ひたる數多の車どもの、榻おろさせて過ぎ給ふは、なほいとけだかし。御社に參り著かせ給ふ有樣など、例の事にて思ひやるべし。殿もやがてとまらせ給ひぬれば、いづれの上達部殿上人かは、おほろげの身の大事なからむは歸り給ふべき、若上

唯こゝもとに―「誰が里に夜がれをしてか時鳥たゞこゝもとに寢たる聲する」うちしはぶく―「うちはぶく」の誤なるべし、はぶくは羽だたきする事

御前―齋院の御前

思ふ事―自身を郭公に比したる也

語らはば―こゝにて語らば神も納受あるべければ、殘らず打明け給へ

達部などは、土のうへに、かたの樣なる御座ばかりにて、よもすがら女房達と物語しつつ、明くるも知らぬさまなるに、京には音もなかりつる郭公も、齋垣のわたりには聲馴れにけり。若き人々の耳とゞめぬはいかでかはあらむ。内にも外にも言ひかはす事どもあるべし。されど、ひとり二人が事ならばこそ書きもとゞめゝ、皆ながらはうるさければ止めつ。

吹き渡したる川風のおとなひも、今少し物心細く、草の枕は、いとゞ露ばかりもまどろまれぬに、唯こゝもとに寢たる聲して、うちしはぶくなり。大將殿御前近くさぶらひ給ひければ、

狭　思ふ事なるともなしにほとゝぎす賀茂の瑞垣たづね來にけり

と獨ごち給ふを、女別當、

女別當　語らはば神も聞きてむほとゝぎす思はむかぎり聲な惜みそ

明け離るゝ山際なども、外には似ずをかしきを、若き人々は、をかしう思ふ事限なし。

おはします御あたりにて―齋院の身邊には御屏風位があるのみにて倒れさわぐ―屏風が萬の人に唯向ひたる―この本院の室内は明けはなしの樣にて常に多くの人に差向ひ居る樣なれば車にても―車の内にても見通さるゝは此室内にかはらず うちつけに―此詞心得がたし、誤あらん歟 杜の下草―我如き老人の相手にされぬこそつらしと也、「大荒木の杜の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」 光るやうに―齋院が

萬はさすがに例なからむ事はいかゞと恐しさに、古き跡を尋ねさせたまへば、おはしまし所の、唯かりそめに物はかなき御屏風などばかりを、おはします御あたりにて、あらはなるに、風さへほかにも似ず物さわがしうて、倒れさわぐを起しあつかふを、大將殿はのぞき給ひつゝ、狹「いとあらはなるわざかな。おはしまし所ばかりは、なほ例にも違へばや。齋院こそ、なまよろしうおはしまさむは惡しかりぬべけれ」とて、つくろひあり き給へば、大人しき人々、「かやうのさだ過ぎたる樣などにては、さし出でにくゝ侍りけり。萬の人に唯向ひたるやうなれば、この若き人々だに、何しに車おりつらむとわび惑ひけり」と聞ゆれば、狹「そは、車にてもおなじごと隱れなかゝめり。されど、いとうちつけにわび恨みかくる人々もあゝめれば、たゞ心安くおほせ。杜の下草こそからきわざなゝめれ」とほゝ笑みて見おこせ給へる御まみの恥かしげさには、何事かはまさらむとぞ見えたる。例ならず花々しき所にては、いとゞけざ〳〵と光るやうに見えさせ給へるに、いとちひさき葵を御髮につけさせ給へる、いひ知らず美しう見えさせたまふに、例の過

過しがたうて―狹衣が見るたびに―葵には逢ふといふ名あれば見れば心を惑はす也、されば其名をさへ今は忘れたし 思しもかけず―不意の事故齋院が少し顧みたる也 隈なき所―この院をいふ 端つ方―端の方に出て居る 物恐ろしければ―狹衣の感じいでや―以下狹衣の心 かくぞと―齋院になる事が確になりし時に世を遁れたらば斯る苦勞がなくて なほ斯くても―此通りに我慢し通す譯にはゆかぬ よそにやは―今更他人になる譯はなし、もとが兄妹同樣の中なるものを

しがたうて、御几帳など引きつくろひ給ふまゝに、

狹 見るたびに心惑はすかざしかな名をだに今はかけじとぞおもふ

とて御衣の袖を唯すこし引き動かし給へれば、思しもかけず少し見かへらせ給ひつる御顏の、隈なき所にては、いとゞ千歲を經てまもるとも飽く世あるまじう、なのめなる所だに無き心ぞいと悲しかりける。物見るとて、人々もみな端つ方なる程なるべし、け近きもさすがに物恐ろしければ立退き給ふぞ、いとくち惜しきや。いでや、かくぞと見定め奉りし折など、身をあらぬ樣になして消え失せましかば、斯うのみぞ心盡しに侘しからで、今はやう〳〵思ひ忘れもしなましものを、なほ斯くてもあり果つまじかりけり、とぞおほしなりぬる。事果てぬれば、狹「かのありし御返り聞えさせ給へ」とそゝのかし聞えさせ給へど、齋院「いみじく苦しければとて、やがて臥させ給へれば、母宮「おぼつかなからむやは」とて、上ぞ聞えさせ給ふ。

母宮よそにやは思ひなるべきもろかづら同じかざしはかけも離れず

かづらに著けさせ給へり。御覽ずるにもなほ口惜しき御心のうち絶えず。

女御御息所あまたさぶらひ給へど、いづれもすぐれて時めき給ふもなし。なほ古くよりさぶらひ給ひて、宣耀殿ぞ取りわき給へるさまにものし給へど、皇子のいかにも〳〵おはしまさねば、今まで后にも居給はぬなるべし。御年もやう〳〵三十に餘らせ給ふに女宮たちだにおはしまさぬを明暮の御歎にて、嵯峨院の若宮を、などかあづかり聞えむ。ざりけむ。さりとも大將の、わが物に思ひ聞えたるも羨ましく、げに中々の國王よりはめでたき人の、よすがとなり給へる、げにいとあらまほしけれど、自らのありさまもただ人にて見るは、いと心苦しうあたらしき心地するに、又おなじ樣にて立ち添ひ給へらむよりは、など宣はせけるを、嵯峨の院にも聞かせ給ひて、嵯峨「齋院の御あつかひにとおぼしてこそ讓り聞えしか。その本意たがひにしかば、今はげに然らでもありぬべかりしかど、いづれの御爲にもあり難き心の程を。今はと改めむも輕々しきやうにぞありぬべき。いでされば、何事も唯然るべきにこそあらめ。まして帝に居給ふべきにては、人

大 狭衣前齋院を世話して入内せしむ、弘徽殿女御と稱す　嵯峨院の若宮―女二腹の狭衣の實子、以下宣耀殿女御の心中々の―なまじひの國王よりは優れたる狭衣が、若宮の後見となりたるは結構なれども自らの―自身も平人として置くは惜きものなるに　あなじ樣にて―若宮も狭衣と同じ境遇に立つよりは、宣耀殿に養はれて行々は春宮にも立つ方然るべし　齋院の―若宮を齋院の一體齋院の養子にする積なりしに　然らで―狭衣に世話させずとも　よき譯なれど　あり難き心―狭衣が折角親切に世話するを改めて世話するは輕卒なり　帝に居給ふべき―帝位に居る居らぬは人力のよくすべきにあらずさらで―「されば」の誤か　かくる人―入内せしむべき娘　前齋院―一條宮　嵯峨の院の御志―我に女二又は女三を賜はらんとせられし嵯峨の御寵遇の厚かりしに、色々の故障にて遂げざりしは遺憾なれば、其代りになる可くは前齋院を世話して入内せしめたし　げに若宮の―堀川の心　齋院のさて―源氏宮の齋院になちずに居ると思ひて世話せん

のもてなしにより給ふべきにもあらず。さらで、なま宮腹にてうしろむる人なからむよりは、大將に任せたらむに、あしうもあらじ」などぞ宣はせける。

男皇子おはしまさぬ事を、世の人ども心もとなき事にいひ思ひて、女ども持ち給へる人などは參らせ集め給ふを、大殿はいとうらやましう、今更に　堀川「かゝる人の少なうおはしける事」と歎き給へば、大將は、前齋院の御事を聞え出で給ひて、狭「昔より嵯峨の院の御志あり難うおぼえ給ひしかど、樣々かひなきやうに御覽ぜられてやみ侍りぬる代に、おなじうはさやうにても、かひなかりける心の程を見え奉らまほしう」など聞えさせ給ふを、げに若宮の御有樣などを見奉り給ふにもありがたき御心ばへぞかしと、かかる御おとな心を、うつくしう思ひ聞え給へば、堀川「我もいとつれ〴〵なるに、齋院のさておはしましゝと思ひなして、あつかひ聞えむ」と宣ひて、嵯峨の院にも、堀川「かやうになむ大將のすゝめ侍る」など、聞えさせ給ふを、いかでかおろかにおぼし喜ばむ。御後見なくては、さやうの御交ひあるべきならねば、よろづ心苦しく見置き聞えさせ給

行くへまで―「行末まで」の誤なるべし　心ゆかざりつる―今迄合點ゆかざりし前齋院の附人等も、狹衣此了簡なれば、こそ今迄手を出さずに居たりしなら思はずにならせ―不慮の成行になりしにより―不審

ちなじ枝―女二の姉なる前齋院を娶ぢ自らの心―前齋院自身は年來神に仕へて佛に遠ざかりたれば出家したしと深く思へど外にて―心外ながら入内せり

思ひ放ち給へる親心―前齋院を狹衣が手放したれども内心は如何ならんと優れ給へれば―弘徽殿がひ聞え―あつかひ川がみづかから獨―弘

へるを、かうまで思ひ寄り給はむ大將の御心ぞ、行くへまでいと頼もしくおぼしめさる。心ゆかざりつる御後見どもも、かゝる心にてけざやかにて過し給ふにこそ、入道の宮思はずにならせ給ひしに、よりつき喜び顔に、おなじ枝のゆかりに木傳ひては見え奉らじ、と心深うおぼすにこそありけれ、と心ゆきたる人多かり。自らの御心にこそ、年頃罪深きさまなりつるをいかで、と思しつる本意深けれど、よき人の御身はなか〳〵よろづまかせ難かりければ、心より外にてまゐり給ひぬ。

御局はやがて昔の弘徽殿なり。帝もかねては、大將の思ひ放ち給へる親心いかなるにかと、人わろく思しめされしかと、さはいへど、なべてならず心憎き御有樣などは、ことに優れ給へれば、いとやむごとなくあらまほしき御覺なり。嵯峨の院にも、唯大殿に任せ聞え給へれば、まことの御女のやうにあつかひ聞え給へり。大將殿などにも、みづから獨こそこよなうけ遠き御もてなしなれ、女房などはえ恥ぢ聞えず、一つなるやうにて、かの「やすらひにこそ」と悔しがり給ひし槇の戸もつゝましからず、出で入りたまふも、

徽殿一人こそは親しくはせねど―前にある狹衣の歌

ちぼし出づる事―女二宮と同居時代の事

飽かざりし―わが戀の不結果に終りし當時に似た跡もありやと其遺跡を來て見る

一品の宮の―一品宮と同年位と聞きしに

おぼし隔てられじ―弘徽殿に

あはれに思し出でらるゝに、御前のしつらひも、夢路に惑ひたまひしおまし所も變らで、御几帳ばかり隔てて居給へる、御衣の裾などのほのぐ見えたるも、あやしうなべてならず、け高うなまめかしき心地ぞし給へるを見るにも、思ひ出でらるゝ事多くて、狹「このおまし所を見侍るにこそ、實に夢のこゝちし侍る。ましておぼし出づる事も侍らむかし」とて、

狹　飽かざりし跡や通ふといそのかみふる野の道を尋ねてぞ見る

人聞きつくべうもあらず紛らはし給ひて、あはれと思ひ給へる氣色、なほいかなりし事ぞやと思さるれど、

弘徽　いそのかみふるのの道を尋ねても見しにもあらぬ跡ぞ悲しき

とて打泣き給ふにやと聞ゆる御けはひ、ほのかなれど、唯入道の宮と覺え給へり。一品の宮の御おなじ程と聞きしかど、これはこよなく若うたをやかにもやと推量られ給ふにも、悔しき事多かれど、今はかひなきものから、少しもおぼし隔てられじと思ひ給へば、

まめやかにねんごろなる御心ばへをのみぞ見え奉り給へば、有り難うあはれなるものにぞ思ひ聞え給ひける。

程なくたゞならぬ様に悩み給ふを、もしさにやと人々も見奉れど、あまり嬉しき事は、言ひだにこそ出でられざりけれ。殿にも申す人もなきに、上の御前ぞ常にさにやと案内し尋ねさせ給ふを、御後見など、けざやかにもえ申しやらず、さのみもいかゞとて、殿にかくなむと聞えさすれば、驚き給ひて、三月もやゝ過ぎにければ奏せさせ給ふ。上の御こゝち、嬉しともおろかなり。のちの男女にておはしまさむは知らず、いかにもいかにも、まだ御覽じ知らぬ事なれば、珍しうおぼしめす事限なし。おとゞ、大將など、かひがひしき御有様を嬉しくおぼしけり。

大方の世にも、今より様殊にいひ思ひ聞えたるにつけても、大將は、若宮のたゞ人にて入道の宮を、院のとりわき思ひかまじらひ給はむを心苦しうぞ、人知れずおぼしける。しづき聞えさせ給ひしものを、かやうのまじらひにも、さはいふとも、今少しかひ〳〵

思ひ聞え―弘徽殿が　七弘徽殿懐胎悩み給ふ―弘徽殿がもしさにやと―懐胎にやと　上の御前―堀川北方　―秘密にばかりもして居られぬとてかくなむと―北方が是々と堀川に話したれば　のちの男女―「のちの」は「ちご」の誤なるべし　御覽じ知らぬ事―子といふものは事故　かひ〳〵しき―入内早速懐胎あり　しをいふ　八宮の中將己が妹を狭衣に媒せんとす　今より様殊に―御男子ならばやがて春宮にも立ちなどいふ也　入道の宮を―狭衣の心かやうのまじらひ―宮中の交

我ながら―是も罪竟我がつくれる罪ぞと思へば也　つれなう―知らぬ顔で定まり居て―妻を定めて少し聞え知らせて―女二宮に思ふ本意―出家の望　忍ぶもぢずり―源氏宮に對する戀　あくがるゝ―魂の飛ぶを見る時衣の下がひの元に結べば魂を結べばかへるといふ俗傳ある也　宮の中將―後式部卿宮の子　紫苑色の―狭衣の衣裳　人知れず―中將が密に心配し居るわが妹の事　この人の―妹を狭衣の妻にもしたくかけたましひの―狭衣の思はぬ妹なれども差上げた

しき御覽えなどはおはしなましものを、と思すにも、なほ我ながら罪さりどころなき心地するに、われはつれなう、世の常の有様にさへ定まり居て聞き奉るは、いかでなほ口惜しうあるまじきこゝちするを、なほいかで、いみじう胸いたき心のうちを、少し聞え知らせて、思ふ本意とげてやみなむ、と思ひ續くるに、又なほ忍ぶもぢずりは、かこち聞えさせつべく思ひ出でられ給ふもわりなしや。

狭　あくがるゝわがたましひも返りなむ思ふあたりにむすびとゞめば

など手習に書きすさびて、添ひふし給へるに、宮の中將參り給へるに、紫苑色の御衣のなよゝかなるに、草のかうの織物の指貫ばかりを著給ひて、ものあはれとおぼしたる氣色にて、ながめふし給へる様の、いふ方なうめでたう見え給ふにも、人知れず思ひあつかはるゝ人の御事、まづ思ひ出でられて、この人の御あたりの塵ともなさまほしう、この御手習を見るまゝに、

中將　たましひの通ふあたりにあらずとも結びやせましし　したがへの妻

人のまねびし事を、筆のすさびに」とまぎらはし給ひて、何やかやと世の物語をし給ふついでにも、あやな長かるまじきこゝちのみするを、心より外に知らず顔にて過すさまなど、けに物心細げにおぼしたる氣色などの、すゞろになつかしういみじうのみ覺え給へば、中將「姨捨ならぬ月の光はあり難うこそ侍れ。思召すだに隔てずば、慰め參らせてむかし。いふとも人に」などいふさまも、なべての人よりはをかしきに、かの身によそへられたりけむ妹の姫君も、いかやうにやと思ひやられ給ひて、ゆかしき御心たえず。狭「いみじう事あり顔にもいひなし給へるかな。この心得給へる方ざまにはあらで、見給ふやうに、事にふれて世のいとはしき癖のつきけるが、我ながらもあはれなるぞや。けに羈絆などのあながちなるなどがあらば、少しもや思ひ慰まし。身に添ふ影より外に、ことゝふ人のなければにやと、試みまほしうも侍れど、いさや、長からざらむものゆゑ、なか〳〵ならむほだしなどの有らむこそいとほしかるべけれ。餘りこと〴〵しう煩はしき事などはなくて、うち頼み心苦しげならむ人などを見ば

人のまねびし—「あくがるゝ」の歌は、人に聞きたるをむだ書にしたる也とぞ
まかして
長かるまじき—狭衣が何となく長生もすまじき心地するを
姨捨なちぬ—「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
いふとも人に—引歌未詳
心得給へる方さま—戀の方にはあらで
試みまほしう—自ら羈絆をつくりて其味を試みたくもあれど
餘りこと〴〵しう—手重なる相手でなく氣をゆるし得る氣に入つた女を手に入れたならば

誠に少しは命も惜しかりぬべきわざぞかし」など宣ふ氣色も、少し心得る事あれど、いでや、めでたきにつけても、思し數まへられでは、いかなる物おもひのたねとかはならむ、と思へばくち惜しかりけり。中將の扇に、秋の野を畫きて、風いたう吹かせたるに、本あらの小萩の露重げなるを、しがらみ伏するさを鹿の氣色もをかしう畫きなしたるを見給ひて、「聲の秋風は月のみつこと頻りなり」とかき給へるは、樣ことにちひさくて、

狭　わがかたになびけよ秋のはなすゝき心をよする風はなくとも

狭　心にはしめゆひおきし萩のえをしがらみふする鹿やなくらむ

「いつしか妹が」と書きすさび給ひて、さま〴〵の御才といへど目も及ばぬに、これは、すこし物見知らむ女などの、目とどめぬはあらじかしと見えたり。

中將　招くとも靡くなよゆめしのずすき秋風吹かぬ野邊も見えぬに

中將　おしなべてしめ結ひ渡す秋の野に小萩の露もかけじとぞ思ふ

など書きて見せ奉れば、狭「あぢきなきさかしらかな」と笑ひ給ひて、狭「色どる風は」と

少し心得る—合點のゆく事もあれど、わが妹の事と合點したるも也
いでや—中將の心、よい事ではあれど、狭衣にはあらば
厭きられたらば又心配の種になるべしと
かき給へるは—誤あるべし
わがかたに—花薄を妹に喩へたり
心には—妹君は我かねて心をかけしに誰が手に入れて仕舞ひしいつしか妹が事やら
「さを鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕をせん」
招くとも—滅多に人に靡くな
厭きられぬ女も無ければ
もしなべて—狭衣は浮氣なる故わが妹は關係させたくなしとの意
色どる風は—「秋萩を色どる風は吹きぬとも

心はかれじ草葉ならねば」

頼ひ聞えたるを―其方の妹に心をかけたるを竹の中も―かくや姫なりとも求めて、其をほだしに我を此世に引留めんとも思はぬのかこの定にては！君の御浮氣の樣子ではかくや姫を求め出しても無效ならん竹取の翁―親たちに妹の一條を承知させては呉れぬか野邊の小萩―妹さかしらに―成なを口を挿かしそて取持て―餘計あり難げまずし立はむつうに中なるには―妹には

口ずさび給へる愛敬、なほ〳〵この御あたりの塵ともならまほしげなり。狭「まめやかには、昔より頼み聞えたるを見も知り給はぬこそ心憂けれ。竹のなかも尋ねて世に暫しかけとどめさせむなども、思さぬなめりかし」と恨み給へば、中將「いで、その翁も、この定にては、いとむとくにこそは侍らめ」などいふ程に、さるべき人々あまた參り給へれば、物むづかしき紛らはしにとて、文作りなどして、夜もすがら遊びあかし給ひけり。二三日ばかりありて、かの中將の許に、

狭　うちつけなる樣に思すべけれど、かの聞えし竹取の翁を語ひ給ひてむや。野邊の小萩もさていかゞ。頼み聞えてなむ。これもさかしらまぜ給はで。

とて、中にあるには、

狭　一方に思ひみだるゝしのずすき風のたよりにほのめかしきや

とある、返事はなくて、

中將　竹取にはほのめかし侍りしかど、いとあり難げにこそ。中なるには、思ひ落されさせ給へるにや、扇もちらし侍りしかど、

吹きまよふ風のけしきも知らぬかな萩のしたなる蔭の小草は

口惜しげなるさまにこそ。これも一つ方につゝみ侍りて。

とあるを、げに少しいはけなき程にやと思しやる。

九月には、峨嵯の院の入道の宮の作らせ給へる、法華の曼陀羅供養ぜさせ給ひて、やがて八講行はせ給ふ。その程は殿も日々に參らせ給へば、ましてさらぬ上達部殿上人など參らぬなし。朝夕に替る講師どものえりすぐらせ給へる、おの〳〵年頃心を盡しける實の學問の程、見ゆべきたびなれば、心を盡したるしるしありて、尊くめでたきに、問者どもの劣らじと爭ふ口强さどももおもしろく、聞き所あること限なし。宵曉の懺法などにも、聲すぐれたるを擇らせ給へれば、哀れにたふとし。西方念佛の折は、蓮の花の色々散りまがひたるに、名香のくゆりあひたるは、極樂もかくやと推しはからる。宮いとどまほろしの世をそむき棄てさせ給へるのみ、嬉しくおぼしめされて、御心のうち涼

扇も―かの御歌書かれたる扇をも見せたれども

九峨嵯院の法華八講、狭衣女二宮に心緒を語る八講―法華經の論議を聞く儀式　問者―講師に問をかくる役の僧　懺法―惡事を懺悔して再びせざらん事を誓ふ法　西方念佛―西方淨土に生れんことを願ひて唱ふる念佛　宮―女二宮

澄みがたう―是にのみ道心が鈍りそうに女二宮も思はれたり
わたし聞え―女二宮の方へよこしてある故心のもよほし―狹衣や女二宮の思の種
果の日―八講の最終日

しう、一心に行はせ給ふに、大將日々に參り給ひて、人よりけに濡らしそへ給ひつゝ、忍びあへ給はぬ袖のけしきぞ、澄みがたう思しわびける。若宮もこの頃はわたし聞えさせ給へれば、内外まぎれ歩かせ給ふは、げにいとどしき心のもよほしなり。この程の有様、をかしきも尊きも、こまかならば夢のしるべのまねしたるになりぬべければ、皆漏しつ。

果の日は十三日なれば、月の光さへ隈なくて、兜率天までいとやすく澄みのぼり給ひぬべかゝめり。嵯峨野の花やう〳〵さかり過ぎて、女郎花色變り、尾花の袖も白みわたりつゝ、心細げにうち招きたるに、露は重げにきら〳〵と置きわたりたるは、如意寶珠かと見えわたされたるに、蟲の聲々さま〴〵にて、懺法阿彌陀經にうち添へたるは、伽陵頻伽の聲にも劣らず、たふとくあはれに聞ゆ。事果てて、僧どもも人々も皆まかり出でて殘りなく、人目かれぬるこゝちするに、大將はえまかで給はず。川霧さへ麓をこめて、道妨げに立ち渡りたるに、堰せきに漏りわづらふ水のおとなひも、いとどむせ返り、物の

伽陵頻伽―極樂に居る聲よき鳥の名

大井川―我は昔の戀を忘れずながら事情は變りはてたる世に、堰のみは昔の儘にて年を經たるよ
我所有云々―譬喩品の句
障らせ給はざンめり―暗きをも構はず狹衣の所へ來たがり給ふ
例―いつも我を抱いて下されぬ
わが恐しとろ―若宮自身が恐ろしく思ひしならんと

み悲しければ、やがて川の上に作りかけたる釣殿に、つく〴〵とながめ入り給ひて、

狹　大井川るせきはさこそ年經ぬれ忘れずながら變りける世に

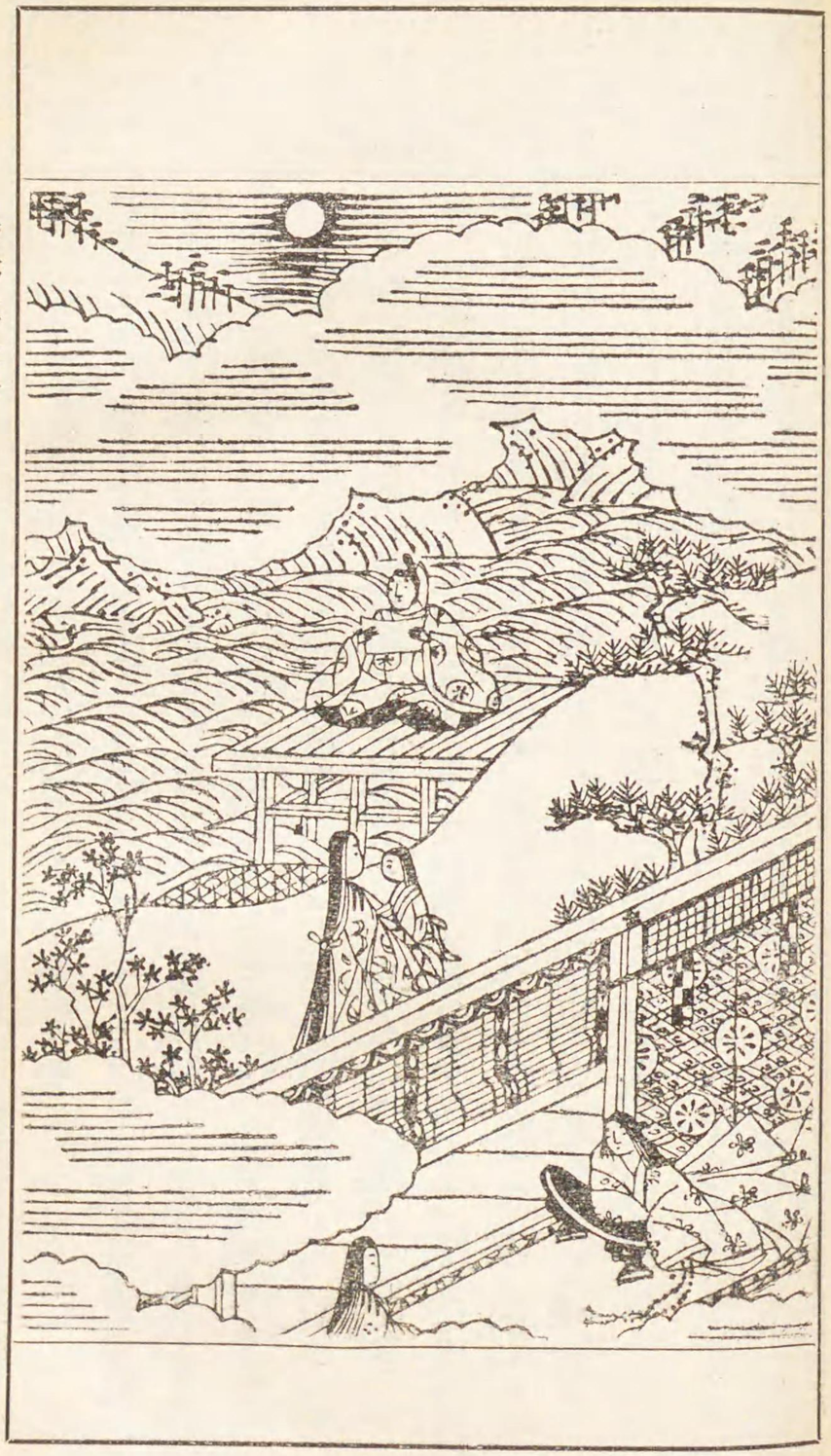
などひとりごち給ひて、狹「我所有福業今世若過世及見佛功德盡廻向佛道」と、うちあげて讀み給へる、日頃聞き給へるさま〴〵の尊さにも似ず、身にしむ心地ぞしける。この御聲をきゝて、若宮の出でむと騒ぎ給へば、宰相の乳母いだき奉りて、そなたの渡殿に參りたり。乳母「今は御殿ごもりねと聞ゆれど、御聲を聞かせ給ひて、暗う侍るにも障らせ給はざンめり」といへば、立ちよりて、狹「今宵はまかで侍るぞ。宮の御前に御殿ごもれよ。明日參らむ」と宣ふを、若宮「宮は佛の御前にて經よみ給ふなり。例もいだき給はぬぞ。唯いざ二人ねむ」と宣ふを、いとかなしう哀れにて、狹「あな心憂の事や」と語らひ給ふついでに、狹「みそかに、宮のおはする御堂の妻戸放ち給へ。佛の御前のゆかしきにのぞかむ」と宣へば、若宮「何のゆかしきぞとよ。不動尊の恐しげなるに食はれむとや」とおどし給ふ氣色、わが恐ろしと思しけると見ゆるぞいとをかしきや。狹「されば、みそ

宮―女二宮

少しのぞきて―少しはづれて

思召しつるに―女二宮が

かに、知らせでのぞかむと思ふぞ」と宣へば、若宮「格子もおろさでこそありつれ。いざ見せむ」とさゝめき給ふうつくしさぞ、世の常ならぬ。狭「それはなほ不動尊見つけ給ひてむ。西の妻戸を放たせ給へ。さて、人に斯うとな宣ひそ」と、おとなしう語らはれて入り給ひぬるも、いかなる事し給はむとあやふけれど、西おもては月も暗ければ、やをら入りて戸のもとに立ち給へり。宮、この程は、佛の御前にのみさぶらひ給ひて、百萬遍滿て給ふなりけり。御格子もいまだまるらで、みあかしのほのかなる方に、御几帳おしやりて、障子より少しのぞきて、脇息におしかゝりて、小倉の山も残りなき月の光をながめやりて、行はせ給ふ御すがた、肩つきなど、人よりは細くちひさやかにて、御髪のゆら〳〵とこぼれかゝりたる裾のけぢめ見えぬほどの月影は、いひしらず美しうらうたげに見えさせ給へるに、數珠の、脇息に時々引き鳴らされたるなど、今宵始めたる事ならねど、なほ飽かずくち惜しう見えさせ給へるを、まして明暮ゆかしがり給ふ人に見せ奉らばやと、中納言のすけは見奉る程なりけり。人々も出で給ひぬると思召しつ



ありつる御經の聲―狭衣の經よむ聲

そゝきありき―せはしく歩き

さて例ならず―狭衣に言はれたる故に、いつになく女二宮になつきたるのぢやな

紛れありき―若宮が心やすき―容易にはづるゝかけがねと見えて見やり給へれば―女二宮が佛の障子口に―佛間の襖を立てきりたるなりありし寢覺の床―狭衣が女二宮に忍び入りし時の事

るに、ありつる御經の聲にぞ例の胸つぶれて、御格子もまゐらせ給ひてけり。いつも、わざと召さぬかぎりは、近う參る人もなければ、御障子のうしろに、中納言のすけのみぞさぶらふに、若宮おはしてそゝきありき給ふを、すけ「まだ御殿ごもらざりけり。大將殿は出でさせ給ひぬるか」と聞ゆれば、乳母「慕ひ聞えさせ給ひて、まだえ御殿ごもらぬに侍るめり」といへば、すけ「あな心苦しの事や。などかはとまり給はずなりぬらむ」とて、抱き奉れば、若宮「今宵は宮の御まへに御殿ごもれ、つとめて迎へに來むといひつるや」と語り給へば、すけ「さて例ならずなつきまゐらせ給へるなりけり」とて笑へど、宮は見もおこせ給はず。こゝかしこ紛れありき給ひて、心やすきかけがねにや、はなちおき給ひてけるを、誰かは知らむ。戸のやをら開くおとして、ざと匂ひ入りたる追風も、まぎるべうもあらぬに、唯何とも思ひあへず見やり給へれば、冠の影ふと見ゆるに、物も覺えさせ給はず、佛の障子口に入りて引き立てさせ給ひぬるも、手のみわなゝかれて、頓にぞ立てられぬ。かのありし寢覺の床に、ぬらし添へ給ひし濡衣おほしいでられて、

今宵さへ―女二の心、今夜もまた其樣ならば

伏籠の少將―此頃行はれし小說中の人物

引入れさせ給ひて―女二が恨めしう―狭衣がたてさせ―障子を

かけられ―かけられがねをかけられたかと狭衣があなたは―女二の入り居る處は三方壁になり居りて外に出處なき故安心して隔なうとまでも―是以上君に近附かんとは思はず

憂きを知らぬさまにて―今迄出家もせず

思召し疎まる―御嫌ひなさる樣な擧動は決して致しますまい

眞木の戸の心ばへ―思ひかけず開きたる戸により忍び入りたる時の心持

今宵さへ然だにあらば、やがて斯くながら伏籠の少將の樣にもなりなむと、心惑も世の常ならぬに、御衣の裾も殘りなう引入れさせ給ひてける御心の疾さも、限なく恨めしう悲しきに、この障子もひき破りつべう覺ゆれど、胸のみ騷ぎてとみにぞ動かれぬ。宮はかしこう入り果ててたてさせ給へるに、わだゝと震はれて、遠くもえ遁れ給はず、やがてうつぶさせ給へり。かけられぬるにやと思ひ給ふに、宿世心憂くいとゞ覺ゆれど、あなたは塗籠と見れば心安くて、隔などもやぶり給はず、唯さながら寄り居給ひて、とばかり物も宣はず、涙のみせきやるかたなければ、押へてためらひ侘び給へり。狭「これより隔なうとまでも思ひ給へかけずなむ。唯かばかりにても今一度聞えさせてこそはと、憂きを知らぬさまにて過し侍りつるを、唯心安くおぼしめせ。身に從はぬ心の悔しさも、こゝらの年頃皆思う給へ知りわたれば、又思召し疎まるばかりの心の程は、よもつかひ侍らじ」とて、かの思ひかけざりし眞木の戸の心ばへよりうちはじめ、今宵まで思ひ歎く心の中を、泣くくしめゞくといひ續け給へる、まねび盡すべうもあらず。狭「かばか

故宮―女二の母　嶺の若松―若宮の生れたる時の祝の歌、前にあり

言ひやり給はぬぞ―「給へぬぞ」の誤なるべし　かくればとは―「我が思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづしぐるらん」

見しにも似たる―反故に女二が書きたる歌、中納言のすけが拾ひて見せたる也

かやうにもや―此様な機會もあらんかと待ち構へ居たる故　千世ふる末も―未來をも此人に任する心持になるべし　又聞かじ―再び狭衣に逢はじ

り物思ふ人の生けるためしには、げにしつべう聞ゆる中にも、故宮の、嶺の若松と人知れずおぼし祝ひけむと、ほの聞きて傳ふる人のありしを、聞きつけたりし心の中を、えも言ひやり給はぬぞ。かくればとはまことにや。恥かしさもおなじ涙に流れ出でぬべし。又思ひ侘びて、かしこう尋ね參りたりし雪の夜の、枕の下の釣舟に思ひこがれて立ち歸りしに、聞きつけたりし鶴の一聲の後は、いかさまにして、雲井の餘所にはなさじと思ひししるしにや、今はうき世のほだしにて、かくかけとどめられ侍る程に、心より外なる事も侍りて、見しにも似たるとありし反故を見侍りしは、人やりならず生ける心地もし侍らねど、その後にも唯かやうにもやと、待つに心をかけ侍りつれば、今ぞ心のうち少し涼しうなりて、年頃の本意も遂げ侍りぬべかゝめる」など、すべてまねびやるべくもあらぬ事どもを言ひもやらずむせ返り給ふには、過ぎにし方の憂きもつらさも忘られて、千世ふる末もかたぶきぬべし。されど宮は、夢にだにかばかりのけぢかき程にては又聞かじとおぼされしに、いと物おそろしうて、いかにも〳〵、え動かれさせたまはぬ

これより隔なき―是以上女二に接近せん積もなかりし故　かけられ―かけがねを

聞えさする事ども―申上ぐる事ども　藻刈舟―斯く疎まれては思ひ切り悪くなりて君を恨めしく思ふ様になる、うちみ―恨み、浦見、あま―蜑、尼　今宵ぞいかゞ―今夜こそは歎きに死ぬかも知れぬと危ぶまる　袖ぬらすといふ物語―今傳はらず　ねにさはる―承香殿女御の歌なるべし

を、男君、これより隔なき程などまでは、おぼしも寄らざりつれば、これをこの世の思出にて歎みぬべけれど、うち身じろき給ふ氣色だになきは、あさましう覺束なきに、思ひ侘び給ひて、障子を探り給へば、かけられにけり。いとゞ恨めしう心憂きに、思ひ侘びて、たゞう紙さし入れて、障子のかけがねを探り給ふに、離れぬるやうなれば、狭「唯少しあけて、聞えさする事どもは聞かせ給はぬにや。いかにも〳〵、御けはひを聞き侍らば、少しも慰みぬべきを、あさましうも侍るかな。いと斯くてはなか〳〵過もしつべうこそ。

狭　藻刈舟なほにごり江に漕ぎかへりうらみまほしき里のあまかな

いかにも〳〵宣はせよ」とて、御手を引きよせ給へるに、いかに死にせぬ歎きしたまひつる、今宵ぞいかゞと覺えぬる。袖ぬらすといふ物語の、承香殿の女御も、あはれなる心ばへを、見つけ給ひたりければにや、「ねにさはる」とも言ひ出で給ひけむ。これは唯、

のこりなく―散散泣きを見せられた我を、又繰返して恨まずともよからんに

思ししみたる方―狹衣が源氏宮に思をかけたる事

おぼし憚る―狹衣がおぼし返して―狹衣がよろづ盛―狹衣の心

思ひ定めたる樣―一品宮を娶りたる樣子

同じさまにて―出家もせずに餘所にて―女二に逢はずして我この御身―自分が女二の身になりて考へれば

女二のこりなくうきめかづきし里のあまを今くり返しなに恨むらむ

とぞはつかに思ひ續けられ給へど、唯一言葉もいらへざらむ前に疾く死なばやと思すに、まことに消え入り給ひぬべき御けはひの、あるか無きかなるなど、唯昔ながらにて、いひ知らず心ぐるしげに、らうたげなる御有樣のなのめならず　過ぎにし方は、心に深く思ししみたる方のありしかばこそ、よろづおぼし憚るかた多くてやみにしか、今となりては逢ふは限なき御心の中を、かくあながちに近づきより給へる、なか〳〵に心惑も世の常ならねど、あながちに心づようおぼし返して、とかうも聞え惱し給はぬに、唯御髮のかぎり所せかりしを、いとふさやかに手にさはりたるぞ、なほいみじき心騷ぎなりける。よろづ盛惜しげなる御身の有樣を、やつしすてさせ奉りて、我は知らず顏に、今はと思ひ定めたる樣をさへ聞かれ奉りたるよ、なほ同じさまにて世にありと聞え奉るは憂き事かな、とおぼし續くるに、餘所にてこゝら思ひ歎きつるは數にもあらざりけり。我この御身の程にて思はむに、なほ〳〵いひ知らず憂かるべきわざかな、とわが

八千返り―幾度悔みても效なければ此儘にては世に立たぬ積故我が仕方を見て居給へ、くひま―杭間、悔人の御袖―女二の袖

この御氣色―女二の樣子

悲しければ―狹衣が心やすきまゝには―涙はいくら溢しても憚りなき故

後夜起―後夜の勤の爲に起き出づること

こなた樣にぞ―女二の居る方に來て彳み居らるゝ

げに今更に―狹衣の心立出でぬべきにしも―立退かねばならぬにつけても

心にだに思ひ知らるゝに、悔しう悲しうて聲も立てつべし。

狹「八千返りくひまの水もかひなきによし見よおなじ影や見ゆると

唯今宵ばかりこそは、かうまでも聞えさせめ」とて泣き給ふさま、人の御袖さへしぼるばかりになりぬるに、この御氣色もいといみじげにて、御衣のうへまでとほり出で、汗もこちたきに、狹「何事も皆ことわりに思ひ給へ知りたる身の、あやまちとは言ひながら、又斯うむげに思し捨てらるべき契の程には侍らぬを」と言ひいで給ふも、中々つらきふしげき心地し給ふに、唯いひやらむ方なく悔しう悲しければ、心やすきまゝには、涙のみこそ蜑も釣するばかりになりゆく。中納言の佐、いとかゝる御氣色を、心苦しう思ひあかすに、院の後夜起の程にもなりにけり。うち行はせ給ひつゝ、例のこなた樣にぞたゞずませ給ふなる。宮あるかなきかなる御心にも、いとゞいみじげに思し惑ひたるげに今更に便なき事と思へば、立出でぬべきにしも、いとゞ今は世にあるべき心地もし給はぬに、これやかぎりと思ひ閉め給ふにぞ、なほ世の常ならぬ御心惑なりける。

頓にもゆるし―捉へたる手を放さず　さくりもよゝ―はげしくしやくりあげて泣く事の形容　引きすべして―握りたる袖をすべらせ離してありか定めたる―動かぬ　待て暫し―山の端を分けて入る日よ、我を伴ひて此世を去らしめよ　年頃は―以下狹衣の心情を説く　誠しう―實際人を恨めしく思ひ悲しく思ひし事はなかりしに

狹　後の世の逢ふせを待たむわたり川わかるゝほどは限なりとも

とて、御袖は頓にもゆるし給はず、さくりもよゝとは、これを言ふにやと見ゆるに、院もいと近くおはしませば、心にもあらず引きすべして、立出で給ふ。魂はやがてあくがれ出でぬるこゝちして、よべ入りし妻戸を押し開け給へれば、入方の月隈なくさし入りて、一方にありか定めたる雲のたゝずまひ、言ひ知らず心細げなるに、まことに心は空になり果てぬ。

狹　「待て暫し山の端分くる月だにもうき世に暫しとどめざらなむ

誘はば」などながめ入りて、とみにもえ立退き給はぬ程に、月も入り果てて、霧のまよひたどゝしき程にぞ、辛うじて出で給ひぬる。世にあるべき程は、げに心より外にすぐさるゝわざにや、引き返さるゝ心地はしながら、殿にぞ歸り給ひぬる。

年頃は、心づからの物思にこそ安からざりつれ、誠しう人恨めしとも、あながちにあはれ悲しとも、おぼし知らむことは、何事にかはあらむ、今宵は、あはれなりつる御髪の、

思ふ方一つ―好色の方　わが心一つ―自分の心のみには之をせめての慰みに思へど女二には此心は通ぜざるべし、「一つにこそ思ひ慰め」とあるべし　今は思ひ返し―女二が思ひ入り給ひにけむ人―女二の故母宮　あさんづのはし―催馬樂「あさんづの橋の、とどろ〳〵と降りし雨の〻ふりにし我を、誰ぞこの仲人立てゝ、みもとの形消息し、とぶらひに來るや、さきんだちや」

手あたりのみ心にかゝり給へり。唯思ふ方一つの口惜しういみじきのみにもあらず、情なきものに思し出でられてやみぬるを、今ははるけやらむ方なきかはりには、又わが身も誰故かばかりそむき難き身を背きすてむとだに、わが心一つ思ひ慰め、かの御心にはいみじう聞え知らすとも、それを誠ともおぼさじ、かゝりける心を、あはれと今は思ひ返し給ふべきにもあらず、唯やつし難き身をたちまちに剃りすてて、佛はあはれとおぼしめして、かの一きは憂しつらしと思ひ入り給ひにけむ人の、惡業の離れ給ふべきしるべとは、必ずなりなむかし、と偏にぞ思立ち給ひぬるにも、いひ知らず物のみかなしければ、慰に、かたはらなる琵琶を引きよせて、わざとならず彈きすさびつゝ、「あさんづのはし」と謠ひ給へる聲など、我ながらも、げにおぼろげならず、やつし難うおぼし知らるべし。殿も御目さまし給ひて、堀川「大將はこゝにこそありけれ。よべは嵯峨の院にとまるべしと聞きしを、などか斯うとも言はざりけるならむ。いとほしき宮の御事をいへば、忍びかくるゝこそあやしけれ。世を心にあかず思ひたるを、思へばあぢきなしや」

内々にも言ふなり―狭衣がことの外なる心づかひ―内々女二宮との中を再び温むる樣の事はせじ　人奉り給ふ―狭衣が見えぬ山路に遁世もしたけれども中納言のすけに用事もありし故、「世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」　命さへ―物思の盡きぬと共に命迄がなまじ盡きぬが恨めし　參らすれど―中納言のすけが女二にいとあさましう―女二の心疾く迎へ―女二が佛に願ふ趣意

とて、人やりならずうち歎きつゝ涙落し給ふを、上も、母宮「なほいたうな宣ひそ。斯うのみあらば、世にもえあり果つまじと、内々にも言ふなり。ことの外なる心づかひなどは、よも物せじ」など、二所していひ歎かせ給ふ。

つとめては、いと疾く、嵯峨の院に人奉り給ふ。

狭　なか〳〵なりし心惑ののち、やがて出立ち侍りつる。見えぬ山路も、なほいつしかと語らひ侍りし人に、言ひ置くべき事ども侍りければ、心弱くとまり侍りて、今朝は悔しき事いとゞ數添ひ侍りにけり。

などやうに、細にて、

狭　命さへつきせずものを思ふかな別れしほどに絶えも果てなで

とあるを、例の廣げて人間に參らすれど、今更にあまごろものつまばかりも手馴れ給はじ。いとあさましう憂き身の、今まで長らへてける事とおぼしめすに、佛もつらう悲しうおぼされて、唯、疾く迎へ給へ。かゝる目な見せ給うそ、と一つ心におぼし入りて、

十神樂の夜狭衣明星を謠ふ　一方に思ひ立ち―出家の志をかためたれば　もとの雫―「末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらん」　阿私仙人―故飛鳥井姫君の兄の僧　あやえ―未詳、誤あるべし

外ざまにも向かせ給はねば、いとかひなし。

大將殿も、一方に思ひ立ち給ひぬれば、萬いとかりそめにのみ思されて、常はさしも目とまらざりし木草につけても、あはれのみまさり給ふ。まして殿、上などのおぼし惑はむ有樣などは、おろかに思しおかるべきにもあらねど、「もとの雫」はいつとてもおなじ事なれば、五濁惡世を疾く免れて、かの契り給ひし阿私仙人につかへむ事をのみ、人知れずおぼし立ちながらも、霜月にもなりぬれば、齋院のあやえの程いとゞ見すて難くて、御神樂の夜にもなりぬ。例の上達部殿上人など參り集ひて、御前の庭火おどろ〳〵しうて、晝よりもさやかなり。御几帳のかたびらども、菊の二重織物の色々、うつろひたる枝さしも、誠に咲ける籬と見えたり。女房の袖口どもは、紅葉重の擣ちたるどもにおなじ色の二重織物のうはぎ、りんだうの唐衣の、地は薄きに、紋はいと濃く織り浮かされたる、夜目おどろ〳〵しう淸らに見えたり。さま〴〵のものの音ども吹き合せて、笏のおとも、こなたかなた打鳴らしたるなど、外の遊には似ず、そゞろ寒く聞ゆるに、

人長―神樂の舞人陪從等の長「其駒」―神樂歌「其駒ぞや我に、草こふ、草は我に草かはん、草はとり、草はとり、水はんや、水はとりかはんとりかはんや―脱ぎかけたる―舞ふ時に衣を脱ぎかけたる―才の男―餘興に藝をする人々―うるはしうて―眞面目にして―うちすがひて―反對にがみ出でたる―苦い顔して出―思立ちたる―出家をあるまじき事―女を戀するなど―明星―神樂歌「きくりく、せんざいやうびやくしゆとう、ちやうせつしんてう、しやうう、げや、あかぼしは明星は、くはやこくなりや、何しかもこよひこの月の、たごこたにますかこ

篁簗のすぐれて響き出でたるは、なほいとおもしろし。人長、「其駒」舞ひて、脱ぎかけたる火影、いとまばゆげなるを、つれなう才の男ども召しいづれば、若き殿上人などはいとまばゆげに思ひて、いとうるはしうて歸るもあり、又うちすがひて、愛敬づきもてなすなどもありつゝ、樣々をかしうもありける。更け行くまゝに雪折々ふりつゝ、木枯荒々しう吹きしきたる、庭火もいたうまよひて吹きかけらるゝを、拂ひ侘びつゝ、煙の中よりにがみ出でたる、主殿司のものの顔ども、いとをかしく見やられ給ふにも、例の

狭　おぼろげに消つとも消ゆる思かは煙のしたにくゆり侘びつゝ

など、思ひ續けられ給ふに、今日明日と思立ちたる心の中には、いとゞあるまじき事と思ひ離れ給へど、それにつけてしもなほ安からず覺え給ふも、我ながら心憂し。

曉になりて、事ども皆はてぬる。さるべき上達部など、うけばりて遊び給ふさまは、さはいへどなまめかしうをかしきに、大將の「明星」謠ひ給へる扇の音なひも、なべてならず面白きを、神も耳とゞめ給ふらむと聞ゆるに、うち添ふる聲々ぞ、心おくれたる

こに、只こゝにまするや―押し出で―簾内より押し出して給はる也　■狭衣出家の志を決し、竹生島詣と稱して家を出でんとす　まつはし―馴親みまさり殿も上も―父も母も―若宮を我と等しく愛し養ふべければ忍草―飛鳥井腹の姫君―おぼし隔てたる―一品宮が親しまぬ様に見ゆる故跡絶えなむ後―出家の後に―彼の子なりなど大暑を話して、一通の養子同様にせず大事にしてくれよとぼんやり話したり忽に―突然一品宮に斯く〳〵と明すべきにもあらずと―ゆかしいみじと―母宮が心のどかに―狭衣がゆつくりして居て思ふさまに―出家して仕舞ひたちば駒のつまづく―家を思へば乗る駒つまづくといふ諺あり常のことぐさ―狭衣の口癖なる命は風前の木の葉といふ譬は見果つまじき―末遂げぬ積なれば　■暇乞に齋院に参りて琴を彈く、神殿鳴動の奇特　挑ませ給ふ―狭衣と技倆を競ふうちはへて―引續き

様なりける。明くるまで遊びてまかで給ふに、取りあへたるに従ひつゝ、細長小袿ども押し出でさせ給へる、皆被け渡させ給ひけり。

かやうなる夜のまぎれどもさへ過ぎぬれば、忍びて竹生島に参り給はむ事を、人知れずおぼし設くるにも、若宮の日を経てまつはしまさり給へるぞ、いといみじきほだしに思されけれど、殿も上も、我よりおろかに、思ひ給ふべくもあらざンめれば、さりともとぞ心やすきを、さすがなる忍草ぞ、なか〳〵尋ねより給ひてしも、宮おぼし隔てたるさまに見奉り給へば、いとゞ跡絶えなむ後はいかなる様にてか、など心苦しきを、思し餘りて、母宮にぞ、其處々々にありしなど、委しくはあらねど、かゝるよすがの限にはあらず思召すべき様を、ほのめかし申し給ひける。上いみじう聞き驚き給ひて、かく隔て過し給ひける事と、恨み宣はすれど、狭「必ずさるやう侍りて、忽にかのわたりにも何かは、と思ひ給へれば」など聞えさせ給へど、取りもあへず涙をさへ落して、ゆかしういみじとおぼしたれば、狭「今さりぬべからむ序に」などぞ申し給ひける。一品の宮には、こ

の頃例ならず心のどかに居給ひて、思ふさまになり果てなば、いかに思出なくあさましかりし心の程とおぼし出でむと、流石にかたじけなき御身の程を、心苦しう思されながらも、駒のつまづくばかりはあらねば、唯、狭「數ならぬ身ながらも、長らへてだに御覽ぜられまほしきに、命さへ有り難う思ひ給へるこそ」など心細げにおぼしたるを、常のことぐさになりにたる風の前の木の葉は、見果つまじき心ざまなれば、かやうに耳ならさするにこそは、と心得させ給へば、耳もとゞめさせ給はず。

暁に出で給はむとての暮つ方、齋院に参り給へれば、上もこの御方にて、琴の御琴彈かせ奉りて聞かせ給ふなりけり。御覽じつけて彈きやませ給ふを、狭「久しう承らぬに、なほ」と申し給へど、他事よりも挑ませ給ふ事なれば、聞き給ふには、例も彈かせ給はねば、いとくち惜しうおぼさる。母宮「神のこの頃夢にうちはへて見え給へば、いと恐ろしうて、常よりも祈りどもせさせなどするを、かゝる程は精進にてものし給へ。何がし僧都の今年までは京にも出づまじかゝなるを、山に七日ばかり籠り給ひて、心のど

護身―僧都に加持させて身を護らせ給へ
今宵ばかりとは―狹衣の心
いつを限に―何時まで生きさせる積て其樣に大事にはせらるゝぞ
世皆云々―隨喜功德品の句
もほゐの物語―今傳はらず
限の道―死期
對へ―母宮が聞えおかまほしき―齋院に言ひ置きたき
世やつきぬらむ―「あはざりし涙のもろくなりゆくは世やつきぬらん時や來ぬ音無の瀧は―こちへて言はずに居る思は

かに護身せさせ給へ」など宣はせて、いとゞゆゝしう思したるを見奉り給ふに、今宵ばかりとは知り給はぬぞかし、明日の唯今などは、いかばかりおぼし惑はむ、と思ひ續けられ給ふに、御いらへも聞え給はず、涙こぼれぬべきも、心弱く口惜しき心かなと、つれなくもてなして、狹「いとよき事にこそさぶらふなれ。いつを限にかは惜みとどめさせ給はむ。世皆不牢固とすゝめ給へるものを」と宣ふを、母宮「まろが侍らずなりなむ後の事は知らず、見奉らむ程ばかり、かゝる事な戯にても宣ひそ。おほゐの物語のやうならば限の道にも、え見すて給はじとこそ覺ゆれ」とて、うち涙ぐみ給へるまみの、親とも覺え給はず若う美しげにて、いとかう思したるを見奉らずなりなむずるぞかしと、今日は常よりも目とまり給ふ。

暮れぬれば、對へ渡らせ給ひぬ。御送にさるべき人々も參りて、近うはことに人もなきに、獨居給ひて、つぶ〳〵と聞えおかまほしき事どももあれど、なか〳〵にいみじうのみ思されて、唯、狹「世やつきぬらむ」とのみ口ずさびて、長押により居給へり。音無の

心よりほかに―けしからずと思召すか
今は限の―彌出家といふ際になりても御心は動くまじ
言の葉に―人の情ある詞一つで助かる命もあり
といふ事
つらきは―つらく當らるゝは却て佛道に入る手引となりて
事なしびに―何げなげに
あさましき御心ばへ―狹衣の戀情
斯くならせ―齋院になりて後は
もらし出で―狹衣がさやうにも―出家せば

瀧は、漏り出でそめなば、せきとめむ方あるまじけれど、なほいと胸痛き心地すれば、狹「世を厭ふ心は程經侍りぬれど、誰もかうのみ、戯言をさへ忌々しきものにおぼし宣はすれば、心より外ならむ命だに、かけとどめまほしく思ひつゝ、憂きを知らぬ樣にてとのみ思ひ過し侍るを、げにこそあまた年も積り侍りぬれ。昨日今日となりてこそ、遂にいかにと心細う思ひ給へらるゝを、心よりほかに思しめされむとすらむ。御前にこそ、今は限の川瀬も尋ねさせ給ふまじう侍れな。言の葉にとまる命も侍るとかや。つらきは道のしるべにて、終の世の爲には惡しうも侍らざりけり」など、事なしびには言ひなし給へど、常よりも如何に、げに思しなりたるぞと見ゆる御氣色を、院も思はずにあさましき御心ばへ御覽ぜし折こそ、いかで見え聞えじと、疎ましうゆゝしうおぼしめされしか、斯くならせ給ひて後は、思ふまゝの心の中をだに、もらし出で給ふ事はあり難うならせ給へれば、昔隔てなう思ひ聞えさせ給ひし名殘も變るべきならねば、大方につけては、おろかにも思ひ聞えさせ給はぬに、いとど誠にさやうにも思しならば、殿、上など

のおほし惑はむ有様、限あらむ御命どももいかゞと、あらましごとにだに、いといみじうゆゝしかるべきに、我も御涙落ちぬべけれど、いかにもいらへ聞えさせ給ふべき様もなければ、

齋「言はずともわが心にもかゝらずやほだしばかりに思はましかば

わざとなう言ひ消たせ給へる、げに薬師の法行はずとも、四十九日ありても生き返りぬべくぞ思さるゝ。狭「誰によりてかは、かゝる心もつきそめ侍りし。

行きかへりたどひた道にまどひつゝ身は中空になりねとやさば

忍ぶもぢ摺は猶かこち参らすべうこそ」とて、ほろ〳〵とこぼしそめたまへる御涙は、かごとがましういみじきに、御送に参りつる人々帰り参りぬれば、さりげなくもて隠して、ながめいだし給へり。月出でにけれど、なげきの蔭も、外よりはこよなく枝ざし繁ければ、心もとなげに、所々よりもりたる影、心苦しげなるに、はら〳〵と吹き拂ふ木の下風のおとなひなども、例の所には似ず、神さび物心細げにて、心あらむ人々に、見

言はずとも—ほだしとする程に我を思ふ位ならば、假令口には言はずとも我も氣を揉まずには居られぬ譯ならずや
薬師の法—薬師如來を祭り、其眞言を受持して消災除難を祈る法
かゝる心—出家の志
忍ぶもぢ摺—君故にわが思ひ亂れたるが出家の原因となれる事
御送—母宮のなげき—歎きに木をかけたり

せまほしき御前の庭の氣色を、いとどなべてならずながめ入り給へる氣色、いひ知らずあはれげなり。御前なる琴を引きよせ給ひて、黄鐘調に調べて、「仙遊霞」を彈き給へる、空に澄み昇りて、世に知らずあはれにおもしろし。院何よりも御心とゞめさせ給へる事にて、常に聞えさせ給へど、あやにくに御耳ならさせ給はぬを、かく例ならず御心とゞめ給へるさまなるも、嬉しくめでたしとおぼしめす事限なし。自らの御心にも、又しもやはと思せば、二返ばかり彈き給へるは、誠に昔ありけむやうに、現れ出づるものあらむと、聞く限の人々は涙もとどまらず。母上聞き給ふに、ありし文の折をおぼし出づるに、いとゞゆゝしければ、惑ひ渡らせ給へり。流石になどもえ聞えさせ給はず、いとゆゝしう恐ろしうおぼされて、涙を流しつゝ、近う居よらせ給ふ氣色いみじげなるに、げに風俄に荒々しう吹きて、村雨おどろ〳〵しう降りたる空の氣色、いかなるぞとものむづかしきに、神殿の内三度ばかりいと高うなりて、いひしらず芳しき匂、世の常の限にはあらず、さとくゆり出でたるに、誠にかしらの髪逆さまになる心地して、もの恐

御前なる—齋院の御前の琴を狭衣が引きよせて院何よりも—琴は齋院が何より執心にて常に狭衣に彈奏を迫れども
自らの—狭衣も再び齋院の前にて彈く事もあらじと思へば
ありし文の折—狭衣が禁中にて琴ひきし折の事
流石に—この下脱文あるべし

殿上にも―禁中に聞えたるなるべし

御前にはた―齋院は上―狹衣宮の母宮

對へ―齋院方へ

ろしき事限なし。面白うめでたかりつる物の音皆さめて、聞く限の人々目を見かはして物も言はれずあきれたり。若き女房などは動きだにえせず、死入りたるやうにて、皆うつぶし臥したり。殿上にも、さるべき上達部などあまた侍ひ給ひければ、かゝる物の音に聞きあざみ騒がぬ人なし。「さらば誠に天てる神も世におはするわざにこそありけれ。なべてならず有難き人の御ゆかりには、さまゞ珍らかなる事を、見る人も多くこそありけれ」と聞きあざむに、御前にはた、然らぬだにわりなき御物怖に、いとゞ御心地もたがふまで思しめしたれば、上も渡らせ給ひて、さまゞ思しあわてたり。

斯くのみはかなき事につけても、際殊におどろ〳〵しう、神佛も驚かせ給ふ氣色しるき御有樣を、たび毎に、殿、上は御心を動し給ふ樣、斜ならずいといとほしげなり。わが御心地にも、かゝるまゝに、この世はかりそめに物心細うのみ、思し離るゝなゝめりかし。大殿も神殿に參り給ひて、度々ふし拜みて、宮司めして、御はらへなどせさせ給うてぞ、對へ渡らせたまひぬる。堀川「すべて〳〵、今よりはこの御手ずさび、あが君〳〵

法樂莊嚴―佛法の妙味を以て神佛を慰め奉る事

思ひ立ち給ふ―出家を思ひ立てる狹衣の心の中を父母が知りたらば如何に悲むならんと

御いらへも聞え給はず―堀川が

え承らで―御病氣を知らずして

とゞめ給へ。かくのみ心を惑はし給ふは、かへりて不孝の中になり給ふらむ。いといましう恐ろし」とて、ゆゝしういみじと思したる御氣色ども、げにいと理なり。堀川「あやしうこの頃夢のさわがしうも靜かならざりつるは、かゝる事のあるべかりければなり、法樂莊嚴のためとさへなり給へるも、いと餘にもあるかな」とて、空を仰ぎ給へる御氣色などを見給ふにも、思ひ立ち給ふ心の中を見給はばいかに、と思すに、涙の落ちぬべければ、かしこまり給ふさまにてさぶらひ給ふ。山へ登り給はむ御供の人々の事など定め聞え給ふにも、はかゞ〳〵しう御いらへも聞え給はず、心騒のみせられ給ふべし。

曉に出立ち給ふべければ、狹「夜更けぬさきにまかり出でて、つとめて參らむ。今朝女院の、風起らせ給ひて例ならずおはしますとさぶらひつるも、訪らひ申さむ」とて立ち給へば、堀川「道の程も遠きに、今宵は何かは參り給ふと思ひつれど、院の然ものし給ふなれば、げに參り給はざらむも便なかりなむ」と、まれ〳〵急ぎ給へるをめやすく思されて、えとゞめ聞え給はず。堀川「こゝにも、さらばつとめていと疾く參らむ。え承ら

わざとの―格別の

急ぎ出で―若宮が姫君をのみ思ひて―狭衣が飛鳥井腹の姫君をのみ可愛がりて宮をこそ―若宮をこそ姫君にも勝りて斯くなども―出家の志を言ひ聞かす譯にもゆかねば今少し―狭衣の心泣き給へば―狭衣があやしと思して―若宮がまめだちて―眞面目になりて

で、今日も參らざりけるよし、かつ〳〵啓し給へ」と宣へば、狭「わざとの心地には侍らぬなゝめり。何か、内裏にも奏するな、とこそ候ふなりつれ」とて、いで給へば、堀「御前は誰々かさぶらふ。それかれも參れ」など、いとうしろめたう思召したるを見給ふにも、いかでかは悲しからざらむ、涙のみ先立ち給へど、立歸り給ひて、狭「若宮は御殿ごもりぬるか」と聞え給へば、ねぶたげなる御氣色ながら、急ぎ出で給ひて、若宮「宮の姫君をのみ思ひて、常にまろをば抱かぬなゝめり」と恨み給へる御顔の美しさなども限なし。狭「あなゆゝしや。宮をこそまさりては思ひ聞ゆれ」とて抱き給へるにも、斯くなども言ひ知らせ奉るべきやうもなければ、いとかひなし。今少し物の心知りたまふまで、え見ずなりぬるよ、斯くとも誰かはいひ聞かせ奉らむとする、顔などもはか〴〵しうえ覺え給はじかし、夢ばかりもおぼし出づとも、世の常のあはればかりをこそはかけ給はめ、と思ふに、いみじう悲しうて、袖も引き放たず泣き給へば、あやしと思して、例のやうにも戯れ給はず、まめだちていたう靜り給へるを、見すてて得出で給ふまじけれど、

大白牛車―佛教にて一乘教の成佛の最極徑たることを大白牛に牽かする車の速力の早きにたとへていふ、之に對して聲聞乘緣覺乘等を羊車鹿車などに喩へたり　もぼろげならず―大分よく世間を思ひ切りたる我心かなと　何心なう恨み給へる面影―若宮の

大白牛車をおぼし返すまじう思ひとり給ひてしかば、よろづに慰めおき給ひて、立ち出で給ふこゝち、おぼろげならず背き果てにける心の程かなと、われながら有難う思し知らるゝに、涙のみぞなほ心弱うこぼれける。

狭　なみだのみ淀まぬ川とながれつゝわかるゝ道ぞ行きもやられぬ

何心なう恨み給へる面影は、この世のほかになるとも、身を離るゝ折あるまじう、引き返さるゝ心地し給ひけりとぞ。

狹衣物語　巻第四之上

賀茂の神託に驚きて堀川大臣狹衣を追留むひかり亡する—賀茂明神の夢想の歌

珍しき宿世—帝位に上るべき運命

疾くこそ—早く狹衣の行方を尋ねよ

見給ひて—夢に見て

殿—堀川上—堀川の北方

とみに—直には話しも出來ず

つねの事と—狹衣が心細げに思ひ入りたるはいつもの事とは言ひながら

「ひかり亡する心地こそせめ照る月の雲がくれゆくほどを知らずば

さるは珍しき宿世もありて、思ふことなくもありなむものを、疾くこそたづねめ。昨日の琴の音のあはれなりしかば、かくも告げ知らするなり」と、日の裝束うるはしくしていとやむごとなき氣色したる人の言ふと見給ひて、うちおどろき給へる殿の御心地、夢うつゝともおぼし分かれず。如何なるさまの事ぞと思ひつゞけたまふに、昨日の琴の音とあるは、たゞ大將の御事ぞと心得給ふまゝに、ものもおぼえずおそはれ給へる御けしきのいみじきを、上もいかなる御事ぞと思し騷ぐに、とみにえぞ聞え給はぬ。とばかりありて、辛うじて、堀川「しかぐ夢ともなく見えつる。いかなる事ぞ」とかたり聞え給ふ。上の御心地、まいて世の常ならむやは。母宮「つねの事と言ひながら、昨日の氣色など猶あやしく目とまりしを、などてよべもとゞめ聞えずなりにけむ。常磐にて、例もせ

堀川の院―狭衣の居所

さし出で給へる―狭衣が

如何なること―狭衣の心

させ給ふことどもの料とて、法服あまたまうけさせ給ふと、此日ごろ聞きつるも、さらばいかに思ひおきつることのありけるぞ」と、兩所しておぼし惑ふさま、片時だにいみじげなる。殿は切に思ひつよりたまひて、おき出で給へれど、さらばいかなる野山にか行きまじり給ひぬらむ、とおぼしやるに、立ち動くべき心地もしたまはねど、疾くたづねよと、賀茂の明神の敎へ給ひつるを慰にて、裝束などしたまひて、まづ堀川の院へぞおはしける。かの御かたの御門より入りたまふに、馬どもに鞍おきて、たゞいま人の出づべきにやと見えたり。大將殿もいと夜ぶかくといそぎ給ひて、出で給ふほどなりけり。殿の御車を俄に引き入れたるにおどろき給ひて、さし出で給へるを、うち見つけ給へるに、なか〳〵今ぞ涙もとりあへずこぼれ給ひて　賀茂御社の御かたをふし拜みたまひて、直衣の袖をおしあて給へる御氣色など、あやしきを、如何なること聞き給ひて、かく夜中にまどひわたりたまへらむ、と思すに、堀川「いでや、いと心憂かりける御心かな。數多あらむにてだに、すこしも取分けたらむ志のほどを見むには、いとかゝる心のほど

類だになく―外に子供といふものの無く

妻にて―北方をいふ

限あらむ―定業の命でさへ母ある間はどうかして取留め置きて母に歎をかけじと思ふべき筈かくなむ思ふと―出家したしとうつくしく相談し給はゞ無理にとめはせぬ諸共に―どうするにしても我と一致の行動を取りてくれ　自らはおくれ―自分は汝に付いて行くべければ心配はなし　今一所―母宮

はつかはじを、まいていかばかり、思ひ紛らはすべき類だになく、一日かた時も、聞えぬ程は戀しくかなしきものに思ひ聞えたるを見つゝ、いかなる方に思し立ちて、世をそむき棄てむとはいで立ち給ひけるぞ。いとよし、己をこそ思し棄てめ、妻にて、又なくおぼしまぎるゝ方なくならひ給へる御心に、見給はずなり給ひなば、片時ながらへ給ふべしとや見給ふ。限あらむ命のほどをだに、かの見給はむ程は、かけとゞめむとは思すまじうやはあるべき。佛も孝養をこそ重き事には宣ふめれ。かく不孝の御心にては、おぼし棄てつらむ道の妨にもこそなり給へ。なにごとも、皆さるべき昔の契にこそあらめ。かくなむ思ふと心うつくしう宣はば、あながちに制し聞ゆべきにもあらず。たゞ我が身は、殘なき齡になりたるに、ふり捨てられ聞えたらむも、心ひとつの悲さはさるものにて、人の見聞かむ事も恥かしく、佛のおぼさむ事も、罪さりどころ無く、かなしかるべきを、たゞ諸共にいかにもし給へ。佛のすゝめ給へるにもあらむ、如何なる方樣にも、自らはおくれ聞ゆまじければ、いとよし。今一所の御ありさまこそ、後の世にも、

御心の亂ながらは―今の樣に子故に煩惱を懷き居ては、同じ極樂淨土へ生るゝ事はむつかしかるべし

かばかりまで―是程に自分が出家を思ひ立つたるが自分でつらく

今しばしは―此分では今暫くは出家は出來ぬちしいと

心得ぬさまに―合點のゆかぬ振をしてことにもおはしまさず―格別の御容態でもない樣に

いとかゝる御心の亂ながらは、おなじところに逢ひ見奉らむ事、かたかるべかゝめり」と、いみじき事どもを、泣く〳〵言ひつゞけ給ふを、つくぐ〳〵と聞きたまふに、人知れぬ心の中を、如何にして見あらはし給ひけるぞ、と思すにも、げにこゝらの年頃、この世もかの世も、露ばかりおもひ殘すことなく思し棄てつれど、たゞ今いとかゝる御心惑を見奉り給ふには、いとかばかりまで思ひあくがれにけむ心のほどぞ、我ながらつらくいふかひなく、思し知られける。げにまいて上の御こゝろの中思しやるは、今すこし心ぐるしくて、人やりならず袖もぬらし給ふものから、かくまで聞き給うてければ、まづ今しばしは不用なゝめりと思ひ給ふに、なほ思ふ事かなふまじき身にやと、中々、忽に思し立たざりつる過ぎぬるかたよりも、いみじく口惜しともかなしとも世のつねならねど、たゞ心得ぬさまにもてなし給ひて、狭「女院の御心地、ことにもおはしまさず承りしかば、常磐と申す所に、懇にかたらひ侍るべき尼の、煩ふよし承りし、とぶらひ侍らむとて、今朝まかり出づるを、若いかなる方ざまに聞召したるにか。何事によりてか、忽

さまで―其樣に迄、出家などとまで

つれなう―空とぼけて

心憂くて―堀川が心憂く思ひて

且はいでや―以下堀川の心の―つれなき心をつれなしと我心をつれなしと狭衣が思ふなら

淨藏淨眼―淨藏淨眼は兄弟にて共に惡王妙莊嚴王の子也、母と共に王を開悟せしめん爲神通を顯はし往反遊行して見せければ父之に歸依して聖者となり花德菩薩となれりといふ

先なりなまし―先に出家すべきかつひには―到底引留めもほすべき事は出來まじ―以下例ならぬ―以下狭衣の樣態あらしにたぐへらせ―暴き風にあたらせ

却濁亂時―人間

にさまでは思ひ給へならむ」と、つれなう聞え給ふも、いとつらく心憂くて、袖をえ引きはなち給はぬを、且は、いでや、むげに後の世もかへりみず、つれなき心のほどと見給ふらむかし。淨藏淨眼の往反遊行し給ひけむを見給ひてよりこそ、妙莊嚴王も、心ぎよき三昧どもをつとめ給ひて、花德菩薩ともなり給ひけれ、まことに、かゝる序に我や先なりなまし、かばかりに思立ち給ひにければ、つひにはえ妨げ聞えじ、などは思しなりぬれど、例ならぬ狩裝束にやつれ給ひて、いかにぞや思ひみだれ給へる御樣の、ほのかなる空の光にゆゝしく見え給ふを、あさましき四方のあらしにたぐへ、こけの衣にやつし聞えてば、更に皆成佛道にも心ぎよからずやと、うちまもり給ふも、なほげに却濁亂時諸佛方便もかひなくありけるかなと、返すぐ〳〵も、悲しくもはづかしくもおぼし知られけり。夜も明けぬるまで、うちもやすみ給はず、なほ思しむせびたる御氣色の、いと心苦しく、罪うらむかしと誠におぼえ給へば、思ひかけぬ樣をのみ、かへすぐ〳〵聞え給ひ慰め給うて、れいの御方にわたし聞えなど、さりげなくもてなしたまへど、御心

の餘りに惡しき時には佛が方便を以て其相應の法を說く事　贋にもぼえ―狭衣が思ひかけぬ―出家を思立ちたる事はなき旨を出で立ち給ひにける―狭衣出發の用意せる樣子など　院の御前―齋院さきぼ―齋院の心

のうちはいとゞ亂れまさりて、胸もつとふたがり給へり。あかうなりぬれば、殿は、上の御もとに、出で立ち給ひにける樣など、こまかに書きて奉り給ひけるを御覽ずるには、いかでかは神の御心おろかには思ひ聞えさせ給はむ。院の御前ばかりには、此御夢をかたり申させ給ひけり。堀川「神殿に入らせ給ひて、いよ〳〵かゝる心思ひなほるべきさまに申させたまへ」など聞えさせ給ふ。さらば、かく思してや、琴の音も例ならず心とゞめ給ひけむ、さもなり給ひなましかば、如何にあさましからまし、と思召す。

殿には、思ひかけざりつる御夜中ありきよりはじめ、例ならぬ御氣色などを、心得ず如何なるにかと人々は思ふに、上などもわたらせ給ひて、やがて其日より、賀茂の御社にてはじめさせ給ふ御祈ども、いとこちたし。まゐらせ給ふべき日など、定めさせ給ふさまなど、何事のいかなりけることぞと、世の人も聞き驚きけり。大方の御祈ども、いつとても、この御料とおぼしいたらぬ事なき中にも、取りわきおぼし賴ませ給へる御いのりの師どもに、くはしく宣はせつゝ、一心にいのり申すべきよし、泣く〳〵宣へば、

㊀狭衣警固の嚴しきに苦む、女二宮と歌の贈答、益一品宮に疎し　御夜中ありき―堀川の參らせ給ふべき―狭衣の賀茂に參詣すべき日　この御料と―狭衣の爲と

みな驚きつゝ、心をいたし祈り給ひながらも、又、かつはさるべきにてこそはかばかりめでたき御身ながら、いとさしも思さるらめ、佛はいかゞ御覽ずらむ、と哀にぞ思しける。その後は、いとゞ片時のほども、うしろめたく危きものに思ひ聞え給ひて、ありきなどもせさせ奉り給はず、たゞ、堀川「今しばし待ち給へ。あなかしこ。おくらかし給ふな」と宣ふまゝに、涙をながし給へば、いと心苦しく、又世の人の聞きつたふらむ事の、かへりては心あさう、物狂ほしかりぬべければ、思ひかけざりし樣をのみ、かへすがへす上にも聞え給ひて、いかでか物思のさまを見え奉らじと、萬にもてなし給へば、げに中々、過ぎにし方よりも、上べばかりははれ〴〵しくなり給へれど、心のうちの口惜しさは、なほ得思しなほされず、いみじく思しなげかるゝ慰には、入道の宮にぞ、狭「後の世にさへ棄てられ奉るべき宿世にや、あさましう本意無きこゝろの中」など、すこし漏し給うて、

狭　いそげども行きもやられぬうき島をいかでかあまのこぎ離れけむ

かつは―祈禱僧どもの心　いとさしも―其迄熟心に出家を思ひ立たれしならん　おくらかし給ふな―我をおいて行くな　思ひかけざりし―出家などは思も寄らぬといふ風にのみ　後の世にさへ―死後迄も君に棄てらるべき運命にや　いそげども―我はもがきても中中此世が離れられぬに、君は如何にして容易く遁れしならん

いかばかり—我如く一方ならぬ苦勞をした者でなければ此世を出離する事は出來ぬ
見しやうに—狭衣が見た樣に言ひやりし後はこの後は—此一件ありし以後は
狭衣の出家を思ひ立ちたるも畢竟一品宮との關係を面倒に思ひての事かと父母などが考へて少しも言ひ出さず
宮も—一品宮も
思ふ筋—我より外の女を思ひ込み居る狭衣を

いひしにかはる心の程を、いとどいかにと恥かしきまで。
など書きつくし給へるを、例のほのうち見給うて、
女二　いかばかり思ひこがれしあまならでこのうき島を誰かはなれむ
など思しつゞけらるれど、はかなかりし筆のすさびも、見しやうに聞え給ひしのちは、うしろめたうて、御心のうちよりも漏し給はざりけり。一品宮に參り給はぬことをば、誰もいみじく聞え給ひしかど、この後は、さやうの事を、くるしく思しけるにやと、かけてもえきこえ出で給はず。晝のほどをだに、出で給ふをばいとうしろめたげに思ひきこえさせ給へれど、さのみ籠りゐ給ひたらむも、音聞き見ぐるしかるべければ、一品宮ばかりには參り給ひて、まぎらはしきありきもし給はざりけり。されど世の中かくれなくて、おのづから聞く人々もありて、まことしく剃りやつし給へらむやうに、惜みかなしがり聞ゆれば、宮も聞かせ給ひて、いとど心憂く思召すことかぎりなし。思ふ筋ことなりける人を、おとどなどの強ちに言ひつゝ、斯ばかりもあらすれば、思ひわびて、さまでも思ひなるにこそはあらめと、いとど恥かしく見えにくゝおぼさるれば、わたらせ給ふこともいと稀なるを、とやかくやと、なつかしく聞えあきらむべき方もなければ、たゞ心得ず見知らぬやうにて過し給ふに、あまりうちしきる獨寢は、いとど目もあはず思ひつゞけられ給ふことおほかる中にも、阿私仙の待遠に思ひおこすらむぞ、なほいと本意なき心地し給ひて、枕も浮きぬべき。

狭　このごろは苔のさむしろ片敷きて岩ねのまくら臥しよからまし
など、やすげなく思しやられける。晝はつれなしづくり給ふにこよなく紛るゝを、夜々ぞ、かくてのみは、ながらへむ事ありがたく思されける。
殿の御賀茂詣ちかくなりぬれば、舞人にさゝれたる殿上のわか君達など、心ことに思ひいそぎたり。大將殿には、ありし御夢の事など、上ぞ委しくかたり聞え給ひける。げにさしも確に御覽じけむよ。しづめがたき心の中をおぼし咎めず、しひてうき世に在らせまほしくおぼすらむ神も、御心のありがたきものから、かたぐにつらきかたにぞすゝ

さまでも—出家せんと迄思ひ詰めしならんとわたらせ給ふ—一品宮が狭衣の方へ過し給ふ—狭衣が
阿私仙—故飛鳥井姫君の兄の僧、彼に出家を約束したれば也
つれなしづくり—平氣を裝ひ
㊂堀川大臣賀茂げにさしも—狭衣の心
かたぐにつら—色々の點につけてつらしと感ずる情のみ勝ちたり